

明治四十四年四月二十二日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第六拾號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第六十號目次

論 說

- 自己に生くるの心……………宗 玄 順 吉
- 赤穂義士論……………武 部 進
- 史的警句……………浦 井 生
- 環……………薄 穂 華
- 鐘を撞く前……………田 中 浮 堂
- 旅の日記より……………水 瓜
- 四高和歌會詠草……………
- 四高俳句會句鈔……………

文 苑

時 評

- 野球部に寄す……………
- 春……………
- シヤロットの人……………

部 報

○講演部 野球部 剣道部 柔道部

雜 報

○叙任辭令……………

○據釜、瀧野兩先生を悼ふ用辭 ○時習寮より ○雪中行軍記事 ○寄贈雜誌

附 錄

○第二回北辰擬國會記事

北辰會雜誌第五十六號

論 說

自己に活くる心

(一)

宗 玄 順 吉

天晴れて氣暄に悠々として春光は四方に満ちて居る。暖烟軽く揚つて曉風地を拂ひ満山の白雲人目を眩する時花に狂ふ蛺蝶の影を追ふ時は云ひ難い快を覺ゆる。静に春色の艶に接して居る時フト秋日の悲哀が胸をつく。萬目蕭々たる秋の夕日の影を果敢ない一枚の羽根に總身の命を托して彷徨する蝴蝶を忍ぶ時凡ては矛盾である。凡ては憧憬である。「快」の底に深く沈んで居る悲愁の意味、此はさうしても解かねばならぬ問題である。廣坂通りで遇つた際貴公何うしたと問ふた時友はニヤリと微笑んで天を仰いだ。喜悅を口邊に漂せて仰いだ眼の底に悲哀の光を見せた友は依然として生の絶えざる偉大なる振子の力で走つて居るのだ。此の世に幾分の存在を認めんとするには吾人は是非共情けない人生問題に捉へられねば

ならぬと知つた時仰いで天を見た友の行爲は解けて来る。

人生問題は凡ての根底に横はつて居る。一夜の沈思にポーブラのうねりを除去した數學者も人生問題の命は取れぬと見える。史を繙けば皆此の問題に迷ひ迷ふて赴く所を知らぬ。菅公が君王一旦の知遇に感激して微臣百年の身命を抛たんと思ふた時配所の月は生の矛盾の難問に泣かした。一高の藤村君が巖頭に立つて悲喜究極の一致を説いた時百有余の精靈は後を追ふた。死は千古の問題であらう。されど生も亦千古の問題である。心に活きんとする者は心に悶ひ、肉に活きんとする者は肉に亡ぶ。刹那生活の慰安は刹那生活の不安で終つて居る。赤旗を翻して無政府主義を絶叫して居る一方には山の様な軍艦の進水が幾萬の國民を喜ばせて居る。車夫が拾錢の賃金に子供を思ふ時萬醉の快に客は凡てを超越し居る。道學先生の恐ろしい眼が輝く時肉の渴望を一夜の快に満して居るものもある。

山にあるものは高きに喜ぶ。谷にあるものは低きを欣ぶ。人が險坂を昇り行く時高きと低きとの間に苦しむ。アルコールは水の精着力が凝集力に劣るの故を以つて瀾散の現象を呈す。濃が淡に入ると淡が濃に入るとは論せない。境界分子の混亂は二力の徑庭が劃然たるに至つて初めて渾然一に歸する事を得るのだ。肉と野菜と米とで培養せられた動物が常に此の黒暗々たる間を匍匐して行く。眞面目に渡らうとすると神経衰弱になる。たゞ我々の「自己」の一切を提げての屈服か、損はれざる「自己」を抱いての超越か。樗牛は遂に現代超越の聲の後に動く。西行は飄然として一個の笠に浮世の網を外づさんとした。

高きと低きとに迷ふ時問題は依然として千古の疑問である。吾人は往々かの深い高い嚴肅なあるものを求めて意味ある生活美しい生存を欣求した者が一度人生百般に眼を放つて初めて防ぎ難い自己の荒廢に甘んじて居るのを見る。非常な興味と光明とをもたらした生の半面が自分の存在迄否定し度くなる暗黒を示して居るのに氣がつくと愕然として顔色を失うて走る。矛盾と懂着に壓迫せられた胸臆を抱いてひたぶるに走る。貴公ごうだと肩を打たれた時忽然として天を仰ぐの外は無い。

(一)

實を離れて空に走るものは遂に亡ぶ。

形は事物存在の一義である。然れ共形あつて質なき時に凡ては迷ふ。適を失ひ歸を過つて凡ては漂ふ。形は不定の色であつて又香である。實は源泉であつて又母胎である事を忘れ徒に形骸の安を希ふものは遂に亡びねば止まぬ。源泉に復歸して新生を得ん事を要求したルソーには自然てふ偉大なる實を離れた文明の假面は水よりも淡い影に外ならなかつた。實踐の意志の權威を認め初めて美的情操は「己」を飾るに至らむ。而かも實は依然として形の源泉である。感官的知覺の力に依つて僅に求め得た色と香との存續の一時的なるを忘れ色に縋り香に便る凡て者は形を抱いて永遠の暗に消え行く果敢ない跡を残す。

空を追ふて實を忘れたる宗教家は宗徒を盲動せしめ、先生は生徒を迷はし先進は後輩を迷はす。鹿瓜らしく引つ掛けられた道學者の眼鏡の裏に空の光が輝いて居る時に幾多の青年は不安と疑惑

に満ちて想界の岐路に迷ふて居る。歷山大王が地球の影を追ふため「血汐にしたんだ形骸の鐘詰」を東鷗の土に残して顧みなかつた。影を捉へんとしてアルプスの嶮を鼻にあしらつた那翁の命は消え行く孤島の夕陽の影に沈んだ。

櫻井の訣別や高德の存在は歴史の力に依つて人心の奥底に横はつて居る實を離れた影である。淺ましい學術の暗の中より飽く迄も此の史歴權威が人心に叩き込んだ印象を淡い影の様に考へる人があるならば學で欺かんとして學に欺かれた者である。後進立脚の歸趨を過まらしめんとする幾多先進の囁は皆是空を追はんとして實を離れたる不當なる犠牲を他に求むる任業ではあるまいか。史的知識や自然科学の皮を藉りて人の心にかけて代への無い實と云ふ財寶を自然的必然と云ふ様な暗黒の裡に除去し去らんとするは空を追ふて他を迷はするものと云はねばならぬ。アルコールの様に直に熱し直に消去し去る淺薄なる學者を中心として世間を騒がす問題は悉く實を離れて影を望んで居る。

自分を眞價以上に廣告して瞬時の虚榮の渴を濕さんとする者は空を尋ねて影を追ふて行く最も醜惡なる人格の發露である。實を其の儘實とはせずして空を以つて飾らんとするに至つて虚飾の假面もいつかは脱却するであらう。

空は砂上の果かなき文字である。實を離れて形に生きんとする者は遂に亡ぶ。

理想の影を空想と云ふ。空想は形成の力であつて心的事象を關聯して新なる形象を作り出して止まぬ。然れ共力は此の時に於て原動の實體を離れて居る。實を離れて風の様な力は色である唯色

の外は無い。「美」の根底に横はる悲哀は空に捉はれたる敗者の響である。過去に於て空に走つた者は現在に於いて亡び現在に於て影を追ふ者は未來に於いて滅する。

吾人は茲に於いて時の力の偉大なる中に尙看過す可からざる相對關係の中に立つて居るのを知らざるを得ない。本剽なき時間の流に架されたる一線を名付けたる現在に過去の逝きて歸らざる限り未來の辿りて尽きざる限り永遠に過去と未來とを越ゆ可からずと別つ。然れ共一步を下す時已に未來あつて未來無く。現在あつて而かも現在に無い。空想と云ふ大なるマグネットの感應に委せて人は夜晝となく過去とふ高遠なる道路を傍目もふらず辿つて行く。人が現實の曝露に泣きもがいて居る時に奸佞迷執の角を振り立て、現實は跳梁跋扈の冷笑を與ふるのみだ。

歴史を絶つた凡ての現實は暗みである。人が現實に生きんとする時とより個々の官能表象の手管によつて一ではないが此の世の存在は呱呱の聲をあげてから九泉黄土の下に送り出さるゝ迄此の歴史てふ赤い糸を辿つて初めて意義あるものである。犀川の流れも源泉の清滴を思ふた時に輝く。博文公の晩年は俊介君の昔で動くではないか。

過去と現在とを相互に *Is orienten* するは歴史の力を沒了したものである。現在の大きな過去の過去、過去の力は之懸て現在の力に外ならぬ。現實の刹那に満足せる人は期せずして歴史の權威に服して居るので半面と半面と云ふ事は宜く此の間を説いて居るのではあるまいか。

曾つて暮れ行く夕陽の影を望んで泣いた人を讀んだ。薄ボンヤリとした力ないお日様の影を望んで泣いたのか暮れ行く森の打ちさびた姿を見つめて咽んだのか其れは知らぬ。いや恐らく當人も

知らなかつたらう。何れにしてもよい。月に泣いたのは森に泣いたのは之月に咽んだのである。何れの爲めに泣いたかく云ふ事を詮義する様な亂暴な態度で現在に於いて未來を忘れ過去に於て現在を沒了する様な事は斷じて許されぬ。故に現實の凡ての不如意は現在を絶へざる過去の方から離れた時に於て耐へ難きものである。

現實は未來を救ふて過まらしめず。過去は現在を救ふて溺れしめぬ。「現實」の悲哀は過去に於いて救はねばならなかつた問題であつた。空を空に走る青年は唯花を思ひ鳥を忍び色に迷ひ香に憧れた。春を思ふ時春の光は漂ふて居る。一葉秋の告ぐる時は有爲轉變の事實に哭す。秋は花に依つて泣かじめ秋は鳥に依つて悲しませる。秋の悲哀のドン底には忘れ難い春日の觀樂が横つて居る。現實の悲哀の底には過去に於ける空想がひそんで居る。過去に於て空を追ふたものは實を失ふて現實の悲哀に泣かねばならぬ。吾人は「實」を思ひ「現在」を思ふ時更に大なる「自己」の力に立ち入らざるを得無いのである。

(三)

「自己」の解剖は唯之を科學の力によつてのみ満足出來無い。我々の意識の中の *Ein zehne Elemente* の統合形式であると云ふ様な以上に絶對の奧義が存在する。觀念や感情や意志やの動搖の中にも唯一の儼然として實在する精神的本質であると云ふ宗教的見地に頼つて直覺的な嚴格な尊嚴な「自己」を意識し度い。

「直覺した我其者」である。自己の發露は我其者の發露にすぎぬ。壇上に立つて自己の抱負を吐くものは自己を離れて不滅の響を傳へる事は出來ない。拙い技巧の力で作り上げた自己のメタモルフオーゼーを憚りもなく表現する死んだ演説は禁物である。曾つて建國の英雄が告別壇上に上つての別辭が唯非音樂的な歎歎流涕に過ぎ無つたにもかゝはらず萬世の雄辯と傳へらるゝのを聞いた。身振でも無く修辭でも無く彼の舌頭に漂ふた自己てふ閃めきにすぎなかつたのである。吾人は此の世に一人でも友と云ふ友を得度い。其れは小川の流が河原小石を撫で、行く様な外交的甘言の味を求めん爲めでは無い。友の「自己」と自分の「自己」とを心行く迄接觸せしめ度い爲めである。

「言葉や文字の一切を超越して「自己」は依然として「自己」である。進んで惡をなす者は靈性の苛責に耐へ得ぬ事があるが退いて惡を掩んとする不安の更に大なる者があるであらう。瘦せ切つた軀幹に無理に色み重ねた數枚の綿入で肥滿を装ふ様なみじめな感は自己を偽る人のつき物である。此の世の人を論ずるに勳功や榮爵や浮世に於ける事業成否の後を尋ぬるは淺ましい事と思ふ。凡ての根元と一切の奥底は永遠に生きんとする「自己」の姿の外は無い、浦和の灣頭に一發の砲聲が轟いて以來帝國が驚く可き大發展の裏には「自己」から出た幾多の生靈の活動がひそんで居るのを見る。旅順の山の月白い夜沙河の原野の鳥鳴くあした帝國の軍人は其形骸をさらした。墨々たる骸骨の中には辰公も居るだらう。太郎作も居るに相違ない。月の白いと鳥の鳴くと金鷄勳章の輝とは毫も太郎作、辰公の死には交渉は無い。太郎作と辰公とは唯「自己」の權威が促した自己の義務に満足して死んだのである。太郎作と辰公とは形としては無限小なる石片であるかも知れぬ。

併し太郎と辰公は東洋平和の確證でふ大業は永遠無窮に生くる「自己」の力であると感じて悠然として死んだに相違ない。無名の戦死と金鷄勳章の輝かないとの理由の下に兩君の死を惜しむのは兩君の「自己」を侮辱したものであらう。

よく實在と云ふ事を聞く。吾人が各個の行爲の方向に迷ふ時には胸臆に嘯く何かの實在の聲に引き立てらるゝ。人間が野を行く牛と異なるは其活動がある實在の發現であるからである。實在之即ち「自己」に外ならない。

靈と肉との對照から「自己」の本體を物の上に立てようとする事は許されない。物を放れての「自己」を否定し、物質の實在に交渉の無い「自己」でふ實在を認容せない時は吾人はどうしても肉の權威に自己を屈服せしめねばならない事となる。物の力も心の力も抽象して「自己」の上に相對的權威を認むる事は物を離れて初めて自己の實在を自覺し得る事實の證明に不合理だ。Dickens は一夜の幽靈の爲めに物に囚はれて冷であり淡であつた Driscoll が物を離れて初めて自己の實在を認め得た事を語つて居る。「心と肉との逆ひ」てふポーロの一言に托して肉を超絶した「自己」の存在を認めねばならぬ。

(四)

翻つて再び混沌たる人生を思ふ。

數知れぬ人間が眼をむき出して睨み合ふ。果ては噛み合ふ。混沌は依然として混沌である。矛盾は依然として矛盾である人生問題は不相變の謎である。「喜」の裏にかくれたる悲哀も消え去らぬ。

吾人青年が書窓を離れて社會の新生に觸れた刹那の一頁は現實の悲哀にしばらく出されたる不安である。煩悶である迷妄である。身をそゝる春の氣に青春の血潮をのせて幕進する時たゞ空想の甘きに酔ふて凡ての懸崖や凡ての陷窞や凡ての係蹄や凡ての深谷やを顧みぬ。會つて能州の山路に放浪せる一人の僧に遇つた。何處に行くやと問ふた時淋しく微笑んで浮雲を望んでたゞ幻の影を追ふと云つた。

然れ共影は凋落の事實である。空想は凋落の事實である。一度現實の冷かな風に醒されて影は卒然として消え空想は忽然として蒸發する。人に追はれたる空と影とは固まつて覺醒の涙となる。決して笑ひの問題では無い。青年に取りては常に先進の嘲聲の中にほうむり去らるゝ悲哀なる事實である。

空を去つて實を求むるのみ、吾人は之を「自己」に求むるの外は無い。

社會の動亂に處て意義ある生活を實現し、解き難き人生問題の中に嚴然たる權威を全うせむ爲めには空想をすて、理想に進み影を忘れて實に趨かねばならない。グリーン

人間は一定の能力を有し此の能力を現化する事はやがて其人の善である。何んとなれば人間のあらゆる満足は唯此の能力を現化する事に於て求め得らる。されど人の能力は過現未の三世を通じて常に其の處の何處たるを問はず圓滿に現化せられないとせば吾人は是の能力の本然性を極むる事は出来ない。

と云ふ解釋は之を自己に求むるの外は無い

天が與へた「自己」てふ實在は實にこの能力に對する意識である。人間の向上は此の能力の現化である。云ふ以上は此の能力の現化に對する十分の用意十分の期待を唯是「自己」てふ實在に問はねばならぬ。強大なる空の力に壓せられて人間本然の活動力の現化を防遏せられ惜しむ可き天賦の力を現はし得なかつた悲惨なる事實は吾人之をハムレットに見る。外界と内心との調和を「自己」の力に仰ぎない者の一生の中に沙翁の道德觀が動いて居る様に見える。

現在に於て現實の悲哀に泣くのは皆過去に於て自己の權威を蔑視したからである。現在は永遠に未來を救ふ。吾人は何故に現在に於て自己の偉大なる力に服し空をすて、實を追はんとせぬだらう。

(五)

肉の上に心の上に働いた上に働けと云つた靈界の偉人を迎へた時東京座戶外幾萬の青年の眼は渴仰の光に輝いた。蘆花の勝利の悲哀を聞いて本郷の大時計に寢返りを打つた青年もある。病間録の力は見も知らぬ田舎青年を早稻田の街路に佇ませた。空想と現實との矛盾を眼前に羅列せしめられて初めて淋しき思ひが青年の胸臆にひそみ渡る。自己生靈の上に見出されたる欠陥、現實に觸れて禁じ難き淋しみ之現代青年の心頭より發する叫びである。煩悶の勢である。

現實にふれたる切實なる青年が堪え難くして發する「悲哀の高潮」は無慘なる道學者の嘲聲に沒了し去らるゝ。愕然として高き或物に愉悅する時天下の青年は趨く道を知らぬ。一冊のノートを擁して仕方がない超越する許りだ。藤村君は結局樂觀だと云つた。樗牛先生も超越の線を張り渡した。た。

生の凡ては矛盾である。凡ては混沌の中に彷徨して居る併しながら混沌と矛盾と憧着との力に委して虚偽と假面とで強いて自己を抑へんとするのは餘りに自己を「侮辱」した者ではあるまいか。生の濕りきつた風にまかせて「自己」の實體を風船玉の様に大小を自在にして行くのは餘りに「自己」の存在を輕んじた業ではあるまいか。風の様に一生を送るのは一瞬一刻の心臓の鼓動に烈しい自己の存在を囁かるゝ吾人に取つては堪へ難き事である。機械的教育、形式的道義の力で「自己」の本体を忌はしい粉飾を施して矛盾と憧着に満ちた人生を迎合せよとは殘酷だ。吾人は自己を忘却して果して高きと低きとの間に苦しまねばならないか。人生問題の力の壓服に甘んじて生存の荒廢を傍觀するを潔しとするか。

實在は行爲の方向に迷ふ時に囁く。人の活動は此の實在の發現である。活動!! 何んと云ふ美しい語であらう。二本の足で歩む事が眞個の人間の意義であるなら井戸の蛙も出入の八百屋と資格に變りはない。人として存在に意義あらしむるのは實在の力の外は無い。活動が心的事象の一面として切實なる自覺を得て永久に消滅せない深い印象を留め得るのである。活動の意義の自覺、之は實在の力に生きて來る。

實在の二字、吾人は平然として偶像に用ふる様な淺い無關係な解釋に満足する事は出來ぬ。自己の一念を去つて實在の眞義を求むるのは餘りに無責任の所爲と云はねばならない。

實在は活動の根本で自己は活動の源泉である。實在を沒了して凡ての行爲の意義なきは活動が自

己の權威に服さねば空であると云ふ。矛盾懂着、生活難、七難八苦の今の世に人は凡ての「自己」を屈服せしめて進んで甘んじて居る。卒業後の俸給の貧少、地位の下落、之等は下宿屋の暗窓から漏るゝ嘆聲である。妻君の靴紐を結んでも富豪の婿に成り度い。之寄宿舎の窓より出づる希望である。或は自ら生命を裁して九泉の邊りに無限の慰安を求め「自己」の一切を脱却する。之果して人間の意義であらうか。屈服と超越とは其人の嘔吐に價する力弱き「自己」の屈服である。

此の七難八苦の間に身を處して「自己」の力に活き實在の鞭撻に勵んで自己の爲めに奮闘し活動する人を聞く毎に吾人は云ひ難い快を禁じ得無し。漫然たる空想てふ影を追はず凡てを「現實の自己」に聞いて立てた理想の下に奮戦する「自恃の人」は吾人の尤も敬す可き人である。萬朝に出でた力の人は榮華や財力や空名の一切をすてゝ單身瀬戸内海の風浪と戦つた。彼は唯自己の力に一生を委して進んだのである。病も失敗も自己の活力の前には空であつた。吾人も亦吾人の「自己」の爲めに戦ひ鎧袖一度觸るゝ所に不久のイムプレッションを與ふるだけの活力を求めねば止まぬ。

(六)

特に斷つて置かねばならぬ。

自己の力に生きよと云ふのは自己の偏向や我欲に支配されよと云ふのでは無い。偏向や欲望や之は實在として靈肉の對照を許さない「自己」の本質とは交渉は無い。形の爲めに質を失ふ時は其の人は自己の靈地を「任意」てふ形の爲めに汚さるゝ意氣は屈從に甘んじたので言ひ換ふれば其人

は色の爲めに奴隷となつたのである。自己に頼るは自分の精神的本質の權威を重んずるので自由は萬事の生命である。實に趨かんとして色に悶へ靈に絶らんとして肉に苦しむ。内的生命の自由を放棄して「任意」の執着に沈淪するは哀む可き境遇だ。

利己主義を口ぐせにする人、肉の爲めに自己以外を蔑視する人は利己に囚はれて返つて自己の權限を蹂躪されて居るので云はゞ空虚なる自己の形骸を抱いて喜んで居る。

京都へ行かれた西田先生の利己主義と個人主義とに對する區別として聞くに

個人主義を利己主義と見利己主義と個人主義を解する様な事は大の禁物である。利己主義は自己の快樂を目的したものであつて唯自己の「任意」に縛られて動く主張である。個人主義は之に反對し成る可く各自の個性を犯されない様にと云ふ努力である。之が爲めには各自の物欲を制せねばならぬ。故に個性は遂に共同主義と一致する。家の寄合に個性の存在は認められぬ、個性を没却する社會は不健全で個性を顧慮せぬ團體は盲團である。

とある。個人主義として一般社會に解せられつゝある様な意義を離れ個人の「自己」を中心として描かれた主義は健全なる社會を建設する爲めの要諦である。ゲーテが燃ゆる様な情熱に悶死したエルトルから Adynaton to plethos philosophon enisi 云々言に肯した迄一貫して口にした Selbstbehaltung "Selbstbehauptung" の認容を以つて説き出された。「自己」の確信は決して共同生活の領分を茶毒するものでは無い。

汚れた矛盾に満ちた社會と云ふ意味を絶対に超越して新らしい美しい完全なる宇宙と云ふ物を抽

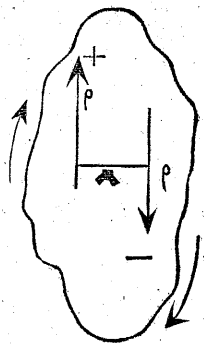
象して見ると自己と宇宙とは常にある種の力に依つて統合されて居る。自己を基とするとか社會を本源とするとか云ふ六ツかしい形式の議論をやめて宇宙は自己の半面である。自己は宇宙の半面である様に解せねばならぬ。夕やけの美景に見ほれてア、と云ふ時自己の叫びとしての自覺の後に宇宙の實在が控へて居る様に思ふ。

矛盾の様に考へるかも知れぬが決して矛盾では無い。圓滿と抽象せられた宇宙と「自己」との交通は毫も「自己」の眞價を損ふものでは無い。

發達を拘束せられた自由はあるまい。肉の執着、獸性、虛榮、汚行を超越して「自己」は自由の境界に入つたものだ。圓滿なる宇宙の莊嚴が油然として胸に浮ぶ時自己は遠大なる發達に向ひつゝあるのである。

凡てのものに通じて一の統合の力の存するとは吾人のよく考へ得る事だ。太陽の光で我々は山の高きを見る。谷の低きを見る。草は青く花は紅く卵は丸く豆腐は四角で學校は赤く市會議事堂は白い。其れ等を夕闇の間に於て打ち見やると各個の原型的表象が起つて來る以外に暗黒の力に、統合せられた一種の連絡が凡てを貫通して居る様に思ふ。具体的に云へば其うだが自己と宇宙との間にも統合す一種の力を抽象するのも同じ理にすぎぬ。

其れには宇宙が主であるか、自己が主であるか之は議論の限りでなく統合の力は此の場合物理的に剛体に働く偶力を意味する。



自己と宇宙とは總合の力に依つて回轉を續行して居る。今宇宙の部分的に表現せられた汚れたる人生の力に自己を屈服する時はPに向ふ力はP'に退かんとする力より減少して剛体は後へくんと退く。若しP'に働く宇宙の偉大なる力を感じて之の偉大に對抗しつゝ統合と云ふ偶力を維持せんとする時にはP点に更に「自己」の力を與ふるの必要がある。一步進んでPの方向に前進せんとするには更に大なる力を加へねばならぬ。

「自己」を大きくする之實に向上の努力である。「自己」は我を消極的に維持するに汲々たる「我意」を離れて更に大なる意義を持つて居るのは此間の消息に外ならない。舊き自己より新なる自己を得んとする努力は貴重なる向上の活動である。

(七)

再び過去は現はれたる現在なるを思ふ。

過去に於て影を追ふ者は現在に於いて實を亡ぼす。現在に於いて空想に囚はるゝ者は未來に於いて「自己」を失ふ。現在に於て實を失はざるものは過去に於いて實を追ふたる者であつて未來に於

いて「自己」を亡ぼさる者は現在に於いて自己の眞味を感受し得た人である。ファストは毒杯を水にして立つた時に彼の眼は疑惑の爲めに輝いた。彼の顔は不安の爲めに青みて居つた。然れ共忽然として「現實」の生活をさゝやいたオステルンの鐘が彼の胸臆に轟いた時に彼は復活の色をあらはした。現實生活、自己に生くるの福音に打たれた時彼は愕然として醒め得たのである。現實に生きんとする者は夢と空とを離れねばならぬ。現實に「自己」の本性を發展せしめ活動と努力の方向を現實の「自己」に問ふて定め度いのである。之を痛切なる現實の自己の力に計らずして虚偽と粉飾とに満ちたる「自己の影」に囚はれて只管空想の世界に憧憬する者は「現實の自己」を解し得ないのである。

「現實の自己」之の一言には人はともすれば嘲笑と蔑視とを蝟集せしめて顧みぬ。「現實の自己」を蔑視する者は「未來の自己」を亡ぼす者ではないか。

現實に於て直覺した自己には或は幾分の欠陥と蕪雜とがあるであらう、菊地慎太郎君の生涯忘れ難かつたのは「自己」を戦へ、凡てを自己に聞け」と云つた様な駒井先生の一言であつた。冷い父の墓石の前になつかしい母の姿を見やつた時此の一言の再生は彼に取つて彼れが如何にして生きんとするかの最後の福音であつたのである。現在の自己に不満を感じた時の現在意志の努力は現實の自己に生きんとする者が獨專を恣にし得る味ひである。凡てを現在の自己に聞けと云ふのは凡ての進歩と發展とを度外せよと云ふのでは無い。たゞ現實の自己を忘却した空想の袖にすがつて悶ゆるには及ばぬ。現實の意志の努力に生れた現物の理想に進めと云ふに外ならぬ。

充實である。吾人が造花を見る時に美の幾分を味ひ得るだらう。色彩と形態との美は渴仰の幾分を慰するかも知れぬ。然れ共花瓣の脈管の中には生を囁くプロトプラズマの活動がない。造花には官能的に反應して行く自己の力は持たぬ。造花を見ても衷心の審美心を動かさないのは凡ての自己の脱落に依る。

空想は理想の影である。影を追ふ者は遂に亡びる、空想を往く者は遂には「自己」の凡てを亡ぼされて混濁せる社會の前に屈せねばならぬ、覺醒より發し來る痛切なる叫喚は不眞面目なる先進の一笑に消去し尽さるゝ。煩悶であらうか。超越であらうか。

吾人は自ら自らの人格を想ひ自らの行爲を顧る時には云ひ難い不満を禁じ得ないのである。されど自己を此の世に全うし、意味ある生活を得たい爲めには此の現實の自己の爲めに奮闘するを辭せない。眞我の外に我々は完全なる或物を求め度くは無い。たゞ出來るだけ現實の自己から出て來た現實意志の力に依つて眞我の内にある全き物を欲求し進まんと思ふ。かくて吾人は嚴然として現實の社會に乗り出で度い。

校風問題は曾つて北辰論壇を賑はした事があつた。歳の廻るこゝに幾つ、今にして思へば昔日の號叫轉た寂寞の感なきを得ない。然れ共悉く一時を熱して消去し終る呆氣なきアルコールの様な飽き足らない動亂の後には唯無であつて唯空である。四つの綱領や生徒心得を以つて校風の實體であると咆哮したり、破衣と疎帽と放言と空論とを以つて抑へ難き元氣の充實と叫んだり、自己の

權威の一切を提げて内的修養の美名の下に、ノートの袖に隠れんとしたり、此等の凡ては故山の風に新たなる生命を得たる吾人の頭には徒に迷惑の種子に過ぎなかつた。

生徒心得は校風だと云ふなら正しく死せる校風である。文字や外容や影を追うて實を忘れたる校風は一校不斷の誇りとする事は出来ぬ。個性の自覺は活ける校風の要諦である。校風は外面の問題にあらずして内面の發動である。生ける校風の何たるかを知らしめ亦知らんと欲するならば凡ての空文と一切の法則を擲つて徐ろに先づ自己を見よ亦自己を見せしめよ。而して虚偽と假面を脱したる四高生たるの自覺さへあらばこれ知らずして活躍たる校風を顯現したものである。

(三月五日稿)

赤穂義士論 (前號の續き)

武 部 進

(七)

嘗て三宅博士は「今の世智識ある士に乏しからずと雖も勇氣ある士に乏し、如何に智ありといふとも勇なき者は大業を成す能はず」といふ意味の文句を公にせられしやに記憶す、實に穿ち得たる言なりと信ず、而して余は今この赤穂義士に於て其の最も適切なる例を見たり、赤穂の士人如何に墮落せりと雖も義士以外の者の中唯の一人も忠臣なかりといふにはあらざるべし、彼等も人な

り臣なり、涙もあり血もあり、主の死を聞いては五臟六腑を絞らるゝ思ひもしたるなるべし、敵の生を見ては身も世もあらぬ思ひせしなるべし、又た主家の斷絶を目撃しては五十四枚の骨々も碎くる思ひせしなるべし、然れども彼等は徒に泣くことをのみ知つて立つことを知らず、憤ることをものみ知つて決行するの勇なかりしが爲め、遂に一味徒黨の數にも漏れ快舉に参加することに至つては實に感服の外なきものあり、俗説ながら忠臣藏の六段目に於ける早野勘平の如き又た同七段目の茶屋場に於ける寺岡平右衛門の如きは全身之れ勇氣の結晶の如く、一舉手一投足の末に至るまで苟も勇氣の横溢せざるなく、さながら奮迅の虎狼の如く止めんと欲すとも得べからざる也、勘平は抑々何の爲めに自殺せしか、母者人に對して申譯けなき爲めか、朋輩衆に對して面みなき爲めか、「鹽屋判官の家來早野勘平非義非道を行ひしと言は汝ばかりが耻ならず亡君の御耻辱と知らざるか」との原氏の意見に感激し、亡君に對する言ひ譯けに切腹せしならずや、之が若し眞に鼻殿を撃ちたるものと假定せんには必ずしも死に當る譯にはあらねども「亡君の御耻辱」となることは原氏の言の如し、此場合若し生き長らへて勘平は敵數十人を殺して主君に備へることも時既に遅し、何となれば勘平は一旦主の顔に泥を塗りしか爲め也、主は鼻を殺したるが如き非義非道の者の香花に目を借さざれば也、實に勘平の死は時期を得たるものなりき、道を辨へたるものなりき、勘平譬へ敵一人も殺さずとも主君は如何程悦ばれしや知るべからず、其將に息を引き取らんとするに當りても尙ほ「ア、佛果とは穢はし死ぬ、魂魄此土に留まつて敵討の御供する」

とは又た何たる痛快なる言ぞや、又た足輕寺岡を見よ「僅三人扶持取る拙者めでも、千五百石の御自分様でも繋ぎましたる命は一つ御恩に高下は御座りません」と理を推し事を分けての加盟の歎願、「御荷物を擔いでなりと御草履を下げてなりと」徒黨の末尾に加はらんとす、勇又た壯、何たる熱心ぞや、何たる勇者ぞや。

人間志を立て又た之を口にする事は時に容易なることあれども、イザ實踐躬行となりては二の足を踏む者往々之ありやに感ず、實に慨歎の至に堪へざるところ也、元より之れ其由つて來るところ多々あるべしと雖も勇氣の缺乏は其最もなるものと思はる、勇氣のあるところ或る点迄志立たずとも遂行すること難からず、又た口に上ばさる事も決行し得らるゝ場合往々にしてあり、此の点に於て元祿の快舉は吾人に立派なる教訓を與ふるもの也。

(八)

彼等如何に忠義心の凝り固りさ言へ又た勇氣の結晶さ言へ、等しく血あり感覺ある人間たる以上には苦は又た彼等に取りても苦なりしならむ、樂は亦た彼等も欲せしところなるべし、其欲する樂を捨て、其苦しき苦をも願みず、或は「親に別れ子に離れ一生連れ添ふ女房に君傾城の勤を」さすも之れ皆亡君の怨を報じたき故にあらずや、或は「四十過ぎての色狂ひ」に浮身をやつし「祇園、島原撞木町傾城遊びの其中に若も病氣なんぞで死なしやんしたら忠か不忠か解りやせぬ」とまで諺はれしも一に敵を欺く計畧ならずや、彼等は亡君の怨を報せんが爲めには凡ゆる苦痛にも堪へ艱難をも忍ぶ覺悟なりし也。兩國は百本杭附近に今一人の夜鷹蕎麥屋表はれたり、彼はツイ近頃より此處に姿を表はすに至りし者にて何處の誰とも知る者はなき也、彼は今思はず月を見入りぬ、月は隈なく照り渡りて三五夜中人跡は稀也、何の爲めかは知られども彼は得堪へざるが如く泣くなりけり、風流か、あらず、絶望か、あらず、唇を噛み拳を握りしめたるより察するに悲憤の涙なるらし、かくして彼は毎夜々々を泣き明かすなりき。

「貴公は前原氏ならずや？」

「そう言ふ貴公は堀部氏！」

とは其夜一人の武士と彼とが談話なりき、名殘惜しげに武士は去りぬ、彼は遠く姿の見えずなる迄武士を見送りぬ、彼は初めて微笑みぬ、河風は寒し、夜は次第に闇け行く也。

麻布谷町の美作屋善兵衛は扇子の地紙を賣つて渡世しつつある也、彼は今夜も亦た本所松阪町へと商賣に出で行くなりき、彼は松阪町三丁目迄は唯の一度として賣聲を上げざりき、今吉良の屋敷の前に来るや思ひ出したりさばかり叫びぬ、然れども誰一人買つて呉れる人はあざりき、彼は再三再四同じき道を往來するなりき、少しも地紙の賣れざるを意とせざるが如くに、彼は思ひぬ「如何に世が世なればとて神崎與五郎則休ともあらう身が扇屋風情に身をやつし、かばかりの憂き艱難を見んとは、思へば憎し吉良上野」と、咄も裂けよとばかりれめ付けたり、彼は人の物音に驚きて遽かに歩を運びぬ、然れども尙ほ吉良の屋敷の周圍を巡るなりき。

慣はぬ聲に「笹や笹、煤竹や煤竹やえ」と叫び、米屋となりて吉良に入り込み、心にもあられど戀に事寄するも皆之れ敵の様子を知らんが爲め也、其間に於ける苦心慘愴は到底想像の及ぶところにあらず、忠義元よりさる事ながら、主君元よりさる事ながら、さりさて亦た忠義の難き事よ、主君に仕ふるの難き事よ、「大石にあらずして輕石、赤穂浪人にあらずして阿呆浪人」と嘲られし時の殘念無念さ、「三代相恩の主君の遺夜に」蜻魚を勧められ之を咽に通せし時のその思ひは、遂に之れ口のものにあらず又た筆のものにあざる也。

(九)

目的は手段を正當化することもあるべしと雖も時としては亦た如何に目的か正當なりとも手段其宜しきを得ざるに於ては當に其の手段を正當化せざるのみならず延いては正當なる目的迄を不正化するに至ることは吾人日常の經驗に依つて屢々知るところ也、「一人に物唯だやるさへ下手があり」にて人に物を惠與せんとする動機に於ては則ち正當なれども之を手段に表はすに於て足の先を以てしたり、又は投げ與へなごせば當に貫ひ手を悦ばしめざるのみならず却つて其恨を購ふに至るが如き、又た堀部安兵衛武庸が幼少の折母の病を救はんとする一心の余り其手段の善惡を忘

れて人様の藥籠を盗みしが如き其例也、今赤穂義士が主の怨を報せんとするに於ても同様にして主君に忠勤を勵み、仇敵の根を絶つといふ動機は如何にも立派にて後指一本指す者なけれども若し其手段にして亂暴なり非道なりせばあたら彼等か粉身碎骨の行爲も一向に世人の指彈を受け貶斥を呼ぶに留まりしやも知るべからず、元より義士中にも堀部武林の如き何れ若氣は春の駒、隨分過激なる議論を唱へし連中もありて、目的の爲には有ゆる手段をも辭せざらん意氣込みなりしかど幸にして大石、吉田の如き不急黨ありて事を冷靜に考へ穩便に處せん事を計りしを以て九切の功に一簧を虧くなく俯仰して天地に愧ぢざる底の快舉を敢えてするを得たる也、其仇討ちの當夜に必ず實行すべき規定なりとして世に傳はるものを見るに實に立派なるものにて一舉手一投足苟もせず、血あり涙ある古武士の俤を躍如たらしむるものあり、今其特に感すべきを擧ぐれば先づ第一には女子供は言ふも更なり、譬へ吉良の家人たりと雖も吾か目的を達せんか爲めの妨害とならざる限り滅多に殺傷せざる事と定めし是なり、兎角人間は「坊主が憎くけりや袈裟まで憎い」ものにて時に敵國の商船を撃破し度き氣にもなる者なれどもこゝは遠に吾國の武士也、「猛きばかりが武夫ならず」情を知つたる、武士の情緒思ひやられて懐し、第二には討ち入りに際し皆若干の金子を懐中せしことにて、之は徒黨の面々か討ち入りは決して衣食に困りて捨鉢根性よりにあらずして正しく主君に忠たらんが爲めなる事を示さんとして也、實に吾人はツイ一時の考へ違ひより燒糞根性を起し勝ちの者にて之を他より觀るときは其愚や實に笑ふべきもの也、殊に衣食に窮せし爲めと言ふに至つては醜の醜なるもの也、然るに早く此に心の附きしは大石は遂に大石也と感

服の外なき也、第三には火の要鎮を嚴重にせしことにて、之は若し黨中誤つて火を失するか如き事あらば赤穂の臣は狼狽せり、血迷へり、世間の人に言はるゝのが心苦しさ也といふに至つては愈愈出でて愈々其用意の周到なるに驚かざるを得ず、討ち入りの其時迄泰然として迫らざりし大石の態度思ひやられて妙也、第四には各人各々人參の細末を携帯し、若し騒動中失神息切れ等のある時は之を服せんとするにあり、終に最も感すべきは愈々炭納屋にて吉良上野を發見するや、大概の者ならば余りの嬉さに前後も忘れ斬り失せしならん大石は飽く迄も武士の禮を取りて先づ義央に切腹を勧め應ぜざるに及んで初めて首を切りしが如きは雷に沈着の様の表はるゝのみならず禮儀を知つたる、大和武士の態度目に見るが如し、嗚呼赤穂の義舉は單に吾國武士道の花たるのみならず實に大和民族の精なり髓なり、而して之れ全く其手段の宜しきを得たるか爲めなりと言ふに至つては手段も亦た大切なる哉。

(十)

江戸は高輪泉岳寺にては今日時ならざるに香華の薫妙にして爪繰る珠數の音も微かに稱名念佛の聲に和し、曉告ぐる遠寺の鐘に上求菩提の機、下化衆生の相を表はし、吾が勇み狂ひし四十七士は昨夜首尾よく主君の怨を報じ吉良上野の白髪首を上げて盲龜の浮木、優曇華の花咲く春に逢ふたる心地、互は何とも言はず唯だ顔を見合せては泣くのみなりき、嗚呼「山を裂く力も折れて松の雪」長の年月海山越えての艱難辛苦も其甲斐空しからずして積る怨の吉良の首は此處冷光院殿の墓前に手向くるを得たる也、世に悦びなるものありとせば恐らく之か其の最もなるものなるべ

し、「あら樂し思ひは晴る、身は捨つる、うきよの月にかゝる雲なし」尤も至極也、其歡喜やいかにばかり、その得意如何ならむ。

然れども各自か思ひを晴らせしと悦びしはホンの束の間、今は早や掟の束縛きづなに囚はれて明日とも知らぬ身の行末、「朝有紅顏誇世路、暮爲白骨朽郊原」いづれか秋に逢はずやは、思へばはかなの露の世や、今は四十七士も秋果て、細川、毛利、水野の四家に御預の身となり羊の歩み隙行く駒、今は冥土を急ぐ身の朝な夕なの起き伏しに唯た臨終正念、往生極樂をのみ口づさみ、醒めて現に主君を戀ひ、寢ては夢に亡君を思ひ、五体は火宅に留まれども身は空蟬の心のみ死出の山路に迷ひ入り、三途の川も越しあらず、如月十日の評定に切腹と事定まるや固より覺悟の四十七士、命は更に惜しからねど、今住み馴れし假の宿、立ち出でぬれば何時か亦た妻や子供に巡り逢ふ便りさへだに覺束なく、遣か恩愛の情やる瀬なく、萬斗の涙留めもあるず、空しく北邙一片の煙と消えんとす、痛ましい哉、悲しい哉。

然れども人生元と空のみ虚のみ、「花は根に鳥は古巢に歸へる也」、咲き出づるも枯るゝも同じ野邊の草、一度は秋に逢ふものを、諦め難きは人の心か、人生五十、七十古來稀なり、かゝる蟬蛻の定めなき人身を受け來れば遅れ先つは世の習ひ、赤穂義士中「まだ十五夜の月や雪花の顔かんはせ、縁の角髪ゆかしき」もあり、咲きも残らず散りも初めぬ、男盛りもありつれど死神の前に距てなく、「二度花の色香もなく野邊のかげらふ春の雪」皆な消え消えて跡もなく、あはれ昨日に變はる今日の有様、かくして義士の形体は滅びぬ、然れども名は千載に朽ちざる也。

(十一)

余は此に當時幕府の四十七士に對して取りし處分の頗る當を得たるものあるを悦ぶ者也、即ち幕府は四十七士の命を惜しみながらも切腹を命ぜしこと乏なり、元より之れ上野宮法親王の御意に出でしと聞くが何れにもせよ頗る深き考へに出でしものと思はる、即ち一には「義は一人の義、法は天下の法」たるを以て僅々四十七人位の情に引かされて天下の法に違ふ如き事あらば後難實に恐るべく、禍を千載に遺すに至るべければ宜しく公平なる處置に出づべく、些の感情をも差しはさむべからずといふにありて治國者の態度として頗る立派なるものあり、次に成る程四十七士の心情を察すれば大に同情すべきあり憐愍に堪へざる者あり、彼等は各々其の主とするところに忠誠なるの余り、長の年月の憂き目も厭げで首尾よく仇を討ちしかと悦ぶ間もなく命を絶たるゝかと思へば實に可愛想なり、命に代えても助けたき思ふ也、然れども之れ實は彼等の名譽の爲めには却つて邪魔なり、何とされば若し彼等にして此の場合許されて各々古巢に歸へることも差し當り糊口に窮し、さなくとも一味の中には堀部安兵衛の如き腕白もあり、又た赤垣源藏の如き大酒家ありて將來如何なる失態を演出せんとも保し難し、さる時には一旦受けし彼等が名譽も相償はれて無に歸することとなるを以て、あたら勇者を見殺すも却つて彼等が後の爲めなりといふにあり、それとも彼等は臆病にも逃げ隠れして死を恐るゝ者ならば或は命も助くべしと雖も何分には彼等は悉く死を期し、命を捨て居る矢先なれば譬へ許されたればとてよもや生きては居らざりしならむ、見よ彼等は死を見ること恰も歸するが如く、眞實報恩の道に入り、厭離穢土、欣求淨土の念熾んなりしことを、現に大石父子の如きは充分に此の覺悟の程を示し居たるにあらずや、大石力彌將に切腹せんとするに當り介錯人某之に向ふに母への傳言を以てせしに彼一介の青年は莞爾として曰く「父は吳々も譬へ罪は許さるゝ事ありといふも父と汝とは主謀者なれば所詮死なればならぬぞと申されし故、遠くに覺悟は定めたれば今更未練に、言ひ残す事はなし」と言へりといふ、又た真雄の作として傳へらるゝ「極樂の道は一筋君ともに、阿彌陀をまて四十七人」の如き覺悟は瞭然たり、否とよ四十七士は皆に切腹を恐れざりしのみならず、天下の法を破りし者故いかなる處刑を受けるも知れずと唯だ命之れ待ちしに當に嚴刑の處分なきのみか武士に對する最も寛大なる處刑たる「切腹」を以てせられ有難涙に咽びし位也、かばかり死を覺悟せし者に今命を助け與へたればとて何程喜ぶか、況んや之を以て天下の法を亂すに於くをや、余は幕府の此の處置に對し四十七士の爲め將た治國の爲め大に感謝するもの也。

(十二)

終に望んで切に一言したきは此の義舉の社會に及ぼす影響に關して也。之を聞く昔巢林子出でて其豊富なる情想と其暢達せる手腕とを以て盛に心中物を公にし紙價をして爲めに貴からしめ、其文章は或は淨瑠璃として名手の口に上り、或は歌舞伎として名優の演ずるところとなり、あらゆる境遇と地位との人に持て嘶さるゝに至りしが其内容は多く男女の情死を謳ひしものなりしか爲め當時心中が頗る盛となりしと言ふ、余輩悉く書を信する者にあらずと雖も少くも思想未だ堅實ならざる青年男女の頭腦を刺激せし事だけは事實なりと深く信するもの也。否或は悪く行けば心中者が増加せしやも知るべからず、何となれば近松は切に浮世の儘ならざるを説き、未來の安きを述べて、實際心中者の心中には描かざりし事、例令一蓮托生、往生極樂の如きを巧みに書き流し、他人をして思はず心中者は「良い事をした」と羨ましむるに至れば也。故に若し僅かばかりの世の義理に距てられ、ごうせ此の世で添はねば死んで未來を樂まんと宛もなき事を夢みて死出の旅路を急ぐに至る者決してなしと斷すべからず、かくの如く僅々近松の文章に於てさへ其社會に及ぼす影響の大なるものあり況んや之を赤穂の義舉に索むるに於てをや、その影響するところ至大なる者あるは當然の事たり、宜なる哉義士の重んぜらるゝ事や、古來忠臣藏と稱し、劇界の獨參湯と稱せらるゝ所以のものは何ぞや、皆之れ民心に投じ、國民を感化するか爲めにあらずや、余は今日まで此義舉が如何に直接間接に大なる感化を與へたるかを思ふ時、雷にこは一の忠義談として興味あるものたるのみならず實に一大教訓なりと信するもの也、然れども義舉は如何に大なりと雖もそれ自身にては社會を感化する事小なり、或は劇に或は講談に、或は淨瑠璃に或は落語

にあらゆるものに脚色され謳歌されてこそ初めて其感化大なるなれ、余は此点に於て近時頓に流行し來りたる浪花節が殆んど一手販賣の如くに義士傳を讀むを見て心窩かに欣然たらざるを得ざる也、譬へそは有る事なき事を附加することも、何となれば此の浪花節は上流社會の人よりも寧ろ中下層社會の人心に投じ、之を感化する事頗る大なるものあれば也、而して何れの時代を問はず常に國家の中堅となり、大勢を動かす勢力を有する者は少數の上流社會よりは却つて中下層社會なるが故に、中下層社會を感化することはやがて一般國民を感化し國家に影響を及ぼすこととなり其效力多大なるものあれば也、又た余は或る点まで事實にあらざる事をも附加するは其效力をして一層ならしむる事ありと信する者也、元より附加にも二種ありて拙劣見るに堪へざるが如き蛇足を附するが如きは之あるは寧ろ之なきに如かざれども、巧妙聞く人をして眞境に入らしむるか如きは實に事實を傷ふの罪を免かるゝのみならず却つて世の稱讚を博すべきもの也、然るに近時往々にして浪花節や講談が事實に相違する事を傳ふるといふの故を以て直ちに事實を傷ひ、義士の眞價を失墜する者として排斥する者あるが如きは未だ共に談するに足らず、何となれば之を目に訴ふるを演劇と言ひ、耳に訴ふるを浪花節及び講談と言ふ、而して演劇を誰しも一ケの藝術なりと認むる以上は浪花節及び講談も又た等しく藝術の一に屬す、唯だ「藝術」なる語が西洋諸國より輸入し來りたるを以て外國には其形なき浪花節や講談に同じく此語を附するが如きは多少穩當にあらざるが如く感ぜらるゝと言ふ迄の事にて藝術には相違なき也、而して又た世人は演劇に於ては如何に事實に相違せる事を仕込み、甚だしきに至つては極めて不自然なる事を捏造するにも係

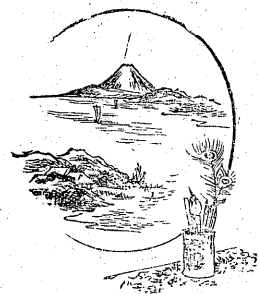
らず、何等非難を爲す者なきは元より、却つて其技巧の美妙なるを歎稱す、然るにも係らず獨り浪花節や講談に於て之を責むるものはそも何が故ぞや、思ふに藝術なる者は見る人聞く人をして娛樂を感ぜしめ、又た社會に多大の感化を與ふれば能事足れるもの也、故に此の目的を達せんが爲めには事實たりと事實たらざるを問はず、又た自然なりと捏造なりとは敢て論ぜざることも也、事實を報道する者は歴史也、藝術にあらす、若し浪花節語りや講談師を以て一種の歴史家なりとなすならば或は事實を傷くるの罪にも問ふべく、非難もすべしと雖も、彼等は歴史家としては余りに愚鈍なり下劣なり、然れども吾國の藝術家としては或は許すべし、斯くの如く彼等は歴史家にあらずして藝術家たる以上は事實を傳へようと傳へまいとは彼等の隨意也、事實々々と言へども成程事實にして而も娛樂となり感化を與ふるものあれば之に優ることはなければ、若し不幸にして余りに事實に拘泥せる余り人に不快を興へ悪感化を與ふるが如きあるとも、其は事實を傳ふるに忠實なりとして恕すべきか、歴史家ならば知らず、それでは藝術家としての精神に背戻するにあらずや、況んや技巧を加へざる事實にして興味津津たるもの少きに於てをや、藝術家の手腕に待つところ頗る大なるものあるにあらずや、殊に時代の嗜好もあるべけれども人間は或る点迄不自然なる事を喜ぶ場合往々あり、例令歌舞伎に於て大岡越前守が天一坊の再審を請ひしが偽者たるの證據充分ならざる爲め將軍家に對し言ひ譯け立たず將に三寶を押し戴き今や切腹せんとする一刹那、取り調べに遣はせし使者の歸へり來りしが如き極めて事實としては有りそうになき事なるに係らず觀者は飛び上つて喝采するが如き、其他新舊劇を問はず此例頗る多し、又た之を繪

畫に見るも唯だ事實の儘を描く時は生氣なく活氣なき物を生ずるに留まれども、却つて自然界には有りそうにもなき所謂畫家の理想を描きし處に言ふべからざる妙味あるが如し、兎角人間は平凡なる動物なれども非凡を希ひ、奇抜を好む者の如し、其證據には身は土壤を離る能はざるに洪大なる天國を想像し、行は俗界に容れられずして心は萬能なる神を夢みるが如き、人の實行や微少なりと雖も理想は頗る大なる者あり、かの希臘神話に見るに所謂勇士ヘラクレスとも稱すべき者に至つては神變自在、思ふ事として成らざるなく、爲すこととして可ならざるなきが如き如何に人は萬能を理想とするかを表はし得て遺漏なしとなす、かくの如く人の理想たるや洪大無邊なるものなるを以て若し薄命に沈淪し不遇に號泣するを見れば萬能の來つて之を救はんことを欲す、故にこそ人は不自然にも泣き事實にあらざるに悦ぶなれ、而して藝術は人に娛樂を興へ感化を與ふるものたる上は成る丈け人間の理想に適ふ者を選ぶべきは必然の事たり、而して又た人間の理想が不自然を希ひ奇抜を好む上は藝術も亦た或る点迄不自然なるも可なるべく、奇抜なるも可なるべし、余はかかる前提の上に浪花節や講談の事實を傳へずして却つて人心に投合せんとするを是認する者也、事實を傷くるの罪は浪花節語りや講談師の上に負はすべきものにあらずして却つて浪花節や講談を基として事實を聚集せんとする歴史家の當然負ふべきものなりと思ふ。

赤穂の義擧は事實それ自身にて已に社會に及ぼせし感化莫大なるものある事は余輩遼東の豚兒の啼々を待つ迄もなく畏くも

今上陛下の義士に賜ひし詔勅の上にも表はれて疑ふ余地さへなき也、加ふるに竹田出雲一派の文

人は之を「仮名手本忠臣藏」として遠大なる理想と美妙なる手腕とを以て巧に之を修飾し或は淨瑠璃に或は演劇に、社會の人心を感化せしことは今日も尙ほ俳優が人氣惡しき時常に忠臣藏を出さば直ちに人氣を盛り返へすを得るといふに見ても明らか也、況んや事實を今一層修飾して或は浪花節に或は講談に之を鼓吹するに於てをや其感化たるや到底吾人の想像の及ぶところにあらざるべし。(完)



雜 錄

史的警局(其一)

浦 井 生

A battle of the Giants ウェリントン公爵の言にして公爵サムエル、ロージャヤース(Samuel Rogers) にフリーテラローの戦を語りたる際の語なりと云ふロージャヤース(一八五五年歿す)は當時の詩聖にしてロンドンなる其邸宅は文藝社會の中央俱樂部と稱せられたり蓋し普通歴史に於て「巨人の戦」と呼ばるゝは一五一五年九月十三十四兩日に互れるイタリアのマリリヤノ(Marignano)の戦にしてフランス王フランシス一世はミラノ公及び其同盟なるスイス兵を敗れり此戦に於ては當時の精銳と許されたる兩軍殊死して極めて頑強に雌雄を争ひたるに因りて巨人の戦の稱出たるが恐らくウェリントン公爵はフリーテラローの戦の猛烈なりしを之に比していへるならん

A free Church in a free State 一千八百六十一年イタリア建國の三傑の一人「革命の經世家」カブール伯(Count Cavour)卒す是時に當りイタリア統一の事業畧成れりと雖も尙北東部のベネチア及び中央部のローマ法王領未だイタリア王國の版圖に入らず前者はオーストリアの直轄にして後者は加特力教を保護せるナポレオン三世の厚き援護あるを以て兩者共にイタリア政府が激に

手を下し難き状態にあり然るにガリバルヂ一派の急進黨はローマ市が未だイタリア王國の首都となり能はざるを遺憾とし「ローマ若くは死」の叫を以て黨是と爲し周圍の事情に頓着せず動もすれば輕舉妄動してローマを襲撃せんとしローマ問題は當時至難の懸案なりきカブール伯の病革るや病床を圍繞せる親友に對しローマ問題の解決法を教へて曰く「自由國家に於ける自由教會」と其意ローマは早晚必ず之を獲得して以て首都と爲さる可らず但し決してローマ法王の教權に觸るべからずローマ教會の獨立と自由とは擔保せよといふなり後一八七一年イタリア政府の法王領を沒收するや全然カブールの遺策を踏襲せり。

A king of France may die; he is never III. 佛王ルイス十八世の語なり一八二四年八月廿五日聖路易の祭日に方り王疾あり左右王の親祭を廢せんことを請ふ王聽かすして此豪語あり尋いで九月廿四日終に起たす

A man of war is the best ambassador. ナリバー、クロンウエルの言なり實にコンモンドル、ペルリの率ゆる數隻の軍艦は我邦の開國となりぬ 中世時代には各國共に其大砲に銘して曰く君侯最後の手段云々

A reform is a correction of abuses; a revolution is a transfer of power. 一八六六年の選舉法改正案討議に際し Bulwer Lytton 卿が英國下院に於てなせる演說中の語なり抑も英國の下院は一八三二年一八六六年及び一八八四年の三回の選舉法改正を経て現今の地位に到達したる者にして一八三二年の第一次改正までは名義こそ國民の代表なれ其實は監督貴族大地主等の上流社會の代

表にして中流社會以下は毫も其意見主張を發表すること能はざりしなり 此改正に因りて議會は殆んど改造せられ名實共に眞の國民の代表となりたれども尙ほ選舉權資格は高く簡單には改正法の恩恵に浴したるは中流の上級までに止まりき 因て一八六六年に至り保守黨のダービー内閣(Darby)は第二次の選舉法改正案を提出して大に選舉資格を輕減せんとす俗に之を Household suffrage といひ凡そ家屋の所有主又は一家屋の全部を借受け居る人及び一室の借受人

と雖も一年十磅の借料を拂ひて一年以上居住する者は選舉權を得都部に於ては一年十二磅の地代を拂ふ借地人までは有權者と爲すにあり 然るに此改革案を以て突飛的とし革命的なりとして反對する者少からず因りてリットンLyttonの此言あり此案は一八六七年兩院を通過せり

A whale stranded upon the sea-shore of Europe. エドマンド・バーク (Burke) が西班牙の國勢振はさるを冷評せる皮肉的の言なりスペインは十六世紀の末葉迄は世界第一の海國にしてメキシコ中央及び南アメリカ東洋に於てはフェリツピン島を領し其艦隊は海洋を横行せしが一五八八年無敵艦隊の殲滅以來國威を失墜しバークの時代に於ては其國際的存立すらも疑はしき状態に沈淪せりさればバークは之を評して海岸に打ち揚げられたる死鯨なりとひへり

After I am dead you will find "Calais" written upon my heart. 英女皇マリア臨終の言にして朕の死後朕の胸を割かばカレーの語朕の心臓に刻まれあるを見んの意なり是れ英女皇マリアの皇配はスペイン王フェリツピン二世にして英國は一時スペインの屬領たる状態に陥り英國の利害關係よりスペインの利益を主とし終に英國は何の理由無くしてスペインと同盟して佛國と戦ひ佛國

なる英領カレーの港を失へり此地たるや中世時代の英佛百年の戦役に於て一三四七年英軍の占領せしより一五五八年に至るまで無慮二百年間英領たりしに今や之を佛人のため奪還せられたる次第なれば英人の憤慨甚しく該事件の張本人なる女皇もカレーの喪失を悲み左右に謂て曰く朕は日夜間斷なくカレーを思へは恐らく朕の心臓にはカレーの文字刻みある可しとなり但し歴史家の冷靜なる眼光を以て之を評すればカレーの喪失は却りて英國の發達に利あるも毫も之を阻碍せず英國がカレーを所有せし間は動もすれば歐洲大陸政變の波瀾に引き入れられしがカレーを失ひて後は大陸との關係を斷つことを得て英國は専ら海上に於て發展するに至れり

After us the deluge 普通に佛王ルイス十五世の臨終の言といはるれども實はルイスの寵姫ポンバール夫人の言なり夫人は王の寵を恃みて佛國の政柄を握りフレデリック大王に對する私怨よりオーストリアと同盟しプロシアと戦へり之を七年戦役と稱す而して佛兵はフレデリックのためローズババに大敗せしかば(一七五七年)ポンバールは其政策を誤りたることを悔むたれども絶望的嘲世的口吻を以て曰く吾等の死後大洪水となり天下の騒動となること請合なれども吾等の死した後の事なれば毫も痛痒を感ずること莫しと

Alia jacta est(The die is cast) ユリウス、ケーザルがルビコンを涉りし時の言(紀元前四九年)なり初六〇年ケーザル、ボンペイウス、クラッススの提掣成り歴史に於ては之を三雄同盟といふ然るに四三年クラッスがバルチャ遠征に殞れたる後はケーザル。ボンペイウスの對立となりボンペイウスは議政官と協力してケーザルを仆さんことを力めケーザルより申出たる妥協的の提議

は盡く斥けらる於是ケーザルは意を決してガリアの兵を提けて伊太利に向ひルビコン(Rubicon)河に到れり是は現今のルッソ河なりともピサントロ河なりともいひ一定の説なしと雖も兎も角右のルビコン河はケーザルの勢力圏なるガリアと伊太利との境界を爲るを以てケーザルは一步と雖も此河より進まばローマの公敵の名を受くるの覺悟なかるべからずケーザルの浮沈此時に在りされは流石のケーザルも馬を停めて暫らく熟慮する様なりしが須臾にして決心定まりけん骰子は已に投げられたりと鞭聲蕭々ルビコンを涉れり其意骰子は吾手を離れたる後は一か六か天運に任すべきのみといふなり

All is lost save honour フランス王フランシス一世は獨逸皇帝查理五世とイタリアを争ひ一五二五年パビア(Pavia)に於て大敗し擒となりてマドリッドに押送せられたり其際王は母后に書を送りて之を慰めて曰く戦の勝敗は時の運にて毫も齒牙にかくるに足らず兒が名譽は聊も毀損せらるることなし請ふ安せよと

All my property is with me 紀元前六世紀の中葉ギリシアには七賢人と稱せらるゝ名士ありき其一人プリエネ市の哲學者Bisは市がベルシア王キロスの兵を蒙らんとして市民先を争ひ立退きしにピアスは何等の荷物をも携帯せざりしかは人々怪しがりて其理由を質せしにピアスは斯く答へしとぞ

All those men have their price 英の主相ロバート、ウォルポール(Wolpole)の言なり氏は一七二一年より同しき四二年までジョルジ一世の輔弼たり氏は盛に國會議員を買収して政府に盲従せし

めしかば氏は之を人に語りて甲議員は若干乙議員は何程と各人皆評價を有すといへり此時代は英國憲政の腐敗甚たしく選舉權の競賣の如きは公々然と行はれ之を異む者なき時世なりしに因りウォルポールは議員の買収を行ひて疚しとせず要するに時代の罪にして今日の政治上の徳義を以てウォルポールを律せんとするは謬なり氏は至りて廉潔の政治家にして其卒するや家に餘財なかりきといへり後世佛國のルイ、フィリップの主相ギゾーの議會買収政策とは日を同うして語るべからず

America must be conquered in France. France can never be conquered in America 英の政治家チャールズ、ジエームス、フォックス (Fox) の言なり其意英國がアメリカを征服せんとせば直接フランスを攻撃して之を壓服するを要す然らばアメリカは自ら英國の掌中に入り來るべし之に反してアメリカに於て何程フランスと争ふも徒勞に歸し佛國を屈するの時機ある可らず枝葉の争を措きて直に敵の牙營を衝くを以て戰の秘訣とすとなり

An emperor should die standing 男兒要當死于邊野以馬革裹屍還葬耳何能臥床上在兒女子手中耶の意ローマ皇帝 Vespasianus (九年一七九年) の言なり

An enemy killed always smells good, especially when it is a citizen ローマ皇帝 Anulus Vitellius が六九年 Bedriacum の戰の後戰場を巡見したる際の言なり帝は如此殘忍の性質なりしかは在位數月にして弑虐の難に遭へり

An unjust peace is to be preferred before a just war. Samuel Butler (一六八〇年歿) の議會に於ける

發言なり勿論之に反對の議論少からず

An unlearned prince is a crowned ass 英國のノルマンの朝の祖ウィリアム一世(一〇八七年薨)の言なり沐猴而冠の意

An untoward event 一八二七年英王ジョージ四世が議會の開院式にて例の如く列國との國際關係を述べて同年十月のナバリノ (Navarino) 海戰を指していへる言にして思ひがけ無き不幸の出來事の意なり初ギリシアが土耳其より獨立を謀るや英佛露の三國はロンドン條約を締結して土耳其に逼りギリシアの獨立を承認せしめんとし三國の聯合艦隊はギリシアのナバリノ灣に入り土耳其兵を威嚇して休戦を要求す然るに土耳其艦隊は聯合艦隊に向ひて砲火を開きしかば聯合艦隊は之に應戦し土耳其艦隊を撃滅せり而して此三國同盟は互に他を掣肘する目的を以て成立したる者にて英國は露が單獨に土耳其に干渉して大なる利益を獲得することを妨げんが爲め露國と同盟し露國は英國が土耳其を援けることを得げんため英と提携し佛を誘ふて英國の運動を肘掣せしめんとし名義は三國同盟なれども其實三國互に相制せんとする奇妙なる同盟にして三國の政治家の慘憺たる苦心の結果なりき因て三國共に事端の發生を喜ばず艦隊司令官に命じ慎重の態度を取り時局の困難を生ずる勿らしめんとせしに事志と違ひしが英王は之を遺憾として此言ありしなり

Anchio sono pittore (I, too, am a painter) イタリアの畫家アントニオ、ダ、コレジオ (Correggio) の言なりといふ渠は十五世紀の末葉に於けるネサンス時代の人なりポロニア市に於て繪畫の泰斗

ラフハエロの筆に成れるセント、ケキリアの畫像を見て發憤して曰く予も亦書家なり勉めば及ばざるの理なしと終にラフハエロに亞く大家となれり

And thou, too, my son? 紀元前四四年ケーザルの遭難の時ケーザルの驚き叫ひたる言として知られシエークスピアも其言を採れりケーザルは其信賴寵任せるブルッスが短劍を揮ふてケーザルを刺さんとするを認めて驚愕し覺悟を定め手を束ねて慘殺せられたりとぞ但し異説に依ればかかる演劇めきたる立ち廻は凡て好事家の捏造説にして其眞想は一撃の下に斃れ殆んど一瞬時の出來事なりきといふ

Assassination has never changed the history of the world. 一八六五年合衆國南北戦争は北部の全勝となりて局を結び歡聲湧くか如きの際一凶報は世界を驚かせり曰く大統領リンカーンはウォシントン市の劇場に於て刺客の狙撃を受けて斃ると英相ベコンスフィールドデスレーリは凶徒の無謀を歎して謂へらく古來暗殺手段を以て世界歴史の大局を變せしこと絶無なりと

At the Greek calends アウグスツスの言なりカレンドはローマの舊曆にて一月にカレンド(一日)イデス(十五日)ノンネ(三十日)の三節季を設け何日といはずしてカレンド後三日イデス前二日なごいふ風俗なりされば何人も知り居る如くケーザルの遭難はマルチウスの月のイデス(十五日)なりしなり而して我邦にては月末を以て支拂日と爲すごとく古ローマに於ては月の初日即ちカレンドが諸支拂日なりき乃ちアウグスツスは兵士が不當の給料支拂を要求せるを峻拒して曰くギリシアのカレンドに支拂ふべしと其意カレンドはローマ特有の事にしてギリシアには無き者

なれば決して出來ぬといへるなり我俗言にて一昨日來いといひ英語にて The day after never 獨逸語にて Am Nimmerstag といふが如し

Audacity, still audacity, audacity always.

一七九二年九月二日フランスの王政轉覆の後革命派政府の司法大臣ダントン(Danton)の議會に於ける演説中の句なり

Aut Caesar aut nihil (Either Caesar or nothing)

ケーザルが紀元前六九年ローマの大祭司とならんとして選舉を争ひし際ケーザルの母之を諫止せんとせしに答へし言なり其意我俗語の一か八か仰るか反るかといふが如し



文苑

戲曲環

薄穂華

人物

青年 (二十五才)

少女 (十七才)

老爺 (六十許)

(藩主 某)

(侍臣 左近)

(同 刑部)

(侍女 嫩葉)

その他侍臣、侍女、百姓等

時

現代。—夏の夕

(封建時代)

處

不定

第一場

正面小高き丘の上に堂あり。堂を廻りて老幹亭々として天を摩す。丘の前は街道のこころ。下手、森の後へは一面の沼の見え、夏の日暮れんとして夕雲の影美しく空に榮え、水を彩る。青年、下手より登場。無言のまゝ木下路を歩く。やゝありて。

青年 隙を見て出て来たんだが、少し早かつたかも知れぬ。あゝ日も落ちた。此處では、もう二度と入日を見る事はあるまい(間)、夕榮が美しく沼に映つて居る。人間の最後も夕陽の様に美しくありたいと云つた人もあるそうだが、おれは何うなる事やら……(間)、今夜の心持は何となう變だ。何時の頃とも分らないが丁度斯様な心持を抱いて何處かに居た事があるやうに思はれてならぬ……。

上手より老僕出て來り、青年を見て

老僕 や、若様では御座りませぬか。此様な處に何してお出でなされます。

青年 え、私かい。一寸散歩に來た。いゝ景色だね。あの雲の色は美しいぢやないか。爺は何處へ行つて來たんだい？。

老爺 「へい、町まで……。ちよつくら、俺も休んで參りましたよ。

二人堂の縁に腰を下すしばらくありて

老爺 俺、若様に御聞き申さう御聞き申さうと思ひながら折がなうて、つい申上げずに居りましたが。

青年 何かい。改まつて。

老爺 いえ、なに、御氣に障つたら御免なされ。手取り早く云つて了やあ、若様。これから何うなさる御處存で？

青年 どうするも、かうするもない。成るが儘さ。

老爺 そう初めから諦めてお了ひなすつては仕方がありません。まあ、よく考へても御覽うじろ、

世か世なら、貴方様は……。

青年 昔の事なんか云ひだしたつて仕様がな。

老爺 仕様がな事お御座りませぬ。一体今度の事は嬢様も御承知の上で……。

青年 どうだか、そんな事は、僕にやわからないよ。

老爺 ふ……ん……いえ、何うにしろ親旦那が悪いので御座ります、餘り仕草が汚なう御座ります。(間、あの沼の向岸に小高くなつて、松が三本いゝ恰好に生へて居りますぢやろ、彼處が若様、御先祖代々の御屋敷跡で、白鳥様の赤門と云つたら隣り國までも鳴り響いたもので御座りました。それを貴方の父御様は、あゝ云ふ御氣性の御方、黒船の騒ぎのあつた

年、重代の千鳥を挾たはさんで家出してお終いなされたきり、御行衛も知れませす京で御亡り遊

ばしたとは噂ばかり。確とした事もわかりませぬ。母御様はそれを苦にやんでごつと床におつきなされました。そうぢや、若様のお二歳の時で御座ります。……あゝ激おどい嵐の晩で御座りました。御庭で轟つと激しい地鳴のしたのをお聞きなされて、枕許に居る俺が婆に「あれは何」とお仰ります。「楠の樹が仆れたので御座りませう」と申上げると、「あゝ家代々の守本尊も仆れたか」と疑うたがひ目を閉ふいて御出てなされましたが、暫くして「どうぞ此れを頼むよ」と傍に伏せつて御出なされた若様をお目つめ遊ばしたきり、締切れてお終ひなされた。

青年 ああ——。

老爺 そこへ持つて來て向ふ村の親旦那。これ迄も何やかやと御爲めごかしを云うて居たが。先代の血縁と云ふのを楯に、お亡くなりになるとすぐ貴方様をお引取申したのはよいがすつかり家、屋敷を我物顔に振舞ふて、自分の村へ持つて行つて了はれました。それもよう御座りませう。あなた様も、もう御年頃、嬢様とは許嫁ではあり、後を御譲り申すのが物の道理で御座りますに。……この馬の骨やらわからぬ男を、——中尉とか申しますが——俄かに嬢様に押付け様としなさる。百姓共は皆さう申して居ります。中尉だつて何だつて、恩も仇もないものに向つて滅多無性と威張りくさる。彼様な奴になんで頭を下げるものか、……そう云へば二三日中にいよゝ参りますそんで……。

青年 あゝ、何だか紛ごまかして居たから、そつと抜け出して來たんだが。いや僕は叔父の仕草なんか何とも思つてやしない。叔父と云ふのも甥と呼ばれるのも、まあ一種の謎だからね。何

が何だか分りやしない。腹が立ては争ひもする。氣に入らなけりや氣まづい顔もするさ。自分を除けて自分の氣に入る者なンか有りやしない。叔父が僕の財産を奪つたのも凱旋軍人と云ふ名譽ある人を婿がねに撰んだのも皆叔父自分の胸算用から割り出したので他人がかれこれ云つたつて仕方がない。世間は御伶俐揃ひだ。よく勘定を知つて居る。自分の利得になりそうなる方へは水が流れる様に茨を潜つても伴いて行く。天下は泰平さ、叔父は叔父が好きな真似をしてそれで以て満足してる。僕は僕で思つた通りを決行ける。人が何と云つたつて關わない、これが世の中の幸福と云ふものだらう。

老爺 そう仰しやれば其迄で御座いますが、俺あ忌々しくて堪まりませぬ(間)。貴方様の父御様が居なくなされてからと云ふものは、何卒、息災で居らせられます様にと母御様は毎晩、あの氏神様でお百度をお踏みなされました。何しろ百二十もある石磴で御座りますもの、女の足では仇やおろそかな事ぢや御座りませぬ。風が吹かうと雨が降らうと一日も缺かされた事はない。初めは女中などが「御件を」と申し上げましたが、いえ血族のもの許りで無うては信心になりませぬとお仰つて拜殿の柱に乳呑兒の若様を扱帯で繋いで置いて(間)。御大家の奥様ともあらう方が、唯、一人、夜よなか、あの寂しい山蔭の森で、お百度をなさると思ふと俺はもう涙が零れました。もしもの事があつてはと思ひまして、時分を計つてはお後を慕ひ、密と物蔭に隠れて御身体を守つて居りました(間)、若様が御泣きなさるとお足がだん／＼早くなりました、終ひには堪へられぬやうに拜殿へ駆けよつて添乳をなす

つて寝せつけて置いてから、又初めから踏みなはし、！ それに何と云ふ事か、天道様も情ない……………

青年 濟んだ事を繰返したつて追付くものでない。父も母もそれだけの運命を背負つて生れて來たのだ。父が維新の渦巻の中に飛込まないで居た處で、それが果して幸であつたかどうか分りやしない

老爺 若様も父御様の様に諦めが好過きます。…實は、その、今日、町の代言人の許へ参りまして

青年 ほう、ごうかしたのかい！

老爺 いえ、若様の財産を取り返す法はないかと存しまして

青年 は、僕はそんな物に用はないよ

老爺 とお仰つても此爺が、承知出来ませぬ……………でよく聞いて見ますると一旦、登記が濟んで居る以上は裁判へ出た所で此方の敗のよに御座ります

青年 は、(と寂しく笑つて)明つてるよ……………がお前の親切は、有難い。爺、僕は嬉しいよ。なに、それ程、欲しいものなら奇麗に呉れてやるがよからうぢやないか！

老爺 へい、それに致しまして……………

此時下手より話聲する老爺口を縛む。野良歸りの百姓三人、兩人には氣附かぬさまにて森下路にさしかかり、よきところにて立話しの体。

百姓甲 は、、、それなら一体人間は死んだら何うするか

同乙 生れ變るまでの事よ

同甲 眞實ほんじつに生れ變る者だろか。人間が牛や馬に生れ變る事はあるまいか

同丙 あるとも。あるとも。新田の太兵衛とうべゑな。爺おやさんの死んだ時、腹はらに太の字を書いたとよ。そうしたら、此間、吉きちの許もとの牝牛めづが仔生こなまんだろ。腹はらにちやんと太の字か黒う附ついて居たそ。うな。嘘うそぢやない。吉きちがそう云いふた。太兵衛とうべゑ奴やつ、悄しやうげきつて彼あな様なら馬鹿ばかあやらなけきや好かつたとべ、そかいて居るそうぢや

同乙 それから鍛冶屋かやの嬾かたのう、年に一度は皮かわを脱ぬぐと云ふせ。蛇へびの生れ變りだとよ。何でもえらい、熱あつが出て苦しむちう事ことだ。その時は亭主ていしゆにも姿すがたを見せず裏うらの物置もの置きへ入り込んで出て來きぬげな

同甲 そんな事があるかのう。それから人間が人間に生れ代しろかる時は、前の世も、後の世も、同じ徑路なりゆきだと誰たれやらが云いはしやれたが、そんなものだろか

同乙 阿呆あほう吐つくない。そりや人に據たるわい。俺等おれら、始はじめ終しまひ、水吞みづく百姓ひやくしやうでは浮うむ瀬せかないぢやないかい

同丙 ふんどうだ。そしたら白鳥しらとりの大旦那おほだんなは、次の世にもあゝ強慾きやうよくでその上、運うんがいくかの

同甲 なに、あんな奴やつは馬車馬ばしやまにでもなるだろ

同乙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

同丙 白鳥しらとりと云いやあ、若旦那わかしやもお氣いきの毒どくよの。親旦那おやしやさへあんな事ことならなきや立派りつぱな御身代ごみしろを

青年

と静かに下手に入る。日暮れ果て。空には電光明滅

あ、行つて了つた。今日僕達が此處を去るんだとは知らぬものだから、種々と云ふて居た。彼女も媪やに一寸逢つて行きたいと云つたが悟られてはならぬからと、強いて止めて置いた。それにしても來そうなものだ(時計を星の光にすかして見る、電光)。約束の時間はとつくに過ぎて居る。何か起つたんぢやあるまいか。……さつき百姓は人間は生れ變るとか變らぬとか云ふて居た、今迄そんな事は思つても見ないが。今夜は何だか其様な氣がしてならぬ。どうも變だ(間)そうだ去年の夏の暮だつた、木津の堤の上に仰向きになつて、友達と二人、暮れてゆく大空の色を眺めて居た、淺黄色の空の奥からぼつり〜と金色の星が輝き出した。その時友はかう云つた。限りない蒼穹には無数の星が閃めいて居る。あの星の一つ一つに地球と同じ世界があつてそこには、自分と同じ人間が居て同じ運命を持つて暮して居る。我は孤獨でない。宇宙にわれは無數ある。星の數だけある。と云つて深い瞳を濡ませた。その時僕は又例の空想だぞ笑つたが、今夜と云ふ今夜は何となう無象の大なる手に自分の運命を握られて居て、あの時の友の説にまで動かすべからざる神秘的力が籠つて居るやうに思はれてならぬ……

漸次、風の音をかぶせて舞臺一面暗闇となり、次て起る陽氣なる樂につれて、再び明るくなるさき

第二場

やく上手によせて築山。頂に四阿あり。四阿の後ろは常盤木を見せ、築山より上は木立にて見ゆる。

下手、前方に古き石井筒。蓋をなす。傍に丸木の柱斜めに立ち横木に古銅の滑車空しくかゝる。井筒の後ろに櫻の老樹、今を盛りと花咲く。庭石は下手より築山の下につらなり、その裾を後へに廻りて上手へ道あるころ。その他植込、燈籠の装置よろしく。背景に泉水、御殿の一部を見せ、凡て某藩主邸園、春の景。

樂曲終らざる中、下手より腰元二人、手にく小枝(もち)をつけたり(を持ち)を持ち楯を見上げ見下し物を捜す振にて登場。

腰元甲。

お、しんぞ、この廣い御庭内を十日捜したとて見つかる事かいの

腰元乙。

ほんに〜。これ程丹念に索ねても、それらしい影もせぬ。偶に羽音がして、やれ嬉しやと思へば村雀。ても毒性な御役目を云ひ附かつたものぢやわいな

甲。

死んだものでもあらう事か。二つの翼さで何處までも飛んでゆく鳥の身を、捜しもどめて捕へて來いとは、聞きわけのない奥方様

乙。

嫩葉さまさへ氣を附けて居らせられたら驚ぢやとて逃げ出しは、せまいものを……お、それ、嫩葉さまと云へばどうやら此頃の素振がちども、では御座んせぬか

甲。

そう〜。妾もどうから睨んで居る、いつになく太い吐息をついたり、庭先をぼんやりと眺めて居たり。腑に落ちぬ事ばかり

乙。

腑に落ちぬ所がい! 落ち過ぎの椿の花ぢや……昨夜、丁度伏侍の月があつた松が枝にかつた頃、長局前の植込の蔭に、何やらこそ〜と人の聲。ばて面妖と思ふて身を忍ばし、耳傾けて聞いて居りや、女はまさしく嫩葉どの、男は……

甲。男は……？

乙。ほ、ほ、……云はうか云ふまいか。云ふたら卿のお顔が七面鳥のやうになるぞいな！

甲。え、厭らしい。それなら聞きたうない！

乙。とは口先ばかり……いつまでも焦らすは罪深いそれ／＼あの左近様！

甲。え、！

乙。それ云はぬ事かいの。岡惚も三年すれは何とやら。まア氣長に待つて居やいのう

甲。え、云はして置けば出放題。どの口で仰しやります。わが身の事は棚へ上げて！

乙。はれ、妾がいつ不行跡を！

甲。お目の色が颯と變つたが何よりの證據。去年の紅葉狩の宵……

乙。え、やかましい、それは人違ひぢやわいな

と兩人云ひ争はんとする折、腰元丙、築山の蔭よりぬき足して兩女の後に忍びより

丙。ま、此様な處に鳥が居た

と甲の頬に小枝をべたりさつける

甲。あ、！

とふりかへる。乙飛びさがる

乙。まア吃驚した

甲。又悪戯者の丙ごのが。い、加減になされませ

丙。浮氣の鳥が二羽居たと云ふ事ぢやわいな。……それはそうと卿等は何しに庭先へ御出や

つた。鶯はその様な庭石の上に轉げては居ぬわいな。あんまり浮氣が過ぎるとこの井戸へ

……お、恐や！

甲。乙。この井戸へとは？

丙。知らんせぬかいの。先々代の殿様の時(聲をひそめ)誰も來はせぬかいな。(と四邊を見廻す。甲。上

手に乙下手に、氣をくばるなり)この様な事が刑部殿の耳へでも入らうなら。すぐ(自ら首を落す眞似し

て首を縮む、凡てひょうきん者)風(これもンぢや……お、それ、先々代に野良猫が落ちて死んだ

といのう……

甲。乙。怒り去らんとする。丙笑ひ乍ら

丙。いえ、それは戯事ぢや……それは／＼美しい腰元が居たとしろ、春の舞樂の花の宴

に、御近習の一人を、思ひ染めたよ濃き紫の、色に出でじと包むに餘る、袖に涙は、のんさ

て、まことに零れぞかゝる……

と道化様様に唄ひ出す

甲。え、又しても又しても本氣になつて聞いて居りや

乙。調子外れの長唄なぞを

丙。あいや身共が幾重にも悪かつた

と男の聲色して威丈高に云ふ。二人も笑ひ出す

丙。あア紛^{またく}紜した事は抜きとして、どうく不義が顯はれた曉、殿様手づからこの井戸へ下げ斬りに……それもその筈、殿様の御氣入りの侍が其腰元に御心があつたとやら無かつたとやら……それから云ふものは代々御家に氣狂ひが出来るとの事

甲。それで解めた、この日頃、殿様の方途^{まじつ}もない御亂行!

乙。奥方様とて家附の御姫様。どうやらこの頃の御様子は!この様な御邸はちつとも早く……
丙。さアく御庭先の長話しは御法度ぢやく。

乙丙を先きにたて、上手にゆき築山の稱を廻らんとして、小枝を落し、そのまゝ二三歩退ぞく。

甲。乙。何ぢいの?

丙。叱つ!静かに!

乙丙に引き返す、甲、乙、もそれにつづく

丙。あれ、あそこへ、殿様が千鳥足で御氣入りの刑部殿等を従へて……此儘、行かうものなら、
ごんな難題がかうらうかも知れぬものを、さう早う早う

と三人あたふたと下手に入る。風靜かに渡りて櫻はらくと散る。藩主。酔歩蹠蹠として築山の彼方より出て来る刑部、待臣、小姓悦ぶ

刑部。よう咲き揃ひまして御座ります。御家も千秋萬歳!

藩主、肯き踏石をふんで丘に上り、四阿の床机に凭る。刑部、腰元丙の落しゆきたる小枝を拾ひ上げて續く、皆々よき處に座をしめる

藩主。春風は又格別ぢやのう

刑部。御意に御座ります

藩主。ほ、其方の手にせるは何ぢや

刑部。唯今、それにて拾ひとりました、小枝にもちのついたものに御座ります

藩主。何と申す、小枝にもちのついた……して何の料ぢや

刑部。小鳥をとるに用ゐますが……何として其所に捨てあつたか刑部、心得かねます

藩主。は、甘く言ひ居るわ、女子でも釣らうでな、は、は、

後への樹間にて鶯啼く、刑部身を起し

刑部。あ、鶯の聲が!幸これにて生捕つてくれよう……御前!如何な儀に御座りませう

藩主。うむ。それは一段と興があらう

酔ひしれたる様にて眼を閉ぢまざるむ態。刑部奥に入る。この時、侍臣左近(第一場の青年と同貌たるべし)、登場、井筒の傍に足止り、築山を見上げて思入。進んで踏石の所にかこまり

左近。御前!御前!

藩主目を開きて又閉す、小姓もぢくして居る。刑部、鶯を手にして出で来る

刑部。御前!刑部、たいの一度で捕へまして御座ります

藩主目を開き。鶯を手に取り

藩主。うむ、天晴れ天晴れ

左近。御前!

藩主。ほう、左近。何用あつて此れへ參つた

左近。はッ、容易ならぬ事の出来仕りまして……

藩主。うむ、苦しくない、近う

左近、藩主の前に進む

刑部。いや左近殿、某の手捕に致した鴛を御覽下されい

左近。それどころで御座らぬ(衣紋を正し)、御前！申すも憚多き儀に御座りますが、御領内の△

△郷の百姓共昨夜、一揆を起し……

藩主。何？一揆！

さ怒、心頭より發し手に力を入れる。鶯羽たゞきして死す

左近。はッ、既に土地の代官邸を焼き拂ひましたかに御座りまする、ごもあれ漸く一時鎮撫は致

しましたものゝ、この儘さし置きましたでは、御領内のあらゆる人民共又如何なる珍事を引

起すかも計られませぬ

藩主。はッ、土百姓の分際で近頃笑止な事ぢや、片端からふん縛つて獄門にせい！

左近。恐れ乍ら御前！三年この方の不作つゞき、かて、加へて代官共、お上を笠に着ての仕題三

昧、年貢の取立は年毎に厳しいと申しまする。すれば多少の道理は百姓の方に……

藩主。すりや其方は百姓の肩を持たうとか！。一揆の味方を致さうとか！

左近。いや、その儀では御座りませぬぞ、悍馬は火の中へでも飛込みまする。撓め過ぎては鞭も折

れませうぞ

刑部。はッ、其許の御談義は古い古い。土百姓など、云ふものは優しくすればつけ上り、仕

末に終へぬ蛆虫同然の代物で御座るわ………御前！最早歌舞妓の仕度も整ひました

頃、あちらへ御越なされては如何に御座りまする

藩主 俄かに笑をふくみ

藩主。お、そうであつた。左近！身は、百姓は大嫌いぢや。百姓好きの其方、ごうごも好きに計

らへ

悠然として立上り、築山を下る途端。手にせる鶯に氣づき投出す。鶯の死骸は庭石の間に落ちる。小姓
つつく。刑部、左近を尻目にかけて立上る。この時嫩葉、下手より出で、この体を見て井筒の傍なる樹叢
に身を忍ばす。藩主そのまゝ下手に入る。刑部、藩主の後を追はんとして嫩葉を見止め、立とまり今、
築山より下りんとする左近を見て、こそく退場。嫩葉、左近の姿を認め、左右を顧み、馳けよらん
として庭石に躓つく。鶯の骸を見て忙しく拾ひあげ

嫩葉。お、誰が、このやうに！

悲しげに振り向く途端、左近と顔見合せ、深き思入れ、舞臺廻る

第三場

舞臺、古塔、樓上の見ゆ。中央に朱塗の柱。勾欄組物などのしつらひよろしく。扉少しく開き居る。下
手、欄干越しに畫景にて、森の梢を現はし、森の彼方入江のさま。雲紫の春の曙。遠くにて歌

歌。こなた思へば照る日が曇る、冴へた月夜が暗になる

歌切れぬ中、左近、嫩葉。扉を排して現はれよき處に居直る

左近。漸くこゝまでは落ち延びたが、いつ追手がかゝらぬごも限らぬ、夜半の路を十五里餘りも、

ひた走りに走つた爲めか。思ひの外に草臥れた

嫩葉。妾は何うなつても宜しう御座りまする程に早う逃れて下さりませ。おっつけ、追手が参りますれば妾の命は無いもの。今迄は何處の野の末、山の果までも御伴するつもりで御座りましたが妾と云ふ足手纏ひのために、むざ／＼貴方様にまで御迷惑をかけますのは本意ない儀に御座りまする。これだけの縁と思へはそれ迄の事。たとひ身は死にましてもつゆ怨みとは存じませぬ

左近。卿一人残して立去る位なら初めからあの様な苦しい思ひはせぬ。もう夜も明け離れた。人目を包む落人の身に、日の光は仇であらう。今日一日は此塔の中に身を忍ばし、宵暗に紛れて港口まで走る事としよう

曉の鐘、遠く響き来る

嫩葉。あ！曉の鐘が鳴る。あの鐘の音を恨めしいと聞いた日が却て懐かしう御座ります。とは云へ、あの音色は何となく黄泉路から響いて来るやうな、湖の底から浮び出る様な。まア陰に籠つて居るでは御座りませぬか

左近。それは卿の心爲しと云ふものぢや。(間)、本街道から一里も外れた、この古塔、よもや見付かる事も無からうが

と思入れ「嫩葉、その顔を眺め

嫩葉。あゝ、あたらし武士に不義の名、負はせしも妾から。何卒御免し下されませ

左近。え、不義とは他人が勝手につけた邪の名。我れとわが身に何で不義であらう。清い心に萌え出てた花を、その儘枯れ萎ますが、正しい道と云ふ人こそ心得ぬ。美しいものを唯美しいと見て心を動かさぬ世であつたなら、それは聖の御代と云ふものぢや。この心(こ胸をさし)は活きて居るわ。皮一重の奥には血が走つて居るわ。我に盡す真心は我が爲めには善知識であらう

嫩葉。そうお仰しやつて下されは妾の心も清々しう覺えまする。……けれどどう云ふ運命でかう落人にと思ひまするご……

左近。模型の中に馴れた人は何の干係のない他人をも同じ模型に押籠めやうとする。涸れた血と皺びた皮を持つて居るものならそれでも堪えられやうが、過去の慣習に慊らず三綱の教も五常の道も詮する所はわれよかれと念する方便にすぎぬと思ふて居る某にとつて、左様の事を強ゐらるゝは、この腕を一分試しにせらるゝより苦しいのぢや。わが戀が不義ならば自分の胸に聞いて見て不義を犯さぬものが何處にあらうぞ(間)、殿にさへ絶對の権力があるとは思つては居らぬ。素盞鳴命さへ神やらひにやらはれて根の國に落ちられたものを。まして賤しい人の子の裔、一國の君主、よし肉躰は縛る事が出来やうとも心まで領する事は出来なからう。それも英明に渡らせられて臣たるものゝ知遇の恩に感じ得るだけの人物なら、身を捨てゝも惜しはない。が殿の亂行は！非道は！昨日ちやとてあの通り。百姓の虫けら同然、よきに計らへごの捨台辭。御藏米を開いて一時の急を救はうと謀つた御家老さへ同

じ穴の狐。隣國への聞えも恥かしい。(間)。あの濁つた城の内に咲き出でた戀の花。それさへ掻き撈らうとする昨日今日、もう忍び緒も切れ果てた。さればこそあの惡鬼の館をすて、清淨な國へ行かうと思つたのぢや

嫩葉。御言葉の節々、お尤には御座りますけれど、この世のごとくに、貴方のお仰しやる様な清淨な國が御座りませう。何となう氣かゝりて御座ります。あ！ 日が出ました。燦爛として金爛盤の様な面にも薄霧が懸つて居るやうに見えます。男は力で御座りますが女は愛で御座ります。その力にこの愛でお籠り申すより外は御座りませぬ(間)、出来るならこのまゝに二人、朝露と一しよに消えたい御座ります

左近。愛の中に溶ける事が出来るなら、それは女の果報であらう………斯様な滅入つた話はさて置いて、朝餉の料でも求めて參らう(と行かんぞ)

嫩葉。お止めなされて下さりませ。里人の目に立ちましては………

左近。ぢやと云ふて……氣にかけやるな！

——と猶行かんぞす、嫩葉、袴の裾を捉らへ

嫩葉。いえ、何うあつてもお止めなされませ。………一昨夜の宵で御座りました。奥方様の御狀を持つて廣書院へ參ります途中、長廊下の曲り目で出逢ひましたのはあの刑部。人なきを幸とつき纏ひ。身共の云ふ事を聞けばこの窮屈な邸には置かぬ。塔中村の乳母の許に御身を預け、身共は御上を出養生と繕うて、楽しい月日を暮さうではないか。彼處には湖も

ある温泉もある、美しい所ぢやと聞きたうもない事、べらくと云ひならべ、ほとく困じて居りました折、幸いお茶道様を通りかけられて、やつと虎口を逃れました。昨夜邸をぬけ出で、野と云はず山と云はず貴方の背に、………あ、妾は夢現で御座りました、氣のついた時はこの塔の中。刑部の乳母の里は此所。悪い所へとは思ひましたが夜が明けましては詮もない事。追手に刑部が參りますれば屹度この村へも立寄りませう。もし百姓が見慣れぬ武士を見たなぞと申しましてはそれ迄で御座ります(間)、あ、どうした縁で御座りますやら。振分髪の昔、櫻の花片を拾ひ集めてお一所に遊び暮したそのかみがなつかしう御座ります

此時、人馬の音騒がしく聞ゆ、兩人きつみななる。塔下に立止りたる氣合ひ。暫く寂然、やがて人音ががやんとして階段を踏む音す

左近。時が來た。覺悟しろ！

嫩葉。朝露となる許りて御座ります！

と懷劍抜きて左近に寄り添ふ、眞先に捕手、續いて刑部。捕手四五名従ふ

刑部。案に違はずこゝに居せた。者共。不義共引き立てい！

御詮だ御詮だと口々に叫びて飛びかゝるを、左近、襟上つかんては左右に投げさげし引倒す。とど刑部額を斬られて欄干に仆れかゝる。捕手の一人隙を見て左近を後より刺さくんとす、嫩葉身を以て蔽ひ傷手を負ひて左近に縋る。左近、劍をすて、嫩葉を抱く舞臺、薄ドロにて暗くなる。再び明くなる時

第四場

青年。(急に身を起し) あ、眠つて了つた。……奇態な夢を見た。……どうも變な夢だつた。……

……あ……
空を仰ぐ、この時下手より少女(夢幻中の嫩葉と同貌たるべし)、息せききつて登場、電光にそれき知り、青年の傍に走り寄る

少女。やつと逃げて來たの……待つたでせう……隙がなくては、ら、ら、らして居たわ……でもまだ九時よ。終列車には間に合はわねえ

青年。あゝ!

少女。どうかしたの?

此時激しき電光。青年。少女の顔を見て愕然。ひしと抱き

青年。僕等おれたちの運命は呪はれてる。環だ。環だ。永遠に纏れてる環なんだ!

幕

戯曲 鐘を撞く前 (創作、一幕)

田中浮京

人物。

老僧。

若き旅人。

少女。

場所。

或る所。海に臨める岩山の一角にして、自然に刻まれたる長き階段を上げ、頂上に小さき僧庵と、「自由の鐘」を吊したる蒼蒼きの鐘樓あり。階下は砂白く。岩塊まばらに波に接し、「運命の街道」へ。

沖は暗く。只微かに波兎の躍るを見る。まだ暗き日出前。何處ともなく青き光漂ふ。静けき波の音。

(階に白く積れる貝の破片を危く踏みながら、若き旅人、續いて老僧、燭の火をかきつけつゝ降下す)

老僧。(常に超人の態度を要す) 危い。危い。あせらずに降りて行け。落ちると、お前の命がないぞ。

旅人。はい。

老僧。(階段の中途に止まり) それでは、これで別れるから、氣をつけて、行かつしやい。曉にはまだ大分間があるから、静かに、急がずに、悪るい路に躓かぬやうに行かつしやれよ。

旅人。いろくど心付け下されて有難う御座います(間)まだ、曉までに餘程間がありませうか。

老僧。(手をかざして沖を眺め) 鷗の姿も見えないし、鷺の聲も聞えないやうだから、曉の鐘を撞くまでには、まだ三時間位はあらうな。

旅人。(慌てゝ) 自由の鐘が鳴りますまで、あのもう三時間。(落膽の態) 私は又あの長い街道を、とぼ

とぼと寂しい心を抱いて行かねばならのでせうか。空を渡るうら悲しい歌を聞きながら、しよぼくと泥濘ひかるみの時には、礫に躓いて、滅入りながら夜となく、晝となく、行かねばならのでせうか。(絶々の聲)

老僧 お前はまだ若いぢやないか。これからぢや、これからぢや。榮華の花と咲き誇るのもこれからぢやないか。街道がごんなに、長くつても、ごんな障害があつても、唯と一筋に、真心で己が歌をうたつて行つたなら自由の鐘の響く、二た時——曉と暮に、自由はお前の心と身に活動と休息とを示してくれるのぢや。わしは此歳まで、此二た時の鐘を撞くのを忘れた事はない。街道を行く人には總て平等に享受させるやうに、あの鐘指してをわしは撞く。その響は人々が街道で利慾の心を生じて、争を始めない限りは、只人は自由の響を擔ふて、運命の街道を辿ることが出来るのだ。街道は成程長いかもしれないが、いつか盡きる時がある。わしは此手のきかなくなるまで、あの曉の鐘、暮の鐘をつくんのだ。花はちり、水は行衛をくらししても、わしは永劫に生きて、自由の響を力の限り打ち出そうと思つて居るのぢや。

旅人 (嬉しげに) それでは、あの自由の響はいつまでも、いつまでも、貴僧あなたの生きて居らつしやる限りは滅びませんでせうか。

老僧 そうぢや。鐘が破れるか、わしが死ぬか、孰れかでなければ鐘の響は不滅だ。よし滅びる時があつても、鐘には其鳴がある。それに今まで朝な夕なに撞き出した自由の響は永劫に

街道をさまよふだらう。安心して行かつしやい。

旅人 やつと安心しました。自由はいつまでも滅びないのですね。自由はいつまでも私共につき纏ふて居てくれるんですね。(思出したやうに) 一体あの鐘は吊るされてから幾年になるんでせう。

老僧 (力ある聲) 我の年だけぢや。人の心のもつれぬ中、安らかに街道を辿つて、再び此處へ迷ふて來てはならんぞ。自由の鐘の響は遠くに居ても、近くに居ても聞える筈だ。響は平等ぢや。獨樂はゆるさないのでや。

旅人 自由は、どうしても獨專する事が出来ぬと被仰れば致し方もありません。平等に響をおうけさせよう。

老僧 そうぢや、響は平等だ。(間、曉に間もあるまいから愚圖く云はずに、早く行くがよい。

旅人 はい。惜しいお別れで御座いますが、迷ふて來た道とあれば正道へ歸らねばなりません。

老僧。お別れ致します。

(旅人、階を急ぎ降り、首垂れて濱邊傳へに街道の方へ)

老僧 若い旅人。躓くな。夢のやうに布いた真砂にも、時々貝の破片かけらや、礫がある。夢濃やかにぬれた。路芝の上には、毒蛇や蜥蜴が時に眠つて居る。又寂しく雲の影を投げた泥濘ひかるみに足を取られてはいけない。心して、心して、靜かに行け。

旅人 (立ち止まり、首あげて老僧を仰ぎ) もう行くのが厭やになつてしまいました。せめて貴僧の鐘をお

撞きになるまで、お側に置いて下さいませんか。

老僧 (叱るが如き調子) またしても、おろかな事を云ふ奴だ。自由の響は高くとも、庵は小さいといふに、(強く) わしは日の出るまで、日の沈むまでに、永劫に鐘を撞くのが職務だ。お前は鐘の音の起るまゝに歩き、鐘の音の落つるまゝに臥せば、長い路もいつか盡きて、お前の職分を全うする事が出来るのだ。心を慰めて、疾く行け。

旅人 老僧。でも何んだか此街道へ入ると、胸の中を魔が口笛吹いて亂舞して通るやうな気がして、なりません。鐘の鳴るまで、ごうか、此處に待たして下さい。此處はよう御座います。

老僧 (自烈体げに) 鐘の音は何處に居ても聞けるといふて居るぢやないか。

旅人 でも、此處を曲つたら、雲の爲めに、鐘を眺めて音は聞けませんまい。あの鐘を眺めて(指す)聞ける。聞ける。また聞ける。鐘は違ふが眺めて聞ける。街道の果ての二筋の岐れ路。

老僧 彼方は花さく野邊の蔭越えて樂しげに鳴る會堂の鐘ぢや。此方は河原を渡る水の瀨に、軽く棹さす一葉の舟遙かに見える、三途の渡場に囁く鐘ぢや。……………

旅人 (吃驚の態) え、それは寂滅の鐘ではありませんか。

老僧 (嚴かに) そうぢや。寂滅の鐘だ。街道を辿る人はどうしても、遅かれ、早やかれ、その岐れ路に立たねばならんのをお前はまだ知らんのか。少しは知つて居ます。どうしても行かねばなりませんか。

老僧 (嘲ける如く) 行かずにすめば結構だが、行かねばなるまいて。お前は見るにつけ、聞くにつけ、あらゆるものに未練があるな。それだから、わしはお前に注意して街道を行けといふのぢや。世は窮るなく、鐘は永遠に響いても限りある街道をさへ辿り得ないで、貝の破片や、毒蛇の爲めに、亡者といふ骸むくろにのせられて、岐れ路に送られる人が多いのだ。何事も決断が必要ぢやぞ。覺悟一つのもんだ。馬鹿な事を愚圖つかずに、疾く行け。

(旅人黙然として街道を行きつ。戻りつ)

老僧 (力ある聲に怒を含ませて) 何にを愚圖くして居るのぢや。わしは眠くてかなわない。お前のお蔭で、もう寝る暇もない程ぢや。とつと、行くがよい。(聲を和らげ慰むる如し) 鐘はすぐだ。すぐ撞いてあげるからな。(老僧階を二三階下りかける)

旅人 (そとくに) 誠にすみませんでした。考へて見ると人は既に與へられた道を歩くより仕方がないのでした。(濡り聲に獨自) 規定された軌道を走る石炭のいらぬ自動機ですもの(聞)あ、貴僧の鐘を何處に聞くのでせう。合歡の花さく丘に、レモンの實る木の蔭に、聞き度いものです。それぢやお別れします。(一禮して街道を力なげに歩み行く。此時場面少しく明るく)

老僧 (後見送つて) そんな奴に迷ひ込まれてしまった。躓かずに倒れずに行けばよいが。(慌てゝ庵に入る。場面再び暗く。)

波の音。風の音。

(運命の街道を振分髪の少女、左手に「涙の壺」を抱き、右手に「愛の鐘」を抱き、泣きながら登場。旅人と

すれ違つて、鐘樓の方へ)

少女 (噁り泣きながら) お母さん。お母さん。

(風やみ波の音靜かに)

少女 お母さん。お母さん。

(旅人立ち止まり少女の後姿を見送り思案の末)

旅人 實に妙な子だ。彼の子は何んて名だらう。一つ呼んで見よう。お花さん。

少女 (泣きながらトホ〜と) ……………

旅人 お葉さん。

少女 (泣きながらトホ〜と) お母さん。お母さん。

旅人 (追跡して高らかに) お露さん。

少女 (泣きながらトホ〜と) ……………

旅人 お雪さん。

少女 (泣きながらトホ〜と) お母さん。お母さん。

(連呼して驅け出す。海邊の岩塊に躓く。旅人驅け寄り)

旅人 お、危い。危い。(少女を抱き) お負傷はなかつたの。

少女 ……………(旅人を見上げて怪訝の態)

旅人 何んとな美しい子だらう。あなた、何んといふ名?

少女 (首垂れて) 名はないの。

旅人 名がない。(思案顔) どうして此處へ來たの? お母さんを尋ねて? (少女軽く頷く) 迷つたんでせう。私つれて行つてあげませうね。あの街道へ(指して)

少女 厭や。厭や。妾厭やよ。妾あの(鐘樓を指して) 高い鐘撞き堂へ此鐘をかけて、早く撞いて見度いわ。撞けといふんだわ。

旅人 その鐘を、彼處で撞く。(間) その鐘をあなたが撞くと、どうなるの?
少女 お母さんに會へるんだわ。お母さんが來て下さるのよ。

(其時鷺の聲す。場面稍々明るく)

旅人 お、もう夜明けも近いやうだ。又愚圖くして居るのを、坊主に見付けられては一大事だ。鐘を撞かぬ中に街道を辿らねばなるまい。もし、あなた。乙女よ。その鐘は何んであらうと決して鳴らしてはいけませんよ。わかつたかく。

(旅人街道へ行きかける)

少女 でも鳴らせといふの。妾鳴らすんだわ。夜の明ける時。日の暮れる時。

旅人 (ふり返り) 鳴らしちやいけないよ。鳴らしなさるな。あゝ事々見るにつけ、聞くにつけ面倒なもんだな。一層今の中に、死……(鷺の聲。場面前より明るく) お、夜が、明ける。道を急ごう(旅人。退場)

(少女後を見送り終り、泣きながらトホ〜と階段へ上りかける)

鐘の音。鐘の音(前より弱はく)。鐘の音。(より弱く)

(場面少し明るく。少女階段を、猶も上らんさす。僧庵に聲あり)

老僧 錆びた。鐘の音が錆びてしまった。あゝ街道に何にか異變でもなければよいが。……………

(老僧手に鐘打つ槌を握り、徐々と階段を下り、中途に手をかざして街道を眺む)

老僧 (力ある嘆聲) あゝ、愈々自由の鐘の終りも近づいた。街道は人に埋められてしまった。高い塔を建て、居るものもある。車を横に押し居るものもある。あゝ複雑になつて来たわい。自由の鐘の錆びるのも道理ぢや。刻一刻と移つて行く街道の有様今日の暮には鐘が破れねばよいが。(間)街道を行く人に愈々「不安」が宿り始めたのぢや。

(少女下の階段より啜り泣きながら)

少女 お母さん。お母さん。

老僧 (吃驚。下を眺め、階段を下りながら) 上つてはいけない。庵は小さいといふに。上つてはいけないのぢや。

(少女老僧、磯に寄り立つ)

老僧 これ、お前は、何處から來さつしやつた。

少女 運命の街道から。

老僧 迷ふてか。

少女 いゝえ。お母さんを尋ねて。

老僧 お母さんは何處にいらつしやるぢや。

少女 妾知らないわ。唯海の底。雲の上に、

老僧 ハ、ハ、ハ。それはお日さんぢや。

少女 いゝえ、お日さんぢやなくてよ。お母さんよ。お母さん。(啜り泣く)

老僧 ハ、ハ、ハ。運命の街道に取り残された迷娘だの、これお前の手に持つて居るのは何んぢや。

少女 涙の壺に、愛の鐘なの。

老僧 涙の壺に、愛の鐘。面白いもんぢやの、どれ〜お見せ。

(老僧、少女より、壺及鐘を取らんさす。少女渡さす)

老僧 見せぬの。見せぬのぢやの(怖い顔。時に鷲の聲す) おゝ驚の聲だ。鐘を撞かねばならんぢやつたに。(慌ただしく階段の方へ行きかける)

少女 (老僧の後追ふて) おぢさん、鐘を幾つ撞くの?

老僧 (振り返り) 百だ。百撞くのぢや。

少女 妾にも此鐘を、あの鐘樓へかけて百撞けといふのよ。妾撞き度いわ。撞かして頂戴な。おぢさん。

老僧 あの鐘樓へかけて、その鐘をつく。何んの爲めにつくのだ。愛の鐘なんぞ格段に持ち出さなくても共鳴りで澤山なのだ。(間) あゝ自由の鐘の錆びるも道理ぢや。(慰め顔に) よい子だ。早く行きな。此處はお前等の來る所でないのだからな。あゝよい子ぢや。

少女 妾。(間)お母さんが撞けといふたの。やがては自由の鐘は錆びてしまふから、運命の街道へ平等の愛を興へてやらねばならぬとお母さんはいふたわ。自由の響が錆びても永久に愛の鐘を朝な、夕なに撞いてやれば街道の人は、安らかに迷はずに辿られる筈だとお母さんは云ふたわ、而して鐘を打つ度に此響にある涙の水は次第になくなる。なくなつても決して愛の鐘の鳴る間は涸れる事はないつて、お母さんはいふたわ。此響の涙は何處へ行くのでせう。愛の鐘の響のたち行く方へ。ね、おちさん。早く鐘を打ち度いわ。

老僧 (力ある聲に) いや。まだく愛の鐘は必要がない。撞かせませぬ。自由の鐘の鳴る限り、此老僧が命のある限り、自由の力を平等に興へて、街道の人を安らかに辿らして見せる。(鷺の聲。千鳥の聲)お、友呼ぶ千鳥の聲も聞えるやうになつた。(嚴かに)乙女よ。あの自由の鐘が滅びたら、此爺は、あの遠い「死の國」へ行つて、會堂の鐘と、渡場の鐘の誘ふがまゝに破れた自由の鐘とを、朝と晩に時を違へず共鳴りさせるから、その時こそ、あの鐘樓に愛の鐘をつるして、街道の人を共にいたわつてやつてくれ。(突如、鐘を仰ぎ)まだ錆びても自由の鐘は鳴るぢや。わしの命はあるのぢや。

(老僧急ぎ鐘樓へ。少女泣きながら明け行く海に向ひ)

少女 お母さん。お母さん。お母さん。

鐘鳴る。鐘鳴る。(低く)鐘鳴る。(より低く)鐘鳴る。(より低く)

少女 (激しく)お母さん、お母さん。お母さん。……………

鐘鳴る。鐘鳴る。(低く)鐘鳴る。(より低く)鐘鳴る。(より低く)

(鐘の破る音聞ゆ。同時に老僧右手に胸を抑へ、左手に槌を握り、轉げる如く階段を下り來り砂上に倒れ苦悶の態)

少女 (駆け寄り)おちさん。どうしたの。おちさん。

老僧 (息絶々に)自由の鐘は遂に破れてしまつたのだ。わしの命ももうこれ切りだ。自由の響もこれで滅びるのだ。せめてお前の持つて居る愛の鐘、時永久に打つてやつてくれ。お前が鐘を撞く時が來たのぢや。愛の鐘早く打つてやつてくれ、乙女。あの庵に住んで朝と晩に時を違へず、平等の愛を、街道に辿る人のある限り、打つてやつてくれ。わしの命は愛の響が自由の響と入れ代ると同時に、「死の國」へ行くのだ。(間)あの草庵へ疾く。疾く。疾く行つて夜の明けを違はぬやう愛の鐘を、愛の鐘を……………

少女 おちさん、此鐘を打つてもよいの?

老僧 よい……………よい……………よいから早く。早く。

(少女老僧の手より槌を取り急ぎ階段を上る)

少女 (啜り泣きながら)お母さん。お母さん。

(少女破れたる自由の鐘を取り下す)

少女 (不思議そうな聲もて)おちさん。まだ此鐘は徹かに鳴つて居てよ。

老僧 (苦しき中に頭をあげ鐘樓の少女を仰ぎ)鳴るぢや。鳴りますぢや。その鐘を海へ投げ入れてくれ。

そうすれば永遠に自由の鐘は共鳴りするのだ。(絶々の聲)

少女自由の鐘を海に投じ、愛の鐘を鐘樓に吊し涙の壺を抱きながら腿もて、打つ

鐘の音。鐘の音。(より強く)鐘の音(より強く)、

(老僧眠るが如く逝く。舞臺面愈々明るく)

(海底に怪しき音起り。鐘の音に和す)

少女 (鐘を打ちながら聲の限り)お母さん。お母さん。お母さん。お母さん。

(連呼。鐘の音。怪しき海底の音。沖より大日輪赤く)次第にあらばれ海は紅に。舞臺愈々明るく)

少女 お母さん。お母さん。……………

連呼。鐘の音。海底の怪しき音。

(夜全く明く)

幕

旅の日記より

水 瓜

平等院 黄粟 春日 盧舍那佛 技藝天女 法華寺 薬師寺 夢殿

平等院

興聖寺の山門を下れば宇治川の渡である。山城の春を貫く水は峽を出で、渦をなし瀬をなして平等院の裾を洗つて居る。渡舟に乗る。舟は洲の中の十三塔を廻つて縹色はなだいろなす水の上を迂りつゝ、瞬く隙に向岸へ着く。岸の堤は梅、櫻に彩られて、所々に掛茶屋がある。毛氈の色は赤い。堤に上れば水澁の浮いた池の彼方に河原左大臣の夢の名残か、鳳凰堂の優雅な姿が見える。

宇治鳳凰堂のプランは最奇異にして本堂、翼廊及後尾より成り、本堂は三間二面にして堂階を繞らし、翼廊は重層にして本堂の左右に連なり折れて前方に向ふ。其折るゝ所の隅角の上に高閣あり。後尾は單層にして本堂の後に連れり。其全体の配合極めて珍奇にして遙かに大内裡の八省院及豊樂院の建築と相酷肖して其輪奐の美、絶倫と稱せらる。四壁に精巧なる繪畫を施し、柱、組物、貫、天井悉く色彩せられ天蓋、須彌壇上は螺鈿を箱入し、高尚優美の氣韻溢るゝが如し。

と美術史にあるは是れである。見るからに心ゆく許りの建築である。明治十三年の頃、入札があつて、或人の手に歸した。ところが修繕するには大變な入費おおいりであるし、毀したつて何にもならぬと云ふので買主は持ち餘して薪にして一束三文に賣つて了ふかと思つて居た矢先き、國寶に指定せられたそうなる。も少しで藤原朝の遺寶は型なしになる處であつた。平等院の庭は手入れが行届いて居る。植込のさま、庭石のたゞすまゐ、昔の名残とてはなからうが、小奇麗に見渡される。水鏡沼の裾を傳つて最勝院の門を叩く。此處は平等院を管理して居る處である。D君が「人やある人やある」と召されたけれど御いらへ申すものもない。さつき鳳凰堂の軒下で落葉を掃いて居た男が

あつた。あの男が此處の管理人に違いないと一決して引返す。小砂礫の敷つめた路を辿つて鳳凰堂の柵の中へ入つた。見上げると輪奐の美は今更の様に目に映る。男はせつせと箒を振つて居る。呼びかけて寶物が見たいと云ふと忽ち箒を捨て、御無禮しましたと衣紋を繕ひ乍らやつて來た。此男少々骨が軟かいと見えて歩く度に肩から腰へかけてフニャ／＼と妙に揺ぶれる。

昔しの平等院の圖だと云ふ壁に吊るした掛圖の下に座つて、此男と話す。「別に寶物とてもありません。御堂の内部を見まするには役場に斷はつてそれからどうがして」と大變な事になつて了つた。そんなに六ヶ敷しければ見なくてもいいと云ふと男は、鳳凰堂内部の繪葉書をさしつけて囁る、吾が切れて飛び出しやしないかと思ふ程囁る。定朝作の阿彌陀佛を初め二十五菩薩の事、合天井の極彩色の繪畫。繪畫の隙間は悉く經文もて埋られて居る事など、今、僕等の見得ぬ所を鼻高々と囁べられた。

こちらへと次の室へ導く。十疊の部屋である。壁には有馬繪(元信筆)や玄以の書簡などが掛けて、台面には鳳凰堂の古瓦や梁板や、仁王の腕などが並べてある。板には極彩色の繪が描いてあるが、古き幾世の風に曝されて、僅かに丹精の褪せたるを見るのみだ。それから廊下を傳つて行くとき右手の小室に不動が安置してあつた、像の古いのに拘らず劍が燦然として薄暗い中に輝かいて居る。變だなど思つて尋ねて見ると二三年前修繕した時。餘り劍が汚れて居たから金を塗つたら大分非難があつて弱つて居ますと云ふ、先刻定朝を説き、藤原期の建築美を語つた時、おれは私かに商賣柄だなど感心して居たものに、これを見れば通り一べんの男だつた。小豆飯を頂戴して居る時ガ

チリと石を噛みあてたやうに心持が悪い。

頼政の墓は庭の一隅にある。扇の芝は實際の場所とは位置が變つて居るやうな。宇治川の洪水のため堤防を築いたもので餘義なくせられたのだと云ふ。苔蒸した一基の碑。これが平家の世盛りには兵を擧げて、自ら一門の犠牲となつた老將軍の夢の跡かと思へば、そゞろに其かみが忍ばれる。おれは武人としての彼よりも、鶴を射たと云ふ傳説中の彼よりも「近江路」の詠に現はれた彼れの風手を敬愛する。此處の寶物の一つとなつて居る片袖阿彌陀佛は彼れの念持佛であつたと云ふ。昔しの武人は決して一面ではなかつた。多くのサーベル連中とはわけが違ふやうだ。

黄 檗

平等院を辭する時ふと黄檗の事が胸に浮んだ。因に聞き訂して見ると宇治から二十町。木幡から七八町だと云ふ。時計は三時半である。此處まで來て見殘すも強腹だと思つて木幡まで汽車で引返す。

停車場から道を左、左と取つて茶畑の中を一文字に走る白い道ひたすらを一向に行く。草艸子の木幡狐や、徒然草の山だちの話と思ひ浮べなから行く。

松の老樹が幾本も幾本も、すく／＼と立つた間に唐風の山門が先づ目新しく瞳に映る。池を右にして木蔭を縫ふて行くとき山門の翼になつて居る小門がある。白堊の地に白雲關と青く横に書いてある。兩脇には「門外已無差別路」「雲邊又有一重關」と一行づゝ認めてある。こゝを通つて左手の本堂に行く。入口には寶物拜觀は午前八時より四時までである。時はと見ると丁度四時だ。

案内を乞ふて遠方からわざわざ来たよと告げると「ごうぞ此方へ」と云ふ。十疊の部屋三間に隙間なく、軸だの調度だのが陳列してある。一等後から来たP君は「オイ、今、坊主がね、ロハ、かいと云つて話し合つてたよ」と叫いた。急におれは嫌な氣がした。浮世を離れた此清境にあり乍ら阿堵物なんか念頭に置いて居やがる。丁度そこへ出て来た他の坊主までが、さもし顔に見えた。「寶物はこれで五分の一も出て居りません、毎年とり換へますが七年目で漸く一回終ります」と坊主は得意そうに鼻をびよこさせせる。實際澤山あつた。一々覺えて居るわけに行かぬ。即非の「壽算等須彌」「金提三要印」や木菴の「能爲萬物主」「心雄日月輝」の文字は初めに見ただけに頭に殘つた。それから開山國師の帶來したと云ふ石銅彌勒や唐大茶鐘や凌霄汁笠も目を引いたが。馬言筆の達磨の大幅は特に嬉しかった。この達磨は齒が二枚ニョキリと出て下唇を抑へつけて居る。D君はさも感慨に堪へないかの様にその下に眺め入つて居た。沙羅樹葉に描いた羅漢の彩畫と、高泉が隱元の八十の賀に書いた慶壽千字文は真に見難いものであつた。又王漢元の四季の山水十二幅は頗る豪宕な筆致で、特に雨雲の峯に湧く状などは覺えず快哉を叫ばしめる。……それから櫻の咲き初めた下を通つて天王殿に上る。内陣には布袋の像があつて兩側に十二神將が嚴かに立ならんで居る。更に階を拾つて「大雄寶殿」の額を首を反らして見上げる。額字の傍に戊申八月とあつた。筆は隱元である。歸りがけに山門の額はと見ると「第一義」と筆太に書いて如何にも第一義に活躍してゐる様な書体であつた。

「山門を出づれば日本の茶摘歌」。支那風の大伽藍を出で、軌道傳ひに木幡まで來る間は何とも云へぬゆかしい感があつた。「宇治は茶どころ茶は縁どころ娘やりたや、婿はしや」と云ふ唄を耳にしたわけではなう。

河内境に落つる夕日を眺め乍ら奈良行の漁車に乗る。薄紫に晴るゝ大和路の初春を、廢都の地に下り立つた時は東大寺の鐘の音であらう物寂びた古き香のする街頭に心ゆく響を漲らして居た。

春 日

春雨がそぼ／＼と音もたてずに降つて居る。欄に凭ると紅梅の咲いた庭の彼方は草原で、そのつぎる處に溝があつて、溝に沿つて道がある。番傘をさした小僧さんが通る、するとこつちの家蔭から紺蛇目が現はれて小僧さんと擦り違ふ。少し行き過ぎた處で小僧さんが振り返る。蛇目がすつと萎まつて桃割が現れると、格子戸が開いて姿は家の中に吸ひこまれる、小僧さんはスタ／＼と行く法衣の下から見える裾が極だつて白い。

飯を食つて居ると琴の音が響いて來る。今桃割の入つた家らしいと思ふ。春雨の宿にこの音を聞くは嬉しい。奈良は夢の香りのする處だ、廢趾の寂びは大和に於て初めてかぐ事が出來ると誰やらの言葉を思ひ出す。が、それに對しては琴の音はあまりに今めかしい感がある、琴は京のもので奈良には箏の音がふさはしいかもしれぬ。……

一の鳥居をくゞる、雨は霧のやうに降つて居る。「紫や、春日の森は藤かゝる杉大木の有明月夜」と云ふ歌に深くも心を動かされた、自分は春淺き雨の日を、今、春日の森の下路に立つて居る。承和の帝が禁山の宣旨を下されてから斧一つ入らぬのが此森である。杉、櫟、竹柏の大木が路の左右

に轟々とそり立つて、千年の梢に行く雲を呼んで居る。春來れば嫩葉を生み、秋去つて落葉と朽ちて、世の移り代りも知らぬげの立木の夢は、如何に美しいものであらう。馬酔木の花蔭に、遠き世に憶れる様な眸をした鹿の群を見ては、自分達も詩歌の人となつて、萬葉の中に名をつらねて居る一人ではあるまいかとも疑がはれる。唯さへ大氣の濕いぼくて、秋の暮でなくては嗅がれぬ土の香が、夏の眞晝でもすると云ふ此森は、折からの霧雨に一段の寂びを添へて杉にまつはる藤の、まだ芽ぐまぬ枝にさへ、何となう艶かしさが籠つて居る。

二の鳥居をくゞつて左を見ると丹塗の中門が聳へて、左右に廻廊が流れて居る。小葩の青、圓柱の赤、相映えて美しい。こんな處で月の明い夜、森の沈黙を充分に味はつたらと思はせる。廻廊の内側に沿ふて内侍門から寶庫の傍に行く。參詣人が四五人、べちや、くちやと話し合つて「そりやさかい何とかでおます」とてどつと笑ふ。不都合な奴だ。此社は藤原氏の氏神で神護景雲二年とかに三笠山からこゝへ遷されたのだそらうな。藤原の世盛りに、そんな無遠慮な聲を出さうものなら張魂の御堂殿はどんな顔をせられたであらう。

踵を返し、階を下つて若宮の方へ行く。本社の南一町許りの處にある。神樂殿の鴨居に掛けつらねてあつた三十六歌仙の額が目についた、薄暗い煤けた殿の中にあつては歡樂の世と歌ひ暮した大宮人の姿も、優に物寂びて眺められる。

木下路を縫ふて來ると左手に崖があつて鞆轆と水の音が聞える。幾秋の朽葉が、堆く香る小路のあなた、木間がくれに瀧がある。白藤の瀧と標札があつた。

再び本社の廻廊を上つて今度は外側を、圓柱の間を影向門の方へ行く、石の階を下りてから、道を右にさる。兩側の立並ぶ家は悉く奈良名産を賣る家である。眞夏の午下りに浴びせかけられる蟬時雨の様な商人の聲を聞き流して少く行くと手向山神社である。神前の賽銭箱から廊下へかけて幾十とない鳩が、人の近づくに怖ぢもせず、惠念に豆を啄んで居る。呑氣な旅の暮れたとて別に困る事もないので鳩の數を勘定しようとしたが、どうかすると急に物怖ぢして一羽が飛上ると、それに伴つてぱたぱたと數十羽が波を打つて入り亂れる。五十三まで數へてこのばた、に出席つて、更に十三と數へると又ぱたぱただ。到底だめと諦めて坂を下る。芝生ばかりの美しい丘が右手に聳へて居る、頂に近く松が五六本風情をそへて居る。嫩草山である。大佛を作つた我等の祖先は公園として嫩草山を作つた、昔しの人のやる事は皆壯大だ。日比谷公園を作つて得々として居る東京人とは比べものにならぬは勿論である。

路の左側に刀劍商が軒を並べて居る。その中に四十年輩の男が店先から「手前は三條小鍛冶の御家でございます」とぬかした。金澤を出るとき御柱が「三條小鍛冶で刃物を買ふな、當座は切れるが、家へ來るまでにさつぱり切れなくなる」と云つて居た。無論買ふ氣はなし「オイ偽聲を張り上げてるよ」と呟き乍ら通りすぎる。

三月堂には人が寄らず、二月堂には香の烟りの絶間もないと聞いた。三月堂は法華堂と云つて本尊は不空羂觀音で、良辨の作と傳へらるゝ。脇士の梵天及帝釋天は空靈超脱の威を現はせるところ、氣品高邁、人をして覺えず肅然たらしむるものがあると云ふ。此處で見落してならぬのは執

金剛神で長五尺五寸、帶甲の夜叉形であつて忿怒叱咤の相貌は雄渾の極である、その昔天慶の亂があつた時大峰となつて東の方へ飛び去り、將門を塾したと云ふボンチな傳説がある位だ。將門の顔はどんなに膨れたらう!

二月堂は三月堂の北にある。堂の縁を巡ぐつて前面の欄干に凭つて眺める。雨に鎖された北大和の平野は一抹の刷毛になすられて糢糊たる中を木津の流れが仄白く流れて居る。

ふと後で靜かに走り過ぎたものがある。見ると一人の男が裸足になつて、手に竹籠を幾本も持ち乍ら堂の角を走り乍ら曲つて消えた。すると又五十許りの婆さんと二十前後の女が走り過ぎる、若い女の腹はこぼれそうだ。三人共お百度を踏んで居るらしい。線香を賣つてる爺さんに何だねと聞くと安産の御祈りだと云ふ。男は亭主で婆さんはお母さんに違ひない。あんな腹をしてこの廻廊を百遍も廻るなら、廻りきらぬ中に飛出すかもしれない。迷信も殘酷なものである。堂の右手の階段を下りて鐘樓を松の木の間眺めて乍ら社家町を正倉院の方へゆく。昔、在五中將が二條の後の許へ通つたと云ふ築地はこんな風をして居たのだらう。崩れかけた垣の上には春の草が、ましげに萌え初めて居た。何となう歌物語めく道である。……………

廬舍那佛

景清が賴朝を討たうとして隠れて居たと云ふ轉害門の傍を通つて南大門へ來た。門の廊に雨をさけながら空を見る。曇つた空は容易に晴れそうにもない。大和路の初旅を、春の雨にそぼ濡れて東大寺の木立を彷徨ふ我等の姿も、よそ目には詩ともならう畫ともならう。しかし當人には少々

苦しい。

金剛、密迹の二力士は五百年の昔から二丈にも餘らうと云ふ身を雨の宵も風の夜も、胸肉を張り寶杵を揮ふて、その張魂の面構に凡俗を見下しながら、日がな一日、張肘に控へて居る。教法を守つて倦む事を知らぬげの力士たちも、月の光が夢のやうに流れて、花の香りが仄かに薫ゆる阜月の宵などには、そつとあの腕を撫て乍ら、微かに吐息をついて荒れゆく人心を嘆つやうな事はあるまいか。嚴めしい顔にもごこやら、夢心地が浮いて居ると云つた人があるが、春雨の靜かな晝こゝに立つてその面ざしを見上げては、さこそと心から肯づかれる。金剛を作つたのは運慶で密迹を刻んだのは堪慶だと云ふ。共に鎌倉期の巨匠である。われらは今、彼等が遺して行つた二力士の下に佇んで古き鑿の香をまのあたり嗅いた心持は、何とも云へぬ大なる力に壓せられるかの如きものがあつた。……………

中門で拾錢とられる。大佛殿は目下造營中で正面から拜がむわけにゆかぬ。雲を貫いて立つ足場は幾千本の柱に支へられて居る。幾千本の柱の下に引き渡す綱について巡り行けば自ら大佛の左側に出る。此處から、其横顔と左の半面が見えるやうになつて居る。あつけないと云へばあつけない。……………

天平の昔の儘だと云ふ蓮座を親しく眺めてその線の巧妙なるに驚かされた自分は、又、廬舍那佛のあまりに不恰好なのに驚かされた。鎌倉の大佛を讀へて「美男に御座す」と詠んだ女がある。しかし奈良の大佛はいかにひいき目に見まゐらせても醜男で居らせられる。尤も其雛形だと云ふ三月

堂にあるものとは似もつかぬ。思ふに開眼當時は斯様な瘴惡な御佛では居らせられなかつたらう。開眼は天平勝寶四年四月と傳へらるゝ。それから七十六年。天長四年八月、大佛が少し傾いた、それを直してから九年。文徳の齊衡二年五月に地震があつて佛頭地に墜ちた。これが抑も災のもとで六年の後に漸く首は元に歸つた。爾後三百二十年間は何事もなく法界の久遠を觀じて居られたらしい。處が治承四年平重衡が南都の僧を攻めた時佛像は殆んど鎔けて了つた。世は降つた。藝術は既に昔日の比ではない。壽永二年、二月に右手を四月に佛頭を作つたが瑞嚴美妙の瑞相は又求むるに由もない。瘴猛なる顔は此時に出來上つたのであらう。美しい女が瘡瘡にかゝつたやうなものである。今更に治承の兵火が恨めしい。それ計りか永祿に及んで松永の亂は端なくも再び佛頭を地に委した。首は間もなく元の坐に直つて百三十年は全く露佛で居らせられたと云ふ。

天平十七年から天平勝寶元年に至る三ヶ年に八度も改鑄して漸く出來上つた五丈三尺の毘盧舍那はかくて大きいと云ふより外にとり所のないものになつて了つた。今日のやうな日にも御佛は大工の鑿の音や槌の音を聞き乍ら、きつと一千年のすぎ越し方を思ひ見て、深い／＼寂寞を味はつて居られる事だらう。……………

大佛殿の西に小屋掛がして脇士などが安置してある。參詣の善男善女が賽錢を投げてその下にひれ伏して居る。その傍に大佛殿修繕事務所とあつて屋根瓦や屋根板の寄附を乞ふて居る。瓦や板はその邊りに堆く積まれて幾らかの金を出せばその板なり瓦なりに姓名が誌されて末代までも名が残るのだそう。あんな高い處に名を残されては大變だと思つてすたく／＼と行き過ぎた。「大佛

は露佛に限る」と誰かが云つた。……石橋を渡る。吉城川がその下を流れて居る。水谷川が佐保の流れに注ぐまでを呼ぶ名で「我妹子が衣かすがのよしき川、よしもあらぬか、いもがみにせん」と云ふ萬葉にあるよしき川とはこの事だそう。

技藝 天女

東大寺の境内を出て春日野へ來ると物語りの冊を閉ぢて戀歌の歌卷を繙くやうに物柔かな優しい調子が何とはなしに人の心に沁み入つて來ると云つた人もあるが、それは荒れた都址に憧れて古き夢に酔ふて居る人にして初めて味はれる感じて、繩一筋でも搔搔つてゆくと云ふ今の奈良人などは思ひもよらぬ事であらう。

馬酔木の木叢の間を縫ふて、博物館に入る。

急に物寂びた空氣が胸に迫つて心は古の人となる。廿世紀の風は壁一重に距てられて洋服姿の看守の、寝むそな顔も、何となう物語りで見知り越しの様な氣がする。靜かな室の中にはわれらの草履の音より外にコトリともせぬ。

博物館と云ふより古代美術館と云つた方が妥當である。彫刻が大部分をしめて繪畫や、工藝品はほんの少ししかない。立ならぶ佛像の数々……………しかしわれにとつて忘れ難い印象を腦裏に刻みつけたものがある。これがために一々氣をとめて見た佛像も佛畫もどこかへ飛び去つて、烏羽玉の闇路を照らす北星の如く心のカメラに痛切に焼きついた。それは運慶？作と傳へらるゝ技藝天女の面影である。

技藝天！技藝天はわが、年久しく思ひ憧れしものであつた。三年の昔、美術史を繙いた時、これある事を初めて知つた。その時は暮れゆく春の宵、大和なる秋篠の寺を訪ふて薄暗い内陣に紙燭をかざして、この優雅な面影に接したいとばかり念じて居た。實を云へば今度の旅もこの像を拜んでから法隆寺を菜の花の彼方に眺めたい計りであつた。然るに思ひもかけず博物館の一室にまのあたり出逢つた今、夢ではあるまいかと幾度か思つた。自分は御像の前に釘づけにせられたやうに突立つた。絶えて音訪も聞かぬ幼馴染に、思はぬ時、思はぬ所で出會つたら或はこんな心持もしよう。自分はあからめせず打守つた。六尺八寸あると云ふ立像は木彫着色である。豊麗なる眉目は窈窕を極め、一点の婀娜めいた處がない。眞に人間界を超越して空靈崇高の域に入つて居る傑品である。自分はどの位、この前に立つて居たか知らぬ、春雨をよそに、奈良をよそに、大和をよそに、あらゆる時と所とをよそにして酔ふたやうに立つて居た。「もう歸らうか」と促す友の言葉が恨めしかつた。

法華寺

さ、やかな流れがある。佐保川とはこれださうな。物洗ふ女の顔に物語から抜け出した様な面影があつて欲しいと思ふたに、これはまた狡しうな目付をしてわれらを見返した。空は全く晴れきらないで雲が時々太陽の面を遮る。春の薄光りが大和の野を照して遠近の菜の花を黄に染め出す。三人の身を包むマントに汗を覺えて、疊んで肩にひつ掛けた頃、一里の鄙道は既に消えて、われらは法華寺の前に立つて居た。

境内に入ると三四人の童が池の畔りで何か語り合つて居たが、われらの姿を見ると同時に物珍らしさうに鼻水を手の甲で拭ひ乍ら抜殻の様に突立つたきり、自分が、池におつかぶさつた冬青の木の間へ行つて法華寺は此處かいと聞くまで疑と眺めて居た。小さい池は水鏡びて數しれぬ鳧葵が掌を浮けて居る。黄金火蓋でも云ひたい花房を見るのは今一月の後であらう。白く光る大地を踏んで本堂の椽に腰をかける。扉も柱も丹塗であるが大分斜げて棟木のさまも組物も荒れに荒れて居る。

その昔、聖武の帝が東大寺を營んで女人禁制と定められた時、勝氣な光明后は男女不入の靈場として作られたのが此寺である。されば近衛家の姫宮が代々こゝに居らせられると云ふ。

本堂の右手の門を通つて笑鬘花と五月躑躅のこびりつたい庭を敷石づたひに玄關を訪ふと、品のいゝ爺さんが、襦でも着たらばと思はれる姿をしてこちらを向いた。本尊が拜みたいと云ふと、折角ですが、今日は都合がありません」と氣の毒さうに云ふ。

此物靜かな尼寺にひげ男が三人まで、異様な態をして本尊をかいまみやうとしたのは推參な振舞であつたかもしれぬ。人も知る如く本尊の十一面觀音は文答師が光明后の御姿を摸したものである。ありし昔、池の畔のすいる歩きに、自らの透影にまぎくと十一面觀音を見られた後は、いかに美しくも氣高いものであつたらう。自分等が今日その面影に不笑不暱の本躰を拜がむことの出来ないのは却て幸であつたかも知れぬ。寂そりとした内陣に浮世を絶した觀世音が、厨子の扉を固く閉ぢて久遠の微笑を湛へて居らせられるのに今あたふたと扉を開いて御佛が千年の夢を破つた

なら、その刹那にわれらの眼は盲したかもしれぬ。

再び本堂の階段を上つて内陣を覗くと初春の世を暗く劃る中に、案の定、厨子の扉は固く閉まつて、ずつと端近に埴仁づくりの高麗狗が「法華寺大御守」の貼札をつけたまゝ、白木の台の上に眠つて居た。かくて菜の花の黄を遠ちに望みつゝ、ひたぶるに佐紀の里道を急ぐ。……

薬師寺の塔

西大寺では増長天王に踏みつけられて居る天邪鬼の顔に見惚れてつい、D君に失敬して了つた。唐招提寺ではP君が閻伽の水を飲まうとするのを黙つて見て居た。殆んど荒廢して畑中に立つて居る喜光寺を望んだ時は秋雨のそぼふる夕あの御堂の柱に凭かゝつて居たいと思つた。森のやうに生茂つた丘にも、それをとり廻らず池にも、太古の人の建、心が現はれて居る垂仁陵を見た時には、青褶に細布と云ふ姿で落葉が搔いて見たかつた。

招提寺の金堂を出たわれらは今薬師寺の道を歩いて居る。片側は畑で片側には築地が續いて處々に傾いた門があるもとより扉も何もない。築地のあなたは畑つゞきでそらみつ大野の大野は霞の中に静まり返つて居る。崩れた築地に朽ちた門に、昔しは立並ふ僧房に、大法鼓を鳴らし大法幢を立てた事もあらうと思ふ耳許にゴーンと鐘が鳴つた。おやと思ふと又ゴーンと鳴つた。鯨音の収まらぬ間を、鐘は追つかけくゴーン、ゴーンと鳴る。左手の街道からは一張羅に着飾つた村娘が幾群も幾群も薬師寺の境内に入る。二つの路に踏迷つた梅子も、三つの巷に嘆いた桂子も彼等は知らぬげの面もちをして喜しそうに行く。縁日だなと悟つた時は物賣の聲や群集の動搖めきが

本堂を包んで春の日影をゆるがして居た。

昔光明皇后の左のお眠が悪かつたとき、祈願のため建立せられたのか此寺であつた。話は違ふが天平時代の寺には塔が二つ宛あつた。當麻寺には今でも二つ残つて居るが東大寺のは七重で、東塔は非常に高く風鐸が喧しく鳴り響いた、め奈良朝の人は皆頭痛持であつたと云ふ、光明後の眼も要するにのぼせ眼ではあるまいかと云つた人があるが或はそうかも知れぬ。此薬師寺には東塔計り残つて居て、天智式建築の唯一の標本となつて居る。三重に各裳階がついて一寸六重に見える、十一丈五尺と註せられる塔下に立つて天人を刻したと云ふ水烟を仰ぐ。高いので仰いて居ると首がいたい。

ふと鶯の聲がした。塔の横に松が五六本茂つて、その向ふが田圃になる。鶯の聲はその左手の藪から出たらしい。又鳴いた。自分は此時かう思つた。鶯が塔の先の水烟に止つて居たら面白いだらう。そして羽を翹がへして舍人親王の書かれたと云ふ九輪の下に飛んで行つて身を逆さまにあの美しい聲で、

維清原宮馭宇

天皇即位八年庚辰之歲逮子之月以中宮不念創此伽藍而鋪金未遂龍駕騰仙 太上天皇遵前緒遂成
斯業照先皇之弘誓光後帝之玄功道濟群生業傳曠劫式於高躡敢勒貞金其銘曰

巍々蕩々 藥師如來 大發誓願 廣道慈哀 猗猗聖王 迎迓冥助 爰飭靈宇 莊嚴調御
亭々寶剎 寂々法城 福崇億劫 慶溢萬齡

と読みあげたらごんなに嬉しいだらう

本堂は人で溢れて居た。桃櫻いろ／＼の春の花が捧げられて紅に白に黄に紫に彩らるゝ中に、金銅の薬師如來は慈相を衆生に垂れて居られた。

群がる人を漸く抜けて塔を見返り見返り里路にかゝる、路の兩側に蟹を賣つて居る。戸板の上に檜の葉を布いて幾百となく蟹が堆く積まれてある。中には生きてる奴もある。泡を盛んに吹いてるものもある。傍に釜が据へつけて湯がぐら／＼と沸き返つて居る、その中に蟹を放り込む。釜には二三人たちかゝつてゆだつた蟹をしやぶつて居る。蟹屋は聲を枯らして安いから買へ／＼のべつに怒鳴る。參詣人は云ひ合はした様に蟹を買ふ。小供も娘も、それ相應に一匹二匹と細繩で縛つて家苞にと持つて行く。こんな所で蟹がどうして捕れるかと思つたら和歌山から瀛車で運ぶのたそうだ。

薬師寺を南へ出て、群山へと春の道をぶら／＼と歩く。日は高い。

夢殿

平群の野に春は今酣である。法隆寺の宿の椽に立つ。目の下は梨畑でその間に菜の花が咲いて居る。梨と菜種との市松染は朝靄に矇されて、昨日歩いた畝傍あたりは薄つすらと青く霞んで居る。大和の南を幾重にも重ねる芳野の奥は、霞の關に鎖されて夢よりも淡く烟つて居る。

宿を出づれば、すぐ上宮王院である。

どこか廣目天王に面ざしの似た六十許りの爺さんは、紋付の羽織を着てちよ／＼と先に立つて行く。院の門をくいと八角形の堂がある。「夢殿です」と云ふ。

右は禮堂、左は舍利殿、繪殿。いづれも長い建物である。その中央に靜かに立つて居るのが夢殿である。御堂の庭に綻びそめた枝垂櫻は、靜寂の中に一点の艶味を添へて居る。

此處は法隆寺中、別に一區劃をなして、昔聖德太子の住居せられた斑鳩の舊跡である。夢殿の名は太子世に在す頃、常に三昧に入り、出でゝは夢想に托して未來を語られる、それが事實となつて必ず現はれた所から名付けたのだと云ふ。

廣目天王は夢殿の内陣を覗き乍ら「本尊は如意輪觀音、木彫で六尺五寸。聖德太子の御作で等身の像。全体は扁たく左右に鰭狀の裝飾があります。寶冠は金銅の透彫にして蔓草の模様」と機械的に囃べる。ふと氣がつくと廣目天王の羽織の紋は丸の中に「案内」の二字が白く染め抜いたものであつた。廣目天はそれとは知らず「これは天平時代そのまゝの柱で悉皆杉です」と柱を叩いて見せる。白く光る庭を踏んで舍利殿に上る。廻廊に立つて夢殿を見かへる。思ひは千年の昔に飛ぶ。

鑿も鉋も無かつたその頃はちよ／＼な一挺で何もかもやつけたのだと云ふ。杉の大きが神奈備の森から運ばれる。木工はかん／＼とちよ／＼なを振ふ。木屑の香りが春の日影にぱつと散る。「岩の上に小猿米焼く。米だにも。たげてとほらせ。山羊の翁」と唄ふ聲か働く人の中から洩れる。惠念に仕事してる木工たちも、暫し手を休めてやんやと囃す。かくて斑鳩の里に夢殿は日一日と完成したのであらう。

急に後ろで「あの此方側の鬼瓦二つが支那のものです」と云ふ。ふり返ると廣目天は目を夢殿の屋

根に注いで指さし乍ら立つて居る。見ると、普通の鬼瓦の様に獯猛でない。おでこな所が愛嬌である。屋根瓦の一枚一枚を追ふてわが眼は露盤のところまでひたと止る。露盤の上に寶珠がある。寶珠をめぐつてリンクがある。そのリンクから八つの風鐸が静かに垂れて居る。そよ吹く風に微かに揺れる。春風に揺れ、秋風にゆれ、夕立に揺れ木枯に揺れ、かくて天平の昔から揺れ通しにゆれた風鐸は、これから後も、永しへに揺れる事であらう。

露盤を流れ出づる八つの稜は軒端近く波と跳ね返る。その波がしらにも鬼瓦がある。端の鬼瓦の頭越しに大地を覗いて居る。

舍利殿も繪殿も閉まつて居て中を窺ふ事が出来ぬ。厚い板の廊下を下駄で歩く。カタ／＼とあたり静けさを破つて意外に大きな音をたてる。二の殿の中央を折れ曲つて輪藏の所まで行く。中を覗くと臙氣に見られる。普門、普建の二童子であらう青丹の色が煤びた中に見える、薄暗い廊下を引返して舍利殿の階に出たら急に夜が明けた様な気がした。廣目天はしきりに馬子がどうとか上宮太子が何とかと辨して居たが、自分は階の二段目に立つたきり今一度、夢殿の礎から順次寶珠の先まで眼をせり上げて、又寶珠から礎まで眼を落した。廣目天はいつの間にか門を跨いで促しがほに立つて居た。

法隆寺の塔中を歩く。陽炎立つた空を通して松の木間に五重の塔が春寂しと聳つて居た。……………

(四三年、四月の日記より)

四高和歌會詠草

其 月

○ 旋風はうげんに立ちし龍りゆう巻まいま壊くえて飛沫しよばに虹にじす印度洋

日々に去るらし
鴉からの海空はきよらに京の子と乳母とに吹きてあ
りぬ春風
放たれてどぶ一筋の道なれどまごひてありぬ戀
の一の矢

○ 春風はるかぜに裳裾ももすそや觸ふれし漣なみら打ちさゞめくよ月の夜

○ 望樓ぼうろうの窓にもたれて疲れたる瞳を放ち春の海見

○ 君きみは北吾きたごは南の端にして年を迎へぬ磁石にも似

る 秋の日の弱き光をからくと鳴子渡りぬ心地よ

○ 午砲なへう聞ききてふとやりし手を懐なごに時計なき日のさ

きかな 生温なまぬるき風の吹く夜をぬけ出でて櫻の下に君を待

○ びしさなりき

水 衣

○ 石いし一度水みづに落おつれば浮うび得えぬ悶もへに生なを今日も

ちけり 風船ふうせんに乗りし心地にふわくと戀せしことの仇

○ 静寂しやうじやくは野のにひろごりて沼ぬまの上に布ぬける木の葉はの

なりしかな 蘆あしの間まに小さく見ゆる渡場わたりばの窓まどのガラスを日は

○ 沈しづまんころ

赤く照る 心こころして渡る橋はしかな相愛あいの日はすぎ今は恐れを抱

磯近く沈みし船の橋をひくゝめぐりて日は海に
落つ
破れたる長屋の壁にはりつけし古新聞の俳句の
寂し

我が友は風來坊によく似たる明日は思はでた
生きてゐぬ
新妻のごろくならずすり鉢の音に眼がます新
世帯かな

よき夢を賣る人あらば買はんぞ思ふ朝の床を
出でつゝ
水仙の疲れは淡し首たれて庭の苔石枕となして
蛤 城

病床の三日四日五日薄雪の今日は佗しく雨より
風に
雨傘に暗をさびしく歸るさに夜たか行燈をなつ
かしむかな

半鐘の鳴るに驚き窓くれば空と雪とを染むるく
れなる
女あり何を求むる何を見に灯かるき街をあかる
き町へ

腹黒き男なるかな今日も来て借りたる金を語ら
すに行く
白樺の林は悲し曇天に光のなきが骨のやうにて
高きより落つる心地に大風は我が家の棟を鳴り
て過ぐかな

後の朝たゞ何となく寂しくて手を打たせつゝ酒
をよびけり
三菱の鋭き錐のぎりぎりど板をもみぬく心地よ
きかな

あはれ今日もぬれたる靴をまたはきてコッコツ
藻 花
空車でこぼこ路に力なくおどるが如きかなしさ
に生く

ほろくゝと笛の音渡る沼の面白き藻の花たそが
れて咲く
廣き家に孤獨の母が憂愁と共にのび來し我なり
じかな

悲しみのゆるく流れて野をめぐる岸邊に咲きし
花の水色
うろくゝと紙屑拾ひぼろ拾ふ非人の如き秋の風
吹く

旋律のうち震る中に我が情緒千々に碎けて舞ひ
ありくかな
三石穂

血みぎろの重き心を引きづりて山坂道に秋にあ
ひける
父がもつかなしき性の今ははや我れの中にも出
で來るものか

事もなき君が手紙をあまたたびくり返し讀む徒
然なる日
あはれにも瓦斯の光に打ち震ふ大川端のみぞれ
の夜半に

沈みては沈み果てゝは浮くことの馬鹿らしと云
ふ地下室の女
舞姫は美しけれど手を取れば悲しかるらん冷た
かるらん

漂泊の我が半世の結論に石を抱きて死せんとぞ
思ふ
かりそめのいつはり言を今もなほ忘れてあるが
面白きかな

別れんと云へばたやすくうなづきぬおとなしき
女は悲しかりけり
落髪之三すじばかりが風立てば部屋の小隅にま
へるさびしさ

文苑

九十三

秋風は私の耳たぶのみを吹く白き波立つ北の湖
此の二人たき掟をあてはむる人のなき世に住む
べかりけり

耽溺の子よりいたまし我が心いづくに歸る方も
なければ

はじかれし吾の心はさびしくも秋風みつる野邊
にころがる

○ 静也

耳鳴りのやみたる時は恥しき漸く忘れ顔見合し
ぬ

○

白い花

二三町歩みて芝に相並び憩ひぬさまでつかれざ
りしも

たそがれや流人乗るてふ船つきぬ小雨そぼふる
南國の濱

おん腹をいためし過去の因果にか此の頃ひとり
胸をいたむる

はじかれてあるがやうなり一隅の小さき男三等
客車

○ 美絃

ひき裂きて丸めて投げし文殻の遠く流るゝ心地
よきかな

ふとこぼせしインク流るゝ卓上に淡き匂ひの残
るさびしさ

○

祐次

ともすれば沈みがちなる君なりきとつぎし後も
ろしも

沈み給ふや

僧院の生活に似るさびしさに我が魂は沈みゆく

おなじこと思ひしことありと思ふ小雨そぼふ
る夕の一時

かけ過ぎし電車の後に起りたる風につゝまれう
かな

○ 聆川

今日もまた高き塔をば思ひ居ぬほしいまなる
生につかれて

縁日の人の流れにまじり居て獨り居る如さびし
き思ひ

やるせなき寂しき來る度毎に時計を巻きて唄う
たはする

腹立たし物を讀めども解し得ず我と頭をうちで
見るかな

此の響世の人みなを泣かしむる力となれと鐘う
ちならす

やるせなき思ひにつかれ酒を賣る店の前なごう
ろつきてみる

切株のまだ新しき森に來て物を思へば快きかな
手のひらにのせし豆にもすぎぬかな男の誇り君
かさびし

人去りて温味^{あたたか}残る毛布なごかたつくる時いさゝ
かさびし

に向へば

つれづれに古屋敷町の樂書を見て歸り來ぬうす
らさびしさ

紅梅

さらさらと萬年筆を走らする浴後の指の白きよ

井田 美絃

紅梅や小さき坐敷に歌の卷枕に伏せし春の夜の

初春の風は眞白き小羊の柔毛にさわる心地に吹

人 紅梅の一花ごとに灯して君と相見ん我が願ひか

な 紅梅や昨夕積りし淡雪の雫に似るとみ情を思ふ

四高俳句會句鈔

春風は牧場くくに小羊の柔き毛に吹き若草に吹

風邪薬々研遅速に秘傳あり 絃子

く 春の夜や紅の灯に頬はてる句案の君が面影を思

風邪の床俳魔が我れを導けり 同

ふ 女官達集うて居ます小局にさめく聲す春の夜

死亡表書く手動揺れも寒さ哉 同

の興 海苔の香や春まだ浅き磯館浪の遠音を寝ながら

鳴の十夜御迎船の棹歌あり 同

聞きぬ 花いろく胸に咲きつる心地して春のよき夜に

詩想足らず燈油も尽きし寒き夜や 同

月の下行く 姫君が歌を秘めます文筥の紅のみ房に春の風吹

一夜嵐西塔の人風邪あり 鐵弓

同 鴛鴦池も見ゆ景の窓紅布織る

風邪神貧乏神相去來せる 雲外

同 鴛鴦や橋材の花崗岩つきぬ

風邪の氣味あれば饗宴辭退せり 同

同 向上の一路遅退や風邪の嘆

水仙や室の廣大火氣の絶つ 同

同 羊腸の愚論と笑ふ河豚喰ふて

水仙の庭や泉石藁伏せす 同

同 疑惧腹中に河豚汁を男かざりけり

江の景を水仙の舟見て下る 同

渡舟乗れば荷の人のあり水仙花 雲外

鹽釜兩童先生遺句集

同 鴛鴦や頃者温か春に似て

同 鴛鴦池も見ゆ景の窓紅布織る

月落ちて風呂焚く寺や木犀花

同 向上の一路遅退や風邪の嘆

木犀や月春に似て海音寺

同 羊腸の愚論と笑ふ河豚喰ふて

神棚に切火かゝさぬ相撲振り

同 疑惧腹中に河豚汁を男かざりけり

寫し行く高僧傳や夜半の秋

同 隣國の悪疫觸れも風邪の訓

金瘡を秋夜の燭にあらたなり

同 新家鴛鴦飼はんかおのづから池ありて

石文の怪体解せり蕎麥の花

同 佛眼を刻む徹宵鑿呀えて

維摩經蝕す文字あり暮るゝ秋

同 樂屋化粧の膚にべる光り寒き灯や

蒲團綿干せば小雨す暮るゝ秋

同 深窓と言はず不例を風邪の厄

轉や晨朝に開く施藥院

同 水仙や偈を方丈に籠る聲

高塔に天火そゞぐやはたゝ神

同 仕度部屋の鏡の光る寒き夜や

佛彫りて野に隠るゝや花茨

同 秘傳許すす夜や威言冴ゆる訓

山蔭に井を掘る人や朝涼し

同 落款に冴ゆる點心詩賦ありて

涼しさや藻の裏返す鉢の魚

同

渡し場の赤き小旗や水温む

繞石先生送別の句

行く君の馬鬣を吹くや冷かに
秋雨君追悼の句

句題更に傷心を覺ゆ秋の雨
歸耕の記草せば裏田鳥渡る
ゐのこ雲風に吹かれて鳥渡る
浦祭花火師遠く船になり
花火殻落ちある磯の夜明かな
棹高に漕ぐ一帆や渡る雁
雁鳴くや此浦漁歌の尻高に
寒村に 呀す岡の梟かな
崇杉闇にそゝるや梟鳴く
點晴を明日に残して日短き
一霞の後短日のかげりけり
麻姑の年に背縦横や火燧人
上戸下戸此ゝに落合ふ炬燵かな
聯絡船明け着くを待つ 夜長かな
黎明も 洲明りこのみ夜の長き

寡言又句案に富める夜長かな
唐藥を名の惡所や夜の長き
岩を瀬に渡る奇橋や鮎落つる
春風や伽藍に落ちし町の風
若草や湖を繞りて秋の國
一坪に芒を植えて閑居かな
月赤る荒海に入る芒かな
潮風に啣ふ謫居の芒かな
斷橋の河の廣さや花芒
城跡に豆引く人や花芒
木引小屋前後に高き芒かな
鹿鳴や芒の中の五輪塔

巳上



北辰時評

野球部に寄す

彼遂に容れざりけり。

憶ふ吉田の秋の夕 選手と校友と相擁して千行
の涙を注ぎてより兼六の櫻装を改むることこゝ
に幾とせ、雪辱の凱歌響き渡つて早くも一年は
回り來りぬ。

秋九月新チーム成る。離々として校庭を理め
疎々として空濠を没したりし夏草も 卿等の精
勵、今は清淨一根を止むるなく熱球蒼暎に躍れ
ば鐵棍風に激して練磨の猛烈云ふ可からず、然
共一朝灰雲天を掩ひ柳絮地に満ちて餘すなく熱
球遂に飛ばすに由なきに至つては人新陽の椒觥
に酔ふ時長良の私語を外にしつ雪のあした、ア

ア吹くよ寒月の夕、犠牲の熱血をしたゝらして
苦心慘愴す。孤雁夢を破つて南に飛べば殘葉ハ
ラハラと健兒の袖を掠む。顧みれば茲に六ヶ月、
一校の數を一身に負ふて身を忘れ己を捨てたる
卿等の苦心察するに尙餘りあり。

然共彼遂に容れざりけり。我れ更に人を派し
て其理由を質すに及び彼唯其の言を固ふするあ
るのみ。たゞ見る夕陽沈む金城の一角双腕を抑
へて撫然として卿等立つ。七百の校友悵然とし
て亦天を仰ぐ。

我もとより末技の勝敗を争はんとて挑みしに
はあらず。彼由來東海の硬骨兒を以つて聞えし
もの我亦白根の雪、北海の朔風に涵養し來りし
氣魄を以つて自ら起つもの満身の意氣を一個の
熱球一本の鐵棍に托して天下の夢を破らんとせ
しのみ。然れ共彼れ遂に容れざるに我亦何をか
云はん。

白雲今や動いて惠風徐に至る。校庭の淑氣之より新たなる可し、絶好の機を逸せし無念はさる事ながら自ら深く恃む所あつて練習日に怠る事なくんば卿等の意氣は戦はざるも依然として我が校不斷の誇りとなすに足らむ。暫く退いて乞ふ時の至るを待て。

(宗玄生)

出で、自然の聲に聞け

若草も醒めた。花亦醒めた。

金城の天も地も園も校庭も微にもらす吐息のやうな靄氣に打ち薫じて生れ來つた春の曙も競ひ出る光と雲とに誘はれて新らしき生命の福音を齎らして居る。惠風徐に至つてよせくる春潮のあとを見送る時精靈は天地と合し永遠と融合して人は無念無想一個無心の個性と化し終る。

然として我に歸る時其の所活動の姿あり。歡喜の色溢れ望の影か漂ふのである。此の間自然の

偉大なる權威は何うしても見逃す事が出来ぬ。人は萬物の長と自ら高く誇るかも知れない。矜れ共此の絶大動かし得ざる「自然の權威」の前にあつて何のミーニングに値するものであらう。夢に似て夢よりもあはい想ひに耽つて自ら傲語して止むない心の動搖を抑へ居るお互人の身を顧みると慚汗背を沾すではないか。

春は成長の時期である。凡てのものは成長の力に囚えられて動く。春の野は成長の力に満ち満ちて居る。暗より暗と辿つて行く汚れたる自我の嚴存に眼疲れ唇たれた人々は野に出で、渡り行く春潮のひびきを聞け。互寒の羈に纏はれて三冬の潜蟄に弛みの幾分を感じた人々は蒼暝没し行く夕ひばりの春のさけびを心行く迄味へよ。陽炎ヒラ／＼と燃ゆる中に蹶閃めかす農夫の姿や練絹よりも柔き若草に蝴蝶を追ひ行く小兒を見たり桑梓の春を思ひ家を思ひ、父を思

ひ弟妹を思ひ眞面目なる生命の幾分を味ひ得るであらう。

(宗玄生)

シヤロットの人

手紙に表はれるのと、逢うて見るのとは、全然違ふと、友の私を評したことがあつた。私には、何うと答へ様がなかつた。私の胸には二人の心が住つてるのだから、恚う云つて笑つた。

あり餘る歎きや、悲みが迫ると、私はよく、前後もなく泣き沈むとか、髪をかき撈つて苦み悶えるとか、感激を恣にして、心ゆく思をなした時があつた。次第にそれが變つて來た。今では激して來る情緒を、ちつと抑へつける。そして私の心が、どれ程までに、感激の力に堪へ得るかを見たいと思ふやうになつた。湧き出やうとする涙を忍んで、啜り泣くやうな心の動き、

昂じて來る動悸、纖維をわたる戦のき、それを凝と見つめて居るのが、やる瀬なく辛い。人からは、物好きな悲慘位に見られるかも知れない。私には、恚うして其の苦痛をしみ／＼味ふのが、うれしく思へるやうになつた。

責任とか制裁とかいふ言葉が、よく世間に使はれる。が、一人人は、是等の語を、餘り輕々しく口にしましまいかと思ふ。はかり難い人生を辿るに、何うして我が行く路が錯つて居ないとも、又どんな事變が行手に起らないとも、分らない。私は、踏みしむる一步一步に、びくびくして汗を流す。これは果して、私の卑怯なせいであらうか。どんな場合にせよ、本當によく我が身を顧みて、責任を盡して居ると言へる人は、あり難いであらう。まして、他人に制裁を加へるなど言へるものだらうか。殊に、友達の

間柄に、よく制裁など言ひ放たれるのを聞くと、何うしてあゝ、我が身を打遣つてゐる暇があるのかと、不審に思はれる。いざと云ふ時には責任を引きさうける、かう容易げに言ふ人がある。こんな挨拶を、私は、さうなつたら其迄よと言ふのと、おんなじ位にし加聞かれない。

私の組では、過去一年間、クラス會が開かれなかつた。心の僻んだ私には、それが喜ばしく見えた。一室に席を並べた三十の人は、それと異つた性格を得、異つた境遇に育ち、異つた思想を懷いて居る。これを兎に角して、クラス會といふ二つ色の被衣の中につゝむ、そして談笑の間に一つ精神に融和し得たと考へる。私は、さういふ人の情に信頼したくはない。

私は私の觀念が強い。自分ながら呆れる程、

此處から立つのかと思ふ。併し心の小さい私は、どうしても、我が身の頼りない悲みを忘れて、外を眺めて居ることが出来ない。

悔悟の一念に君は生れかほるのだと、宗教家は説く。果してさうであらうか。象徴的でも言つた様なこの言葉が、私には何うも解かれない。過去の罪惡非行は、いつまでも、重い暗影となつて、人の生涯につき纏ふ。一念の悔悟が、どうして、是等を洗ひ落して了ふのだらう。過ぎ去つた、淺猿しい日をふり返る時、私の心はただ戦慄に充たされる。改悟、懺悔で、すつかり、其の怖しい手を脱しられようとは思へない。祈れ、然らば救はれむ、と云ふ。餘りたやすげな言葉ではなからうか。私は、悔い改める事で安心して居る時をもたない。暫くの安を偷まうとする私の夢が、見るに忍びない過去の影によつ

て、不斷に魔される。そして起つて、苦しい一生の路もよろめきつゝ、辿るのが、私の運命であると思ふ。

固意地になることがある。だが、も一步踏み込んで見ると、我も何も消えて、たゞ寄る邊ない感じが身にせまる。何のために人は生きてゐるのだらう。限りないタイムに寄する五十年、三十年の命、長夜の暗に閃く線香花火にも見えまい。萬物の靈長と威張るもいゝが、よそから見たら、虫ケラの譚話とどこに選ぶ所があるだらう。しばらくの現に、はねたつて、喚いたつて、いづれは冷酷な自然の口にすつと吸ひ込まれるのが落だ。それを考へると、身に添ふ草葉の光ほどの影もないやうな氣がする。儂ないものゝ命。私はナイヒリストの心持を傷ましく思ふ。

この心持を推して、廣く世の中を觀る。我と同じく頼りない、淋しい生活をつゞけて行く億萬の人をいとほしむ。一切融通の愛がそこに起らねばならぬ。こんな風に説く人がある。宗教も

眠つく前の二十分か三十分は、空想に走り勝ちな私にとつて、楽しい時間となつた。頭を軽く枕につけて、眼を瞑ると、私は、過ぎ去つた日のこの事、かの事、又は行く末のことなどを、靜かに思ひめぐらす。すると、何か恠う、ぼうつとした、言ひ難い、懐かしい幻影に體を包まれた心持になつて、いつしか暖い夢に入る。現實を怖れる私は、夢の天地に入つて、はじめて、悠かな呼吸が出来るやうに思ふ。何の夢を見ようかと心掛けて眠る夜に限つて、ほかの夢を見るのも、面白い。二葉亭の小説だけに、主張は採用されない虚に興味がある、といふ風な言葉があつた。無論それは、愛人の間柄だらう。私は、

夢といふ我儘な子を愛したい。

るさ、買って戻つた花雪洞を鴨居にさして、美しい色紙を透してほのかに部屋をてらす光を振り仰いだ一夜の感興、今に忘れられない。

夜の空氣は、人の心を和げる。それに、肌にしむやうな灯の光は、心の底から、暖い情味をさそふ。私は、親しい友達を、こんな時に訪ねたい。そして、胸の中の詰らない思までも打ちあけて、しみじみ語り合ひたいと思ふ。

室の整理をして居ると、古い日記などが、よく手に取られる。箒を捨て、蹲りながら、知らず／＼読み入ることがある。二年ばかり前のに、こんな落書のヘエジのあるのが、目についた。

灯は大方、美しく、懐かしい。雨風の夜など、ランプの火が、しづかに机掛の上を照らしてゐるのも、花電氣のかゝやきが、大廣間のさゞめき、栗、少年の思想、餘裕、疑問の人、買被り、美を映すのも、蠟燭の灯の穂が、物思ふ人の微かな息にゆれるのも、霏ふる街角に、瓦斯の光が、涙、印象、祈り、確信、講話會の演説、彷徨、青白く、ふるへるやうに射してゐるのも。ひと春、沈黙、習慣、生存、表面の笑、ストラッグル、京に遊んで、祇園に夜櫻をたづねた時、昔めく文學、他人、汽笛、旅、」

私は、其の頃の半放浪的な心の生活を、なつかるのを興がつた事もあつた。さらに、其の歸かしく思ひかへした。

道を歩いて、知つた人の來るのでも見つける 例外として
と、もうにつこりする。きまりは悪いが、何うも であつた。

仕様がなない。眼を反らして近づくのも變だし、と云つて、妙にきまつた顔をして見せるも工合が悪いし、全く困る。こんな時には、少しばかり芝居氣がほしいと思ふ。

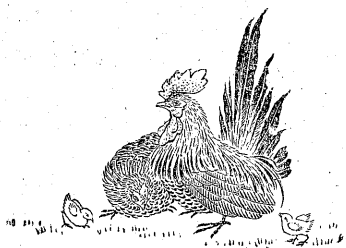
——よし生——。

何事か思ひてけふも野とわかる秋風立ちて草
しろき夕

しげる君の歌だ。いはゆる新味があるかないか知らないが、氣品の高い、すつきりした歌ひぶりに、人をそゝるやうな哀愁を含んで、堪らなくいゝ。前號の短歌では、これに心を動かされた。

其の人と思ひ比べて、おもはず微笑まれるのは、靜也君の

おごなしき性の君かなわが胸を躍らすのみを



部 報

講演部々報

○第一回演説會

新らしい歳と共に新らしい希望と力とに起ちたる本部は校内一切思想の中堅たらんことを期し眞面目なる思想と深遠なる知識とに向ひ猪突猛進せんとして午後六時より至誠堂に第一回演説會を開催す。

此の日柳絮頻りに戸外に狂舞し朔風窓面を襲ふこと劇しく北國自然の雄辯は至誠堂内青春の意氣と共に快氣云ふ可からず。

第一席 開會の辭 委員 宗玄順吉君

一年の事を計る元旦にあり。我亦之の平凡の古言を捕へ來つて諸君と共に我部の將來を議せざる可からず。家に家風あり國に國風あり。苟も一校の辯論部は嚴然たる校風を背景とせ

源なり。吾人は活動の人たらんが爲めに絶へず精神の鍛錬をなす。各自の向上は學校精神の向上なり。歳頭第一に青年の胸憶をつく乃ち向上の囁きとなす。

第三席 禮義尊重論 林 徳一君

平にして而も難きは禮義尊重の一事也。凡ての徳の運用は一に歸して禮義に存す。禮義は奔放の限定に力あり。彼の往々一世の偉人と稱する者も禮義尊重の美德を忘れて後世世人の嘲笑を購ひ得たる者少しとせず。君論じ來つて更に説く處首肯す可き者多し。

第四席 不老不死 中田秀雄君

敬に人格の敬に歸す、近事禽獸的行動の節制を忘却する風往々見る之換言すれば禮儀閑却の弊習也。早稲田の老伯曾つて百二十五歳説を出す。我一步を進めて不老不死を説かんとす。人は肉体に活けると同時に亦精靈の生活と思はざる可からず

君の説かんとする處の者は永遠に生くる靈的生

る色彩を具備せざる可からざる也。色彩即之生命也。我が講演部が具備す可き特種の色彩とは何ぞや。一、無邪氣にして雄大なる事、二、形式の光彩に走らざる事、三、輕薄なる政治論に走らざる事、之なり

思想身体に一切の自由を得るは吾人青年の時代に於て之を見る。一度實社會の數多き來傳に會すれば凡ては收縮し凡ては變形す。青年の生命は無邪氣也、力也。彼の形式の選擇に腐心するも元より辯論修練の一要素なれ共更に考慮すべきは實質の光彩に存する也。近時一般青年が眞面目なる活問題の學術的研究を忘却し浮薄なる時事問題にかぶるは何事ぞ。

青年の叫は眞摯なる思想問題に觸れたる熱烈なる叫びたらざる可からず。

第二席 年頭感 文室重敏君

精神一到何事かならざらんの金言は近時益々新らしき意義を明らかにしつゝあるを見る、見よ千里眼は精神萬能を示さんとして偶像崇拜は催眠術に之を見るに永遠に保存せらる可きもの也、

現代教育の欠点は精神教育に冷淡にして學術の末葉に汲々たるにあり。精神の修養は活動の根

活に外ならず肉体生活の五十年尊む可し。然れ共死後の生活更に大なるシーリングに値するあるを見る。

人は永遠に生きざる可からず。藤公はハルピンの土と化すも雖も彼は今日に於て尙生くる也。何となれば世界は彼を語り社會は彼を忘るゝ能はざれば也。意中の生活は何等の好音ぞ。

第五席 現代人心欠点救濟法

井上 功君

混沌として極りなきは現代思潮界の一般也。四方より犇めき來る幾多思潮は突として合し生ずる者本性極む可きにあらず。此の間に漂ふ人の子は其れ何處にか適歸せんとする。

ニイチエが劣者淘汰の本義や更に進んで道徳主義に向ひ矢を放ちたる一派、露骨なる本能を是認したる否屈服したる一派の叫びを聞かずや。然れども慮る勿れ吾人には本能に属するには余りに強き理性の存在する也。

眞面目にして美しき煩悶の解決に苦心せずして腐爛せる心の叫びは何等の醜狀ぞ。先覺者の任務は實に此の一事にあり。

腐爛せる心は堅實なる意志の存在、目的に従つて動く事にあ
り。

第六席 青年の責務 岡 弘二君

上流社會の所謂紳士なる者が敗徳汚行あるにもかゝらばらず。
現代青年が墮落せり云ふは源泉に於て既に濁りて而も尙下
流の清きを求むるに等し。

深夜孤燈の下に瞑目端座して實在の叫を聞きて
こゝに吾人の責務を自覺す。責務を行ふは一に
克己心に待たざる可からず。「邪念制壓は生の最
大快事也」てふ古人の一言は實に不滅の名言也、
人は永遠に責務に生きて責務の爲に生を裁する
の覺悟を要す。

第七席 農民の保護 中納錠松君

君が説かんとする社會問題は近時喧ひすしき社
會主義の空谷の響にあらず。社會的問題の眞面
目なる學術的研究の結果也。

國家が尤も心を盡すべきは農民の保護也、農村の疲弊は大多
數國民の購買力の減退を意味し其の結果は經濟市場をして不
景氣に陥らしめざれば止まず。現に今日金融の緩漫を稱へな

根本なりとは負債其ものがより大なる實益を致すの目的に提
供せらるゝが故也。

金錢の負債は尙一枚の紙に依つて法の力に安ん
ずるを得。然共法を離れたる道徳の負債は各個
が實体の力に訴へて其保全を期せざる可から
ず。金錢負債の重要視せらるゝるに反し道徳的負
債の毫も顧慮せられざるは何ぞや。

禮儀尊重は文明の美德也。人事複雑に進むに従ひ吾人は常に
多くの負債を免れぬが故也。此の時に當り獨り己を高ふして自
己以外を蔑視するが如きは尤も耻づ可き事にあらずや。人に
は人として自然に備ふる負債あり。亦個人個人に境遇閱歷に
依りて眞ふ負債あり然共之を敬重す可き点に於て何の異なる
所やあらん。

負債を閑却するは殊に邦人の短所也。先生講演
實に二時間半、縦横の意氣を以つて説かるゝ時
精悍の氣眉間に迫る。其絶へず口頭に上りし「己
を知れ」の一言は無限の妙味を聽者に與へたる
が如し。河合先生の閉會の辭にて終る。

がら尙購買力の足りざるは一に農民疲弊に基く。農業は既に
商工業に比して根本的不利益の地位にあり。年々平均收穫高
は國稅、地方稅、町村附加稅等種々の支出を計するに余す所
僅に口をわらすに足るのみ、效濟の方法は如何、之大に攻究
す可き問題なり。事業主と労働者、地主と小作人との關係の
如き實際社會にふれたる問題の攻究は吾人青年と雖も決して
ゆるかぜにす可きものにあらず。

第八席 道徳經濟法律上より見たる負債

來賓 李家石川縣知事

辯論の風は尤も慶すべき事なれ共唯題を撰ぶに徒に机上の空
談に走らず。成る可く眞面目な實社會問題に觸れて論議せら
れ度き者也。眼を舉れば諸君の論議す可き者一にして足らず。
之れ先生の劈頭道破せられたる一言なり。今や
長驅本論に入る。先づ法律上より負債の意義、
債務者、債權者間の法律上の關係を詳説し道義
日に廢れて公義漸く弛まんとする時吾人は止む
を得ず負債に關する法の幾分を解し置かざる可
からずと更に得意の經濟論に入る。

負債は一見單純の如し。然れども一國の生命たる經濟界の死
活は一に此の負債の力に依らざる可からず。負債が經濟界の

野 球 部 報

嗚呼壘釜先生

明治四十三年十二月十一日部長壘釜先生忽焉
として易簣し給へり。悲しい哉。

歳の始めは三高に多年の仇を報ひ得て、我が
部の外征初めて凱歌を唱へしものを。斯くて幸
多かれと祈りし歳も思へは仇に暮れ行きぬ。凶
雲そも何處に胎せしか、我が部多年の衰頽を轉
じて一道の光明を導き給ひし先生は今や鴻雲夜
臺の上返らぬ眠に入り給ひしなり。お暗き北の
空より長き憂を封じて落つる夕雨に、眼を閉ぢ
て過ぎにし一歳を忍べは世はさながらの走馬燈
なり。寧日無き我が部を卒ひ給ひて温容の裡確
固たる或る物を包み給ひし平靜たる先生の人
格、今日も猶我等の頑愚を不言の内に戒め給ふ
如きをおぼゆるを、一夜玉蘭挫けては又會ひま

劍道部部報

一、寒 稽 古

つるの由もなし。夢平、現乎、双袖涙を被うて猶不圖我が悲を疑ふか如きを如何せん。
 嗚呼四十三年よ。そも如何なる宿命を以て我が先生を奪ひし乎。汝の頁の過去てふ彼處に纏る時、我等か涙の其の一端に落されしを知れ、我等か涙の其の一線に綴じられしを知れ。東亞の思潮はそよ吹く風にも揺らめくを、況んや其の文壇は黄に染まり紅に移ろいて寧時なし。此の時に當り確固たる覺悟もて立たれし先生は、茲に日本々來の自我を發揮せしむ可く多大の未來を有し給ひしなり。無殘なる汝は我等の詛を跡にして雷に我が部の先生のみならず、併せて明治文壇の開拓者をも奪ひ去りぬ。斯くて汝は再び歸る可くも非ず。柳絮今や金城に烟る日も亦憂を誘ふのみ。

「北風雨雪恨難裁」とかや。悲しい哉
 (成川武男記)

我劍道部は例年の如く一月十一日より三旬酷寒の間、無聲堂に於て寒稽古を行へり、振武劍磨皆勤せる者七十有余名、昨年比し正に三十名の増加を見たり、年々此真趣を解して其心身を併せ洗練せんとするもの漸く數を加ふるは、吾人の共に悦ぶ處、又一つには北辰校々友の意氣愈、昂るを證するに足る。
 北國の冬期はやゝもすれば人をして徒らに閑居妄想を恣にせしむ、痛嘆これより大なるはなし、然るが故に放課後の百分時を爐を擁して心なき炭火に暖をとるは吾人の潔しとせざる處也。
 朔風雪を交へて寒颼げに骨に徹す寒真中吾人は如何にして自然の横暴に抗し靈火を萬丈に喚發せしか、思ふに寒稽古の一語よく此消息を解説

して余りなけん、あゝ海關に轟いて白山嵐大地に荒ぶの時一道の活氣を保ち得て雄々しくも三尺の秋水に生き心と肉とを併せ養ひし若き人々は誠に多幸なる哉、凝つては百鍊の鐵となり發しては大和男子の膽となる秀嶺銀海に似て、傳ふべき永劫の誇り也、北辰校また人あり今にして何ぞ陵夷を嘆せんや。

二、大 會

月余りみがき來りし我等が腕は脾肉の嘆に堪へず二月十二日當市下のさる劍士を招き春季大會を擧げたり、此日天氣好晴されど流石に寒氣凜烈、自ら戰士の氣昂る。

午前九時開會、會長の挨拶あり後直ちに寒稽古皆勤者の紅白勝負に入る、龍呼虎應げに戦はずさまじくも見事なりき、佃、鈴木敬、神岡、黒田、杉立、渡邊源、飯嶋、河口の諸氏拔群の功をあらはし此日初陣の功名をぞあげにける。

- | | | | |
|-----|----------|-----|-----------|
| ツ、コ | (大谷 督勵) | コ | 雨 宮良直 |
| ツ、コ | (金子 源一郎) | メ | 高山 千里 |
| ド、メ | (高橋 岩五郎) | コ、コ | 小野 鈔多 |
| ツ、コ | (鳥居 武雄) | ド、ド | 澁谷 壽雄 |
| コ、メ | (今城 慶三) | コ | 本多 恭郎 |
| メ | (石端 良平) | ド、コ | (佐藤 三千三郎) |
| メ | (石端 良平) | メ | 金子 正夫 |
| × | (佐久間 健次) | ド、コ | (高田 正次郎) |
| × | (北川 榮一) | ド、コ | (津山 玄道) |
| コ、メ | (石澤 儀兵衛) | メ、コ | (奥泉 長三郎) |
| メ | (藤 江 孝) | メ、コ | (近藤 可哉) |
| コ、コ | (伊藤 久治) | ド | (下瀬 憲之) |
| メ | (林 千 秋) | メ、コ | (柳 野 嚴) |
| × | (現影 顯成) | ド、コ | (井口 哲宗) |
| × | (木戸 健吉) | ド | (長曾我部東城) |
| × | (唐澤 淺水) | メ、メ | (池原 啓三) |
| × | (近藤 時司) | メ、メ | (六人部 克己) |
| メ、ド | (辻 岡 質) | ド、メ | (金森 虎男) |
| メ、ド | (相 蘇 保) | ド、メ | (能村 幸次郎) |

(以上三本勝負)

午後愈々外來者對本校選手の勝負に入る。

ド、コ(佐藤三千二郎)
工(杉原茂一)

現れ出てたるは今日此頃勢猛なる佐藤なり何かは何てたまるべき、敵くだけよと計りに打ちたり。

ツ、コ(相蘇保)
師(大井正己)

ド、ド(池原啓三)
ド師(森多仁三郎)

池原がやつと入れたる一刀美事、先づ敵の胴を切れば敵もさる者隙を睨つて池原が胴をうつ、池原今は氣もいらだち衣を染むる鮮血を物さもせず奮戦數合、遂に又もや敵の胴薙きとつたり。

コ、コ二中(金子要人)
田川時生

兩士激闘暫時、技やまさりけん運やよろしかりけん、小手二つうたれて功名敵に擧がれり。

メ、メ(柴野操一)
一中(岩本常吉)

柴野の太刀先動ぐと見ゆれば敵の面二つまで打つたり。

コ、コ工(唐澤淺水)
能關力松

唐澤元來面のきと手なれど此日如何はしけん、遂にむざく敵

に小手断ち切られぬ。

メ、コ(宮内直吉)
師(牧野清)

宮内は今年漸く鬚取りたらんと見ゆる小冠者の甲斐々しく體ひたり、相手如何と見てあれば丈高き事尺余、されど難戦四分敵の首級をあぐ褒詞ながら轟々。

コ、コ(淺水成吉郎)
小中(安惠宗純)

淺水得意の小手に何の苦もなく遠來の敵うち伏せたり。

ド、ド(山田卓爾)
ド一中(白山政男)

緩急虚實、上を下へ切り結ぶ中、山田切先鋭く敵はばざりて胴切られて斃る。

コ、ド(辻岡恒質)
コ商(下田恒次)

辻岡立上るや胴ちぎれよと計りに打ち入れれば敵うけ損じたり、されど敵もさるものさはせじと辻岡の小手を打てば辻岡然らばさて引く小手とつたり。

メ、メ(林々木文三)
專(窪田太作)

胴の名手と聞けたる林、今日の動き如何はしけん、面二つまでさられて無念敵をして得意たらしむ。

ツ(侯野景秀)
メ、コ工(都賀田勇馬)

見事せんま控へたるは工業學校の御大将也、此方は侯野竹胴に袴短かうはきて身輕に出でたり、侯野ぐざと一太刀突けば敵小手をとり丁々發矢、と見る間に又もや無慘侯野の面はあげに染みぬ。

ド、メ(林)
無(田上善太郎)廣

跳り出でたる林、雪をばれたる竹の横見事や暫しが程に面と胴と打ちとつたり。

×コ(宮内直吉)
コ二中(村井順二)

何れ劣らぬ武者は二騎、變幻開闔互に小手をさつて引分けられたり。

メ(六人部克己)
コ、メ警(鶴見芳吉)

さすが横面のきと手と思ふが様にならず、小手に深手を負ひたりき。

ド(侯野景秀)
メ、ド師(中榮勇吉)

敵は師範の御大将とぞ聞ゆし、兩士胴うち交はして勢龍虎球を争ふが如かりしも侯野遂に無残や面受け損じぬ。

ド、メ(福嶋藤次郎)
專(窪田太作)
福島上段に構へ難なく面をさり、かへす太刀先又胴へぐざり、群衆躁然として稱讃やます。
メ(淺水成吉郎)
ド商(羽田興吉)
一上一下虚々實々よく戦ひしが淺水負傷の爲め乍遺憾中止なれり。

ド(小坂嘉一郎)
ツ、メ歩(大西)

敵は國家の干城にして鉢懸魁偉也、竹刀薙々又閃々小坂よく戦ひしと雖遂に功を敵に譲るに至りぬ。

寒稽古皆勤者報告

進級者證書授與

武徳流之形(都賀田師範)
北(村師範)

ド(高田昇)
コ、コ監(高村金春)

立ち上るや高田先づ飛鳥の如く跳り込め胴きりたるは見事なりき、されど敵剛也容赦せじと突きかけ疊み込み高田が小手續げ様に打ちとつたり。

メ、コ(福嶋 藤次郎
步七)今村 嘉吉

福島よき敵ござんなれき真中さして躍り出でたり、さなきだに剛の者何かは以てたまるべき、竹刀もたわまでなぐりつけたり。

コ、メ(林 廣
一中)廣瀬 光家

林先づ面を打てば敵いたくたじろぎたり、機やよこまはたさ打ちたるは確かに小手なりけり。

メ、ド無(時 枝 薫
平 井 壽

剛の者二人、何れ劣らずと見ゆしが遂に時枝胴拂はれぬ。

コ、コニ中(金本 萬吉
田中 孝茂

黒革威しの鎧着て三尺余りの大太刀引提げ控へたるは二中の御大将さぞ知られし、此方は猛將金本、躍り出づるや敵の胴くだけよと計りに切りたてたりしが小手打たれ暫しが程にむぞや又々小手断ち切られたり。

× 新納 恒壽
專 辻 金 二

此兩士一對にして彼氣合を入れて切り込めば我体を固めて受け流し結んでは解け解けては結び丁々發止、遂に勝負はなかりけり。

×(宮野 專太郎
館 昌 次

宮野寶輪の勢もかくぐさ打ち入りし一刀に敵端なく胴を打たずれば敵かくては面目なしと小手をさり激戦又激戦余りの一本敦れの有か危かりし刹那引分さなりぬ。

メ、コ(時 枝 薫
山下 謙 三

時枝病軀もいさばす雄々しく渡り合ひしが無慘敵の爲めに小手さ面さを打たれけり。

ド、ド一中(持田 鐵之助
西川 湊

東の方陣幕をあげて現れ出でしは名に聞ゆし櫻章校の御大将也、此方竹胴に身を固めて出でしは鐵腕持田なり、目も覺むる戦やあらんと待つ程に持田の上段一撃、こは確かなりと思ひきやなか、敵に胴切られ、むぞや續げ様に又しも胸雜きたてられ、無慘も無慘なりき。

ツ、メ(稻葉 一也
步三五)中村 地介

敵は皇土の干城にして其太刀先又稀に見る處なりと雖も稻葉の突がツクさばかりに仰きけり。

メ、メ(持田 鐵之助
專 辻 金 二

メ、ド(小坂 嘉一郎
警)山下 一美

小坂竹刀上下に振ふ程こそあれ敵の胸雜き立てり飛び去り、五体いさゝか固むと見ゆたりしが、真向に面打ち上げたり。

ド、メ(金本 萬吉
コ)四ツ谷喜太郎

先きの敗辱心に吞むで打振り突立てたる太刀先きはあやまたず敵打ち伏せたり。

ド、メ一中(新納 恒壽
稻本 龍助

先づ面と云ふ聲敵に起りぬ、新納今はさいきまきて丁々を切り結びしが残念胴拂はれて功は敵にありぬ。

ツ、メ(稻葉 一也
小中)今村 嘉吉郎

稻葉の太刀先眞に人目を奪ふものあり今日も大喝嘩喊と叱とつ大太刀打ち振り遂に敵の頭ちぎれよとばかりに突き立たり。

メ、メ(柴野 操一
步七)長谷川 信

軀幹長大何れ劣らむ荒武者なれば暫しの間一進一退濫りにせず發矢々々さかせぎけるか運や強かりけん柴野の太刀敵の頭にぐさ計りに打ち入りぬ。

元來持田と申すは面のきき手にして曾て幾度其の譽を得たり、今日もいつしか持田が打込む一刀敵の面をさつたり、敵もさるもの我小手をさつたりしが最後に持田すんご切り込んで一太刀又もや面にあびせかけたれば、彼常人の五撃にもや笑へたりけん五面と頓首して退きぬ。

ド、コ無(宮野 專太郎
幸 坂

敵は其人ありと知られたる者黒き稽古衣に黒皮の胴を着し之も紺衣の袴少し長うはきたるに下より下まで眞黒にて彼牛驚く云はれけん暴法師の様に似たり、此方は宮野やを立ち出で二上一下一往一來秘技仙術を盡して争ふ程に霹靂一刀宮野小手をさられ續く太刀に胴拂はれて實に戦は無慘なりき。

ド、メ(稻葉 一也
專)北野 榮 三

水車の如く打ち振ふ稻葉が太刀にさすかの敵もようは堪へて胴横様に拂はれて引退りぬ。(勝負以上)

會長の閉會の辭ありて散會、時や薄暮、壯士觀者の群は潮の如く堂を溢れ出でぬ。

三、進級及編入者氏名

稻葉一也、進藤隆一(以上五級中へ進級)
持田鐵之助、時枝薫、柴野操一(以上五級下へ進

級)

福嶋藤次郎(六級上へ編入)
新納恒壽、俣野景秀、林廣、千家鐵磨(以上六級中へ進級)

金本萬吉、小坂嘉一郎(以上六級中へ編入)

宮内直吉、淺水成吉郎、辻岡質、高田昇、椎名長

吉(以上六級下へ編入)

能村幸次郎、近藤時司、河口彌三郎、奥泉長三郎

(以上七級上へ編入)

高田正次郎、柳野巖(以上七級上へ進級)

兩宮良直、田嶋幸雄、井口哲宗、林徳一(以上七級

中へ進級)

今城慶三、澁谷壽雄、前田彰、須原廣治、鈴木孝、

藤江孝、古川六郎、堀田四郎、和田國友、長曾我部

東城、乾利一、中谷繁三、木戸健吉、木多恭郎、今

子正夫(以上七級中へ編入)

舟木重憲、黒田吉郎、富樫六右衛門、市川理義、大

橋三郎、鈴木敬二、松井義雄、氣賀得三、細田壽榮
重、大坪不二馬、大谷督勵、馬場博、佃愼一、石井
忠治、神岡義雄、平岡泰太郎、石端良平、渡邊源太
郎(以上七級下へ編入)

四、遠 征 録

一月三十日第一中學校大會に於て、

フ、メ(小) 坂 俣野

フ、メ(橋) 瓜(二中) フ、コ(岩) 本(一中)

メ、メ(金) 本(一中) メ、ド(新) 納

コ、ド(稻) 本(一中) フ、メ(廣) 瀬(一中)

メ、メ(福) 嶋

フ、メ(西) 川(二中)

二月五日第二中學校大會に於て、

メ、ド(辻) 岡(六) 人部

メ、メ(谷) 井(二中) コ、コ(山) 本(二中)

メ、メ(林) 中(二中) メ、ド(小) 坂

メ、メ(田) 中(二中) フ、メ(西) 森(二中)

二月四日師範學校大會に於て

メ、メ(高) 田(關) 山

メ、メ(牧) 野(師) コ、ド(寺) 尾(師)

柔 道 部 報

フ、メ(金) 本
(中) 榮(師)

二月九日商業學校大會に於て

メ、メ(池) 原(相) 蘇

メ、メ(下) 田(商) 大(井) 商

メ、コ(羽) 田(商) 内

三月五日醫學專門學校大會に於て

コ、メ(窪) 田(醫) 福(嶋)

メ、メ(柴) 野(醫) 根(布) 野

コ、メ(北) 野(醫) コ、コ(辻) 宮(野)

コ、メ(持) 田(醫) メ、ド(池) 山(上) 野

メ、コ(加) 藤(葉) 藤(醫)

(しばの生)



光榮煌々花の歴史を以て立てる 四高柔道部年を
追ひ日に従ひて隆盛の域に進みつゝある 我が部
今や新しき年を迎ふるに當り極寒の期水を踏み
鵝毛を戴きて夜毎無聲堂裡に集る者百を數へて
尚ほ余す數十各々一片の衣を着けて技を磨き術
を練る所衝天の氣堂に満ちて尚ほ餘りありと云
ふべきか

二月廿一日山陽の彼方六高の士戰を我に挑む戰
は敢て吾人の辭せざる所直ちに之に應諾の書を
送る然れども彼は地を京洛に選び我は城高く緑
濃き尾山の地を以てし返報を待つ事一週有余日
其間二通の電報を飛ばして得し者は何ぞ曰く挑
戰撤回の電報曰く延引謝罪の書狀之あるのみ然
れどもそが一封の書能く六高柔道部の誠意を現
せるを喜ぶ。

然れども嗚呼不幸なる哉や我か柔道部過ぐる秋
 三高の挑戦に應じて立てる六十有余の血兒殺氣
 に満てる我か柔道部の意氣一陣の秋風に吹かれ
 て唯一片の悲憤の情と化す然りと雖も我か部の
 有する百有余人の士敢て此の一事を以て氣滅す
 るに非ず歸る者は嚴父慈母の下に新進の銳氣を
 養ひ止まる者は二旬の休暇を利用し切磋琢磨以
 て本年寒稽古の隆盛を見るを得たり然れども六
 高との交渉破れて一度復せし意氣は亦下り再び
 立ちし勇士亦退かざるを得ざるに到る唯吾人は
 寒地を拂ひ鳥花に鳴いて萬樹緑ならむとする時
 亦三回氣上り士立つの期あらむ事を期し之を渴
 望して止まざるなり

第十七回柔道大會

雪は霏々として急に止みさうな様も見へず寒さ
 は骨に徹するばかり薄着の肌膚は覺えもない迄

に指は今にも断切れさうに痛出して折屈もま
 まならずとは實に北國の冬の景色なるか其極寒
 三十日の寒稽古をも終へて、小雨をば降る二月
 十一日日出度き紀元の佳節に午前十時式終ると
 共に我が部第十七回の大會を無聲堂に催す開會
 之辭終るや番組の順序に従ひて寒稽古皆勤者九
 十有余名の大紅白勝負初まる實に斯く盛況をな
 す事我校創立以來未だ耳にせざる所なり

大將 初段高山二千里
 副將 淺水成吉郎
 大橋仁太郎
 松野俊良
 今城慶三
 鳥居武雄
 板倉幸進美
 小泉信夫
 石澤儀兵衛
 副將 中村政吉
 近藤可哉
 小坂義雄
 津山玄道
 牧野善次郎
 川上實男
 現影顯成
 山崎辰二

杉浦郁示
 佐倉鐵太郎
 澁谷壽雄
 西村外次郎
 居村淳一
 膳龜純三
 和田勢一郎
 北條敬太郎
 青木順一
 西義一
 藤井隆吉
 藤田藤太郎
 川瀬義友
 豊島泰國
 松平康幹
 井奈清一
 北川榮一

杉坂富之助
 矢幅正三郎
 宮岡文城
 中納錠松
 中谷繁三
 柳野巖
 弘岡忠道
 御室佐太郎
 新莊義人
 牧野利家
 田原喜嗣
 阿蘇良造
 大井昌四郎
 泉孝太郎
 多和田立雄
 今井剛
 室木隆三郎

瀧谷健藏
 林徳一
 梅谷興七郎
 石端良平
 清水義男
 近藤憲章
 菊池龍道
 中村勸
 河野隆
 酒井右馬二郎
 高田直之助
 清水良策
 森寛治
 前田彰
 大崎大禪
 辻外彦
 松山銚一郎

野村伊兵衛
 山本外三郎
 後藤成一
 岡田尙介
 竹内孝
 舌野方治
 藤川英彦
 中田秀雄
 石川次郎
 磯貝喜一郎
 本間公一
 高辻眞
 結城清十郎
 尾崎獎
 山本光政
 栗原三郎
 蓮澤淨淳

寺田平次郎

林 昌夫

小川 清次

永井 四郎

永田 憲雄

江利川 音次郎

松岡 昌藏

先づ兩軍相並びて一禮をなして勝負に入る紅軍
 小川白軍永井兩軍の先鋒として立つや永井大外
 刈を以て難なく小川をたせしも紅軍に林なる
 者出て之れ亦得意の大外刈を以て二人をぬき江
 利川と戦ひ互に技を振へしも雄雌分つべくもあ
 らず終に引分となる紅軍寺田病氣の爲に出づる
 能はず白軍の松岡一人を投げて辻と分く後兩軍
 互に勝敗ありしも紅軍に前田なる剛の者出て栗
 原を本袈裟にをさへ二人を投げて結城と分く後
 白軍に勇士あり本間と云ふ君体小なりと雖も技
 妙を持足業腰業種々の技を以て三人を打ちて紅
 軍河野と戦ふ本間良く戦ひしと雖新進の士には
 如何ともする能はず河野は本間をたをし磯貝を

投げて石川に破る然に此時紅軍に中村と云ふ猛
 將立つや出足拂の妙技に加ふるに秀絶の腕力を
 有し難なく五人を打つ然るに亦白軍に關田立つ
 や汝猛將たりと云ふとも我もさる者と云はむば
 かり互に長大の驅筋肉を猛くして戦ひしが中村
 力盡きてたをれ紅軍の二三氏關田の掌中に入る
 然るに時に紅軍に清水立つ氏は何處となく貴公
 子然たる風を持しながらも一度敵前に立つや血
 全身に漲り大腰の一技を以て三人を打ちて室木
 にたはる此處に於てか名に似て瘁猛の聞え高き
 今井出て獅子奮迅の勢を以て紅軍の四士をしめ
 紅軍をして一時顔色なからしむ然るに紅軍の豊
 嶋短小の身を以て良く戦ひ今井と分く後兩軍殺
 氣益々満ちて大に奮いしも技相伯仲して互に一
 人をぬき二人を投げて進む紅軍北條は牧野と戦
 ひ足を傷めて引分く白軍の御室己が体に數倍せ
 る和田を脊負いて美事彼れをたをせしは亦人目

を引きし哉後白軍に柳野現はる氏体驅磐石の如
 一度立ては頑として何人も容易く之を動かすべ
 くも非ず然るに紅軍西村小さき体を以て勇敢に
 戦ひ終に二十三貫の敵の体を美事脊負うて投げ
 たる時は満堂思はず驚嘆の聲を放つ然るに西村
 は中谷にをさへられ中谷澁谷に内股を以て破ら
 る君体小なりと雖四高柔道部中熱心家として名
 高く平日練習の功空しからず中納大外刈に來る
 や道に之を反して勝つ然るに白軍に亦宮岡出て
 て卷込大外刈を以て澁谷佐倉を投げて杉浦に脊
 負を以て破らる杉浦矢幅と分け紅軍石澤釣込足
 に出で、杉坂をたをし山崎と分く紅軍小原現影
 をしめしが白軍に新進氣鋭の士川上出て、小原
 をおさへ板倉病氣の故を以て出づる能はず鳥居
 亦瘁猛に戦ひ得意の技を以て敵をせめしも終に
 大外に破れ此處に紅軍今城出て、我こそ見事汝
 等が首を取て我が倒れし勇士が響を報ひんとい

さみ立ち或は横捨身に或は脊負に出でしも川上
 大地を取りて動かすとかくする内今城の脊負に
 川上頭を疊に打ち怪我分けとなる紅軍猛將松野
 立ち牧野に向ひ牧野新進にして且つ勇敢なる者
 と雖も松野か六尺の犬軀には敵すべくも非ず再
 度の追込みにたをる白軍津山代りて出で種々の
 技をつくせしも之れ亦徒に敵をして名をなさし
 むるの器となり小坂出でず近藤立つ松野「汝小
 童我が掌中一握りにせむ」この勢を以て同じく
 追込みに出でしも近藤もさる者終に裏投を以て
 松野を投ぐ紅軍古橋出づるや直ちに巴投を試み
 しも効全からず其後互に得意の技を出せしも効
 なく近藤足拂に出づるや古橋裏を取りて紅軍勝
 ち此處白軍副將中村出て、左浮腰を以て難なく
 古橋をなげ紅軍副將淺水に向ふ兩將相戦ふ事七
 八分に到りて尙は勝敗決せず分となる此處に兩
 大將高山高橋出づ高山は新進の驍將高橋は我が

部の元老高橋は肥大の身を以て小業に出で高山は長大の軀を以て大業に出でしも共に相譲らずとても勝負見るべくもあらねは高橋寢業に出て互に上になり下になりて戦ふ事暫らくにして高橋高山の腕關節業を取りて此處に日本の月桂冠は白軍の手に歸して勝負終れるは二時過ぎ之より直ちに三本勝負に進む

- (森) 寛 禮
- (山) 根 禮
- (結) 城 清十郎
- (石) 川 次郎
- (石) 端 良平
- (近) 藤 憲章
- (半) 澤 平吉
- (今) 井 剛
- (中) 村 勸
- (大) 井 昌四郎
- (青) 木 順一
- (居) 村 淳一
- (中) 田 秀雄
- (高) 辻 眞
- (清) 水 良策
- (新) 井 虎輔
- (山) 田 盛義
- (瀧) 谷 健藏
- (梅) 谷 與七郎
- (土) 田 與三郎
- (牧) 野 利家
- (關) 田 昌介
- (東) 郷 勝介

- (御) 室 佐太郎
- (河) 瀬 義友
- (豐) 嶋 泰國
- (河) 合 作次郎
- (澁) 谷 壽雄
- (中) 納 錠松
- (柳) 野 巖
- (和) 田 勢一郎
- (佐) 倉 鐵太郎
- (西) 村 外次郎
- (杉) 坂 富之助
- (宮) 岡 文城

- (今) 城 慶三
- (津) 山 玄道
- (古) 橋 仁太郎
- (松) 野 俊良
- (中) 村 政吉
- (淺) 水 成吉郎
- (高) 橋 岩五郎
- (初) 段 高 山 千里

講道館極之形(立合)

(近) 藤 可 哉

五之形

(初) 段 金 子 源 一 也

終つて愈來賓他校三本勝負にうつる

- (商) 大 井 正己
- (清) 水 義雄
- (師) 小 堀 初三郎
- (阿) 蘇 良造
- (師) 笹 木 從誠
- (弘) 岡 忠道
- (商) 鹽 唯一
- (中) 谷 繁三
- (一) 中 津 田 秀榮
- (直) 江 忠也
- (二) 中 瀨 村 太作
- (小) 原 信夫
- (步) 七 菊 田 輝男
- (杉) 浦 郁示
- (步) 七 檜 田 與三吉
- (矢) 幅 正三郎
- (商) 石 黒 庄次
- (布) 村 繁
- (師) 加 藤 捨次郎
- (田) 原 喜嗣
- (醫) 堀 乙次郎
- (膳) 龜 純三
- (二) 中 多 田 野 信孝
- (田) 上 實
- (步) 壘 堀 又幸
- (北) 川 榮一
- (一) 中 岩 井 清
- (山) 崎 辰二
- (步) 壘 猪 村 熊
- (一) 中 河 崎 嘉三吉
- (石) 澤 儀兵衛

- (步) 壘 高 尾 懋
- (中) 山 千 秋
- (一) 中 本 多 讓
- (牧) 野 善次郎
- (二) 中 大 桑 實 一 郎
- (森) 長 四 郎
- (醫) 長 外 喜 男
- (鳥) 居 武 雄
- (步) 七 初 段 池 田 證
- (初) 段 金 子 源 一 郎
- (醫) 中 林 清 左 衛 門
- (小) 坂 義 雄
- (二) 中 宮 地 惟 彦
- (柴) 野 操 一
- (一) 中 宮 西 義 隆
- (川) 上 實 男
- (二) 中 松 田 清 徳
- (淺) 水 成 吉 郎

以上廿五組の對外三本勝負も順次終りて番組尚ほ全く終らざるに日早や西山に没して電燈をつけて燈下に勝負をなし賞牌授與並びに會長挨拶を終りしは七時

盛なる哉や四高柔道大會例年に加ふるに外來選手に歩兵七聯隊將校團並びに歩兵三十五聯隊將校團を以てし六組の形四十三組の三本勝負九十有余名の紅白勝負之を以て電燈を点するに到る吾人唯今日の盛況に甘せず尙將來我が部の大々

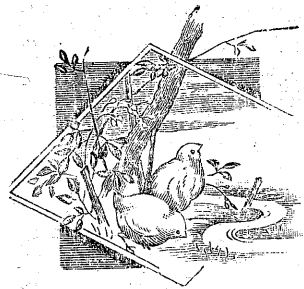
的發展を祈るのみ一般觀覽者堂に満ちて余あり
來賓亦多し (G.T.生)

雜報

叙任辭令

明治四十三年十一月三十日

- 賜四級俸 教授 浦井鏗一郎
 - 五級俸下賜 同 河合義文
 - 九級俸下賜 同 田中鉄吉
 - 七級俸下賜 同 枝光寅太郎
 - 九級俸下賜 同 雪山俊夫
 - 九級俸下賜 同 塩釜正吉
- 十二月十日
- 依願囑託ヲ解ク 體操副科 宮川義令
 - 八級俸下賜 教授 塩釜正吉
 - 叙正五位 從五位勳五等 浦井鏗二郎
 - 叙從六位 正七位勳六等 田中鉄吉



叙正七位

從七位

雪山俊夫

講師ヲ囑託ス

陸軍歩兵中尉

山崎増太郎

同

同

岩城準太郎

二月八日

同

同

西川巖

依願免本官

教授 枝光寅太郎

同

同

重光 蔭

二月二十七日

同

同

星野信之

依願解雇

雇 楠 正路

十二月十四日

體操副科劔道師範ヲ囑託ス

北村義直

塩釜 淺野兩先生を憶ふ

十二月二十七日

講師ヲ囑託ス

石川鐵雄

四十二年十二月十一日灰雲天空に籠りて雨脚しめやかなる曉なりけり。恩師塩釜先生、雲上遠く召すありて惜別堪へ難き七百の弟子を後にし

同

安齋宏索

て白玉の樓さして急ぎ玉ひぬ。悲愁しめやかなる

叙從七位

横山良盛

山城の秋、蕭殺吹いて過ぐるはそもたが哀音ぞ。

同

山本鬼一

四十四年一月十五日、講師淺野藤四郎先生更に逝かる。尾山の翠色先生を迎へて僅に三ヶ月

明治四十四年一月十九日

任第四高等學校教授

篠原一慶

英靈今何處ぞや。薙上の露、旭日を待たずして

叙高等官七等

十級俸下賜

消ゆ。こゝに恩師を憶ふの情に耐へず、謹んで

一月二十三日

哀悼の意を表す。(宗玄生)

甲 辭

嗚呼故教授據金正吉君果シテ逝ケルカ。昨ハ運歩健力ニ校室ニ出入シ、今ハ倏忽トシテ他界ノ旅ニ立ツ。脆キハ朝露ニ譬フト雖モ、生死ノ變斯ノ如ク迅速ナルヲ見ル者、誰カ現ト思フベシヤ。君資性敦厚、加フルニ勤勉ノ稟實ヲ以テシ、諸生ヲ教ヘテ倦ムコトヲ知ラズ。校務ニ服シテ勞ヲ厭ハズ、而モ年齡尚少、前途頗ル望ヲ屬ス。一旦ノ病不慮ノ重懸ニ陥リ、幾春秋ヲ籠メタル若木ノ綠、忽チ木枯シニ摧ク。惜ムベキカナ。君嘗テ泰西ノ詩聖ヲ研究シテ一書ヲ公ニシ、序シテ曰ク、吾人ノ目的トスル所ハ當ニ其作品ヲ研究スルニ非ラズ、作品ヲ通シテ其偉大ナル人格ヲ想望スルニ在リト。以テ君ガ平生ノ志ヲ見ルニ足レリ。而モ今ヤ英魂永ヘニ歸ラズ、遺著空シク面影ヲ存ス。悼ムベキカナ

明治四十三年十二月十三日第四高等學校長 吉村寅太郎
(代理浦井教授)

明治四十三年十二月十三日第四高等學校職員一同謹ミテ故教授據金正吉君ノ靈ニ告グ嗚呼哀哉天何ゾ我ニ禍シ屢々災殃ヲ降スノ甚ダシキヤ余固ヨリ彼ノ著々タルノ信ナク莫々タルノ神ナキヲ知レトモ向ニ二三子ヲ奪ヒ今又君ニ仇スルニ至リテハ終ニ其無情ヲ訴ヘザルヲ得サルナリ君資性穎悟才識高明夙ニ大學ニ入り獨逸文學ヲ修メ業成リテ本校ニ筮仕シテヨリ在職僅ニ二年

ナリト雖モ其間子弟ヲ教フルコト諄々懇切ヲ極メ同僚ニ交ハルコト謙虛和平嘗テ疾言厲色セス餘暇心ヲ攻學ニ潛メ向ニ「ゲーテノ詩研究」ヲ著ハシ又間々論文ヲ公ニシ將ニ以テ大ニ成スラントセシニ天之ニ壽ヲ假サス不幸中道ニシテ逝キ宿志之ヲ遂グルコトナク享年僅ニ二十有七眞ニ蕙折蘭摧ノ歎ニ堪ヘサルナリ然レトモ天壽本ト命アリ死生亦容易ナラス君已ニ死生ノ際ニ從容タリ余又何リ涕泣兒女ノ聲ニ微ハンヤ唯將ニ君ノ志ヲ繼キ自ラ激勵シテ邦家ノ爲ニ青英ノ務ニ服セントスルノミ跪キテ蘇辭ヲ陳シ聊カ微衷ヲ布フ嗚呼哀哉

第四高等學校職員總代 今井省三

謹ミテ第四高等學校講師淺野君ノ靈ニ告ク君本校ニ在ルヤ僅カニ數閱月ニ過キスト雖モ勤務忠實ノ跡尙ニ稱スヘキモノアリ況ヤ體質強壯學術精練年齒稍ク三十ヲ超ユ將來本校ノ期待セル所甚タ大ナリシナリ今不幸ニシテ膏盲ノ病ヲ得溘焉其命ヲ殞サル惜イカナ恭シク香花ヲ供シ哀悼ノ意ヲ致ス尙クハ饗ケヨ

患膏盲ニ入り一臥遂ニ起タス素志長ヘニ酬イルナシ嗚和盡キヌ恨ハ獨リ君カ胸ヲ燒カンノミナラス併セテ吾等同僚ノ心腸ヲ焦ス君ノ來リ交ハルコト何ゾ遅カリシヤ而シテ其辭シ去ルコト何ゾ速ナルヤ極前ニ俯シテ哀ミニ堪ヘス

明治四十四年一月十五日

第四高等學校職員總代 浦井鏗一郎

故據金正教授追悼會 (二月四日)
謹シテ故教授據金正吉君ノ靈ニ告ス君逝イテ以來日ヲ經ルコト既ニ五旬而シテ音容髮髯トシテ尙吾等ノ傍ヲ去ラズ思フニ長キ未來ヲ東ノ間ニ縮メ男子ノ本懷空シク黄土ニ委スルニ至リシ君カ恨ハ幾春秋ヲ經トモ盡クル代アルベカラス然レトモ流風遺韻儼トシテ校友八百ノ上ニ存シ冥々ノ裡永ク後生ヲ薰化ス幽顯趣ヲ異ニスト雖モ君ノ事業ヤ亡ビタリト言フベカラス嗚呼音容耳目ニ鬚鬢タルハ當ニ今日ノミナランヤ胸裡ノ銘刻何ノ時カ消磨セン英靈莫クハ安ンセヨ

第四高等學校職員總代 浦井鏗一郎

時習寮より

大茶話會記事

彌生初めの日曜日カーテンに仄うつる梅の小枝

のさゆらぎを眺めながら、晝廻り一時頃破れ筆をさる、外には風もないらしい寮の内はまた一際静けさでまゝ、石炭煤の小さいのが何處からか舞ひ來ては紙の上に散る、「門」の宗助が今度は化學の化の字に疑を起しそうな日和である。余り暖かいので頭が茫つとして筆が走らない、で暫し自稱恍惚境に入った。

突然時ならぬのに寮の鐘があわたしく鳴る、同時に南寮とおぼしき方から火事よと怒鳴る聲がする、恰も豫期して居たかの様に僕はふいつと立つて窓を押すと醫專分教場の屋根上を斜めに一條の黒煙がたつてるのが見える、愈々事實なのかと思ふて廊下を駆け出すと果たして潮の様に寮生は本寮の方へ飛ぶ、寮の入口に突立つと直ぐ前の校舎の窓や屋根からうす黒い煙がたつて赤い舌が此處彼處とちらついて居る、確かに火事に違はないと今更思込んで寮の唧筒をひ

き出すと氣早い者は屋根へ登つて足で踏み消さうとする、窓が入口に代つて校舎烟塵昏濛たる中へ五人十人、やがて水は運ばれる、散歩に出かけようと云ふ頃なので所謂彌次は黒山の様に集つてくる、のろい金澤の警鐘は追々と鳴り始め、消防の練習をして居ない寮生はどうかかうか頭で唧筒を組立てたと見れば濁水は管を傳つてげに猛に迸り出る、炎はいよゝ負けじと燃え立つ、相容れないものは水火とやら、何れまけ勝ちが定まるに違はない、火は追々消えて行く、壁の間をはい上る至極隠見な炎だったので始末がつかない彼方此方へ眞赤な舌を出しては周章者よと嘲るが様癩に觸はらずには居られない、町の消防夫も駆けつけてくるが纏のみ来て肝心の唧筒が見えない然し纏が屋根の頂に立つと火事も火事らしくなる、もう其頃は火の手は漸く沈黙に陥つてしまつた、凡そ二十分寮生の盡力も空

しからず幸に鎮火を見るに至つたのは何より嬉しかつた、春らしい銀色の日は火事跡に一入輝いて眞黒い水に浮んだ嫩草が妙に光つた、火事は騒々しいものゝ極だが淋しいものゝ極は火事跡である、カトーは雷鳴が好きであつたと云ふ僕は火事が氣に入るのではないが逆上性の自分はずつかり疲れて室へ歸つて横になつたが足首が頻りに痛む變だなど黙考するとさつき屋根の上である消防夫が僕の足を瓦と間違へたらしい斧の背でいやと云ふ程うつたのが痛むらしい今にして考へると水にても運んで居つた方がよかつたと思ふ（以上は寮便り以外の事なれど、事實として一寸書いて置く）

筆は一轉する、そうしてこれより風ぬるい夕暮窓に倚つて目をつぶりながら追想してはよく胸を躍らするあの楽しい夕べを書かう、其一夜とは即ち通學生諸君との合同大茶話會である。

二月は十日の午後五時半、會は晚餐會を以て始まる、國旗彩美しう飾られた食堂は今や諸先生を初めとして四百余名の四高健兒を収めて相摩すると云ふ有様殊に今夕は來る四月北辰校の意氣を引提げて東上せんとする野球部選手を招いたので、元氣又汪溢、松嶋寮委員の挨拶がすむと各自會食にとりかゝり快談、Semi-Sankainoehi-mmiに腹を充たした。

六時愈々電燈まばゆき無聲堂に於て大茶話會を開く、柴野寮委員の開會の辭に次いで浦井教頭登壇せらる、校長は不得止用事の爲め出席せられ難きを述べられ次に二三の寓話を例して不平と修養とに就て我等をいましめられ、主義の名稱は何にても其實在が堂々たるものにして心と心と相合一すれば其處に至誠そのものが生ずべしと説かれ大に我等を勵まざる。

次に通學生宗玄君登壇、開口先つ何か理窟を云

ふ時は既に理性がある僕は今晚此理性を思はずも失つたのであるこれ即ち吾人の心が相融一せるを證明するに足ると説き滔々吾人の責務が那邊に存するかを警告し通學生と寮生とは共に同一のトレインに乗じて到る處突進せん哉と結び今宵の多幸を祝せらる。

通學生成川君次で登壇、君が胸底より湧くが如き口調を以て寮が野球部に對しての盡力を謝し次で現在の野球部と校風との消息を論じ、我が白箭今や遠く向陵に飛べり北國の風雪いかに荒ぶとも狂ふとも我等が燃ゆる意氣と鳴りに鳴る腕とを以て突破し諸君の心を思ふて大に努力せんと閉ぢ降壇。

「あゝされど今にして願ればそれは夢なりき、君かあの夕への感慨我等があの宵の心とを併せ思ひては都邊りの人々が余りに意氣なきを憐ますんばあらずし」

寮生新木君登壇、寮が斯く去年に百余人を増せる通學生諸君を此一室に迎ふるを得たるを喜ぶ

と感謝し今や四高は一大發展の機運にあり吾人はよろしく東上軍の應援を盡さざるべからずと説き降壇。

次に通學生文室君壇に現はれ、余は一つの不平ありと呼ばはり少なくとも一度寮生活をせしものは皆招いてほしいそうして今少しく大規模にせられたしと望み降壇。

（惜しむらくは今の處寮狹隘にして多人數を入る事能はず遺憾實にこれより大なるはなし、然し尙方法もあらん來らん年よりは出來得る限りの手段を盡し君の言に添はん事を期す。）

拍手轟々たる裡に八波教授登壇せらる、私は夕食後散歩をするか又は謠曲をうなるか兎に角二つの内一つが日課になつて居るが今晚は食後少しも動かないので甚だ睡氣を催して來た、でここへ怒鳴りに出たのである、と先づ警句をばかれ義士傳をとかれ豪傑と金錢との關係より當今學生相互の金錢上の消息が曖昧なり宜しく八、

波式に金錢貸借上の事は確定的にすべしと先生が懷舊談を附加せられ大に我等をいましめらる。

七時半茶菓出でこれより余興に移る。

- 一、浪花節
- 一、狂言
- 一、僞銅像(中寮階上)
- 一、國民軍(南寮階下)
- 一、詩吟
- 一、達磨にお足があるものか(南寮階上)
- 一、明笛
- 一、魔術(北寮階下)
- 一、てじな(中寮階下)

とりどり新らしい趣きをこらして我々の臍の宿替を余儀なくせしめる、十一時半松島寮委員の閉會の辭があり浦井教頭の音頭にて大茶話會の萬歳を三呼して散會した。

外は冬の月が冴え渡つて遙かかすかに潮の遠鳴が耳朶に響いてくる

Pax vobiscum !

あゝ此聲を發したのも必ずや僕のみではなかつたろう。(しばの生)

雪中行軍記事

(二月十六日本校全部)

よべ迄降りつゝいた春雨の様な雨は、さすがに今朝は寒くも雪と代はつて北國の明仄は六花昏蒙の裡に明けてゆく。

午前八時半七百の健兒は身仕度甲斐々々しく校庭に參列する、さつきよりの雪は折しも天颯に繚亂していよゝ狂ふ。

九時二十分小林指揮官は馬上高らかに本日行軍の命令を傳へられ、而して後軍は整々、朗々たる叭聲につれてなつかしき校門を後にする、見か

へれば蜿蜒々長蛇の如き縦列は紅一点聖き校旗を其中央に擁して雄々しく朝の町を縫ふてくる、加ふるに今日は特に歩兵第七聯隊の石原少佐が指教の爲めに參加せられ栗毛の駒に鞭をあてられつゝ同じ道をすゝまるゝ其英姿、我等の光榮はいよゝ高く任は益々重す。

南町——安江町——英町——長田町を出ると松並木の金石街道は夢の如くに打ちのべられて、其左右茫漠たる冬野が展開され遙か斜め左方濱の砂山つゞきがなだらかに、際立つて銀界に浮んで居る。

折から白嶺嵐が雪を加へに加へて宛然惡鬼羅刹のおらび狂ふが様、健兒は足並高く襟かき立てて只進みにすゝむ。

十時五十分想定が下る。

想定(北軍二三部大隊)
海岸道ヲ前進スル敵ニ對シ山崎大隊ニ中隊缺ニ大野町
西南端ヲ占領シ大野川ニ架スル橋梁ノ掩護ニ任ス。

目下金石町ニハ敵ノ一部進入シ我監視哨ハ續々退却中ナリ。

注意

帽ニ日覆ヲ附スベシ

想 定 (南軍一部大隊)

南軍ハ北陸道ヲ南下スル敵ニ對シ金澤城ニ固據シ増援軍ノ來ルヲ待ツ。

敵ノ一部本朝來栗崎海濱ニ上陸ヲ企圖スルノ報ニ接シ大野大隊(一中隊缺)ヲ大野町ニ差遣シ其上陸ヲ防害セシム

目下敵ノ一部ハ大野町ヲ占領セリ

注意

敵ハ帽ニ日覆ヲ附ス

兩軍は別れて北軍は大野へ南軍は金石へ、雪は變らず空はますます暗い、十一時半一しきり降荒んだ雪ははたと止むで晴れぐしい雲の流れが海へ落ちて行く、同時に岸を囓む濤の轟きが一入耳を打つて来る。

南北軍各機を制すべく即時に運動を開始する戦報子は小高い砂山の上、石原少佐の傍らに居を構へて戦風の移るのを眺める。

南軍は諸方に斥候を放つて先づ北軍の位地を知り徐ろに散開の列四條五條堂々と進めば北軍は地の利に應じてよくこそ來れど高所よりこれに散弾を浴びせかけ、銃聲は忽ちにして殷々又轟轟起伏縦横につらなる小松砂原をゆるがせて、蒼穹にちつてゆく。彩美しい礮貝殻、九つ十に踏み碎いて戦士の足跡は深く深く近く遠く砂山に刻まれる、惨の極はげに又美の極である。

兩軍一進一退心を盡し身を動かして激闘奮戦、いくさはだん／＼痛快になつて来る——地勢止むを得ざる處もあつたろうが部分的の衝突のみが諸方に起つて一般に連絡がとれて居ない様に見える——戦塵大空を巻いて難戦半余、遂に着劍の命は南軍に起り共に北軍に起り愈々血の流れを見るのが焦眉の間に迫つて來たが戦不利と知つた北軍は一舉全線の退却を敢てする、時や

よしと大野大隊長は長劍を振りかざして突撃の命を下し肉迫又肉迫將に白兵戦を演せんとするの刹那、朝々起る平和休戦の曲、兩軍の健兒先づはほ笑んで莞爾互に手を握る。

此處より大野町にくだり又銃晝飯、おのもく民家に入り濱邊に到り空腹をみたす。

凄き迄黝然と暗める海は狂ひに狂ひ、例へば丈夫の怒れるが様に雪山の頰るが様に虚観假相を縦横無碍に文つて、威あるもの神秘あるもの地上に存せず地下に存せず、たゞ此八百潮の滄溟鞆鞆たる裡に藏れて居るかの様。

目前の大洋は

悠々波をたゞへて

墓に臨める

義人の希望に似たり

講評 (小林指揮官)

一時半集合、隊伍堂々愈々歸途につく、雪はまた梨花と降りしきり、風は遠慮もなく面を吹く、上体は北風に吹きまくられて正に雪中行軍の感はあるが脚部は泥中行軍の観がある清濁併呑むと達知して軍は勇ましく金澤に向ふ。二時三十五分歩武整々校門を入りこゝに指揮官及石原少佐の講評を承り七百の健兒は今日の祝福を悦びながら三々伍々散解する。仰げば黄昏る、雪空は雲脚しげく今宵は山鷗海風雪を交へて淋しくも我等が窓をうつらし。

北軍の任務は大野町西南端高地占領にあり然し其所屬中隊長の單獨行動は不可なり北軍は最初陣地を取りて前進したるがこは一般の通則と推則すべからず時と場合に依るもの也而して斯かる際には種々の防禦工事を施して後前進すべし、南軍の散開は機敏にして斥候の動作もよかりきりながら一方

より見れば敵を目前に控へて猛進せしは少しく輕舉にてはあらざりしか、次に大野大隊の右中隊は勇敢なりしが連絡を失ひしは實に残念なりき、

講評 (石原少佐)

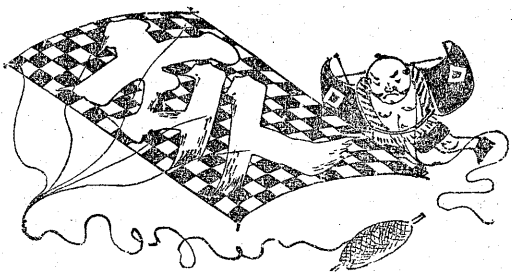
本日諸君は行軍及戰鬪の動作に貴き一日を費されたり、余の見處を以てすれば目下の軍隊によく似て出來たりと思ふ、然し未だしと思ふ点あれば左に述べん

第一一般に集合遅し、本朝の集合も遅るゝ事十分也諸君の如き勉強せらるゝ身にさりては殊に此觀念大切なるべし、第二に行軍に就て異論はなれど戰鬪に就て云へば戰は犠牲を拂ふものなりとの一念を心に把持せざるべからず此心なくして行ひし演習は要するに何等得る處なし、斥候の如き然り一般散兵線に於ても生死の感なからざるべからず、尙大戰の起る前には必ずや暴風暴雨ありこれに打勝ち而して敵を突破するてふ大感念を以てせしならば本日の演習もより見事なる結果を擧げ得しならん (しばの生)

寄贈雜誌

校友會雜誌 二六號	京華中學校友會	校友會雜誌 二五號	東京高等學校友會
輔仁會雜誌 八二號	學習院輔仁會	校友會雜誌 一三號	第五高等學校友會
校友會雜誌 一五號	大成中學校友會	校友會雜誌 一七號	第八高等學校友會
		校友會雜誌 一〇號	彦根中學校友會
		校友會雜誌 二二號	柏崎中學校友會
		校友會雜誌 二七號	金澤醫學專科同會
		校友會雜誌 一〇號	長岡中學和同會
		校友會雜誌 二二號	大垣中學校友會
		校友會雜誌 二七號	第七高等學校友會
		校友會雜誌 一〇號	佛敎大學壬寅會
		校友會雜誌 二二號	京都大學以文會
		校友會雜誌 二七號	京都大學附中桐陰會
		校友會雜誌 一〇號	東京高師附科水曜會
		校友會雜誌 二二號	京都大學理工科水曜會
		校友會雜誌 二七號	千葉中學校友會
		校友會雜誌 一〇號	盛岡高農學校友會
		校友會雜誌 二二號	札幌中學校友會
		校友會雜誌 二七號	愛知醫專學校友會
		校友會雜誌 一〇號	石川師範學校友會
		校友會雜誌 二二號	金澤商業學校友會
		校友會雜誌 二七號	高知一中同窓會
		校友會雜誌 一〇號	石川工業學校友會
		校友會雜誌 二二號	斐太中學校友會

校友會雜誌 三四號	麻布中學校友會
同窓會雜誌 九號	錦城中學同窓會
馬城二九號	獨逸學協會學校
六校友會雜誌 每號	北野中學校友會
校友會雜誌 二號	德山中學校友會
學友會雜誌 一三號	有垣學舍學校友會
校友會雜誌 一六號	飯田中學校友會
會友會雜誌 二六號	柏原中學校友會
校友會雜誌 二六號	第六高等學校同會
學友會雜誌 九號	魚津中學校友會
經城二號	廣島中學校友會



第二回 講演部擬國會記事

第四高等學校講演部

擬國會記事

明治四十四年二月十八日午後二時
至誠堂に於て開會

議事日程第五號

- 第一、工場法案(政府提出)第一讀會入續
- 第二、醫藥分業ニ關スル建議案(保守黨赤谷幸藏君外四名提出)第一讀會
- 第三、右議案ノ審査ヲ附托スベキ委員ノ選舉
- 第四、陪審制度建議案(急進黨中納錠松君外十五名提出)第一讀會ノ續
- 第五、七尾港改築建議案(中立黨津山玄道君外十名提出)第一讀會
- 第六、右議案ノ審査ヲ附托スベキ委員ノ選舉
- 第七、北陸大學設立建議案(保守黨荻野廣君外二十名提出)第一讀會

第八、右議案ノ審査ヲ附托スベキ委員ノ選舉

第九、未成年者飲酒取締ニ關スル法律案(中立黨鈞鶴藏君外二十名提出)第一讀會ノ續

第十、鑛山國有ニ關スル法律案(急進黨河合作次郎君外二十名提出)第一讀會

第十一、右議案ノ審査ヲ附托スベキ委員ノ選舉

第十二、海軍擴張案(政府提出)第三讀會

工場法案

一、工業主ハ十三才未滿ノモノヲ工場ニ於テ使用スルコトヲ得ズ

一、工業主ハ十五才未滿ノモノヲ午後十時ヨリ午前五時ニ至ルノ間工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ズ

一、工業主ハ十六才未滿ノモノ及ビ女子ヲシテ一日十時間以上ノ就業ヲナサシムルコトヲ得ズ

一、工業主ハ一般職工ニ一ヶ月少クモ二日ノ休暇ヲ與ヘ又一日ノ就業時間ガ十時間ヲ超ユル時ハ就業時間内ニ少クモ一時間ノ休暇ヲナサシムベシ他之ニ準ズ

テスベク物品ヲ以テ代用スルコトヲ得ズ
一、工場主ハ自己ノ費用ヲ以テ工場ノ設計、機械器具ノ排列整理ニ關シ職工ノ生命健康ヲ保護スル爲メ必要ナル設備ヲナスベシ

一、運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ノ危險ナル部分ニ關スル業務ニ十六才未滿ノモノ及ビ女子ヲ使用スルコトヲ得ズ

一、醫師ト藥劑師ト其ノ業務ヲ區別スルコト
一、醫師ト藥劑師ト其ノ業務ヲ區別スルコト

一、毒藥劇樂其他有害品及ビ爆發物ヲ取扱フ業務ニ十六才未滿ノモノヲ使用スルコトヲ得ズ

陪審制度建議案
一、人民ヨリ陪審判事ヲ選出シ直接司法事務ニ參與セシムルハ民權ヲ尊重スル所以ニシテ裁判ノ公平司法權ノ獨立ヲ確實ニス

一、行政官廳ハ病者又ハ產婦ノ使用ヲ禁止制限スルコトヲ得

七尾港改築建議案
七尾港ヲ改築シテ日本海上商業ノ中心点タラシム

一、工業主ハ其ノ使用スル職工故意ニアラズシテ業務上負傷シ疾病ニ罹リ又ハ死亡シタル時ハ命令ノ定ムル所ニヨリ本人又ハ其遺族ヲ扶助スベシ

一、工業主ハ職工ノ賃金ヲ支拂フニ通貨ヲ以

理由

日露戰爭ノ終結ト共ニ日本ノ地歩ハ急轉シ極東ニ於ケル商工業ノ中心トナラントシ且ツ中心タラザルベカラザルノ形勢トナレリ矣、而シテ西比利亞鐵道建設以來日本海極メテ多事、此ノ時

ヤ此問題ハ倫理道德ノ問題ヲ放レテ國家生存上ノ問題ト成レリ、即チ本員等此案ヲ提出スル所以也

ニ際シ日本海面ニ數多ノ良港ヲ有ス可キ事ハ甚ダ急且切ナルモノ也然シテ擧ゲテ數フベキハ只敦賀一港アル而已矣、七尾港ノ位置タルヤ最モ叙上ノ要求ニ應ズ可ク灣内廣クシテ良ク大小ノ船舶ヲ入レ完全ニ暴風ノ難ヲ避ケ日本海商業ノ中心タリ得ベキモノ只港内水淺ク處々ニ岩礁有リ爲メニ世人ノ切實ナル要求ニ應ズル能ハザリシハ吾人ノ最モ痛嘆措ク能ハザリシ處也此處ニ富直線開通ヲ見ルニ及ンテ更ニ其度ヲ深メ本員等此處ニ此案ヲ建議スルモノ也

鑛山國有ニ關スル法律案
國庫窮乏ノ際全國鑛山ヲ國有トナシ必要ナル事業ノ財源ヲ補給スベシ
鑛山買取ノ方法ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

北陸大學建議案

文明ノ進歩ト大學所在地ノ權衡上トヨリ北陸地方ニ大學ヲ設立セン事ヲ建議ス

海軍擴張案
一、方今字内ノ形勢ニ鑑ミ我帝國ノ自衛上左ノ計畫ニ基キテ海軍擴張ヲ行フ

海軍擴張費總額

八億七千八百萬圓

內譯 四十四年度ヨリ向フ十年間繼續事業

一、ドレツドノ一ト型 二七隻 六七五、〇〇〇噸

一、裝甲巡洋艦甲級 六 一〇〇、〇〇〇

一、同 乙級 二二 六〇、〇〇〇

一、大驅逐艦 二四 二〇、〇八〇

一、潜水艇 一二 六、〇〇〇

計 八一 八六九、八〇〇

右製艦費 八億七千萬圓

海軍新根據地建設

十年繼續計畫 八百萬圓

未成年者飲酒禁止法案

一、親權ヲ行フモノニシテ未成年者ニ飲酒セシメ又ハ許容シタルモノハ五圓以下ノ科料ニ處ス
一、未成年者ニ對シ酒類ヲ販賣シタルモノハ二十圓以下ノ科料ニ處ス

理由

未成年者ノ自暴墮落ニ陥リ目的ヲ過ルハ飲酒其主因ヲ爲ス、今

總計 八億七千八百萬圓

內閣ノ組織

總理大臣 土井 滋治 外務大臣 細野 躋
 兼內務大臣 大藏大臣 松野 俊良 陸軍大臣 進藤 隆一
 海軍大臣 成川 武男 司法大臣 文室 重敏
 文部大臣 田中 正名 逓信大臣 鈴木 文吉
 農商務大臣 清水 武雄

政府委員

內閣書記官長 兒玉 九十
 野寺 佐次郎 松原直次郎

議會ノ組織

議長 畑山 四男美 副議長 巢山 了徹
 書記官長 柴野 操一 書記官 加藤仙之助
 書記官 山本 勇 同 中 性 慶

保守黨議員

三十五名 (イロハ順)
 院內總理 宗 玄 順吉
 副總理 野崎 朋近
 井上 功 今村 三郎 早上 愛次
 本間才一郎 戸水 昇 長曾我部 東城
 小坂義雄 荻野 廣 大島 外喜
 加藤貞國 吉田常次郎 吉川 安隆

中立黨議員

二十五名 (イロハ順)
 院內總理 武 部 進
 副總理 鈴木 巖
 石端 良平 今村 眞彦 濱田 幹
 榛村 專一 羽田 哲 東 郷 豊
 百橋 遊芳 鳥居 武雄 岡 弘 二
 田中 康三 釣 鶴藏 津山 玄道
 永田 四郎 中谷 繁三 永田 憲雄
 熊谷 直治 山添恒治郎 八木 力三
 牧野 利家 淺水成吉郎 菊池 龍道
 清水 良策 居石 茂

豫算委員

全院委員長 釣 鶴藏
 井上 功 小坂 義雄 吉田 常次郎
 上田 孝 幸谷 幸藏 林 德一
 中納 錠松 現影 現成 宮野 專太郎
 石端 良平 鳥居 武雄 津山 玄道
 山添恒治郎 田中 良雄 木下 幹
 (以上十五名)

決算委員

本間才一郎 荻野 廣 野村 伊兵衛
 酒井 忠次郎 日戸 英雄 乾 利一

吉岡 關太 高橋 岩五郎 田村 彦三郎
 谷山 惠林 辻 外彦 内藤 五六
 永田 眞作 室木 隆三郎 上田 孝吉
 野村 伊兵衛 國友 榮五郎 福田 外茂吉
 藤井 清誠 小林 哲一郎 東 清太郎
 赤谷 幸藏 酒井 忠次郎 佐藤 三千三郎
 巢山 了徹 鷺見 昌輔

急進黨議員

四十名 (イロハ順)
 院內總理 松島 亮二
 副總理 新木 榮吉
 乾 利一 今井 剛 磯貝 喜一郎
 林 德一 原 正一 如意 泰一
 大坪 不二馬 小河原 忠次郎 奥山 啓一郎
 和田 勢一郎 河合 作次郎 金子 要人
 金本 萬吉 田村 皎二 恒 松 幹
 塚本 市治 中納 錠松 中田 秀夫
 中村 敏 中村 昇 鳴澤 寡愆
 能村 幸次郎 山田 憲 山本 龍作
 松岡 昌臧 現影 現成 古川 六郎
 藤田 悟 寺島 三郎 寺田 正平
 新井 虎輔 提山 西暢 佐倉 鐵太郎
 湯川 榮三郎 宮野 專太郎 白井 演
 須藤 二郎 杉山 文祐

如意 泰一 中田 秀夫 山田 憲
 提山 西暢 白井 演 長野 歳重
 濱田 幹 岡 弘 二 永田 四郎
 (以上十五名)
 請願委員
 小林 哲一郎 佐藤 三千三郎 鷺見 昌輔
 相 蘇 保 和田 勢一郎 中村 敏
 今村 眞彦 百橋 遊芳 永田 憲雄
 (以上九名)

懲罰委員

高橋 岩五郎 永田 眞作 早上 愛次
 今井 剛 小河原 忠次郎 金本 萬吉
 杉山 文祐 八木 力三 居石 茂
 (以上九名)

政府ヨリノ通知

一、内務大臣倉知行禮氏病氣辭任ニ就キ總理大臣之ヲ兼務スベク拜命セリ
 一、海軍大臣成川武男氏野球仕合談判ノ用務ヲ帶ビ全權大使トシテ向陵國ヘ赴ケリ

午後一時半開會、議長畑山四美男君起つて開會を宣し

言論は一國の意氣にして言論無きの國民は死の國民なり、我國が日清日露の大戦に勝利を博し隆々發展の機運に入りしは勿論皇威によるも雖又我國が早く議會を開設し一國の生命たる言論を尊重せしに基く處大なるものあるべし、我北辰國に於て第二回の議會を開き一堂の裡に天下を議するを得るに至りしは吾人の最も悦ぶ處にして世稍もすれば此種の會合に壓迫を加へんとするが如きは一つの害を誦つて百の利を理得せざるものにして痛嘆の至り也。學術の研究辯論の練磨國家的觀念の養成等は擬國會に俟たずして何に依つて求めんとするか。

次で柴野書記官長議事日程を朗讀し愈々議事日程第一工場法案に入る。

先づ該案に就き清水農商務大臣悠々壇上に現はれ穩健老熟の口調を以て其理由を説明す。

政府が始め工場法なる者を調査せるは實に明治廿九年の昔にあり爾後數回の調査を重ねしも當時尙早の論者多數を占め實行の運に至らざりしが年を経る爰に十有余年我國の工場は駸々乎として發達し今や工場法案の制定は焦眉の急となれり、近世に於ける工業の發達は勞動時間を著しく延長し機械の

驚くべき進歩は男子職工ならでは能はざりし事業も女子小兒をして易々之を爲すを得るに至らじめたり、而して工場主が比較的實錢低廉なる女子及幼年を多數使役するに至れるは自然の數也、彼等女子及幼者は不衛生的なる工場に長時間の勞動を強いられ其健康を害しつゝあるは目下の實狀也、將來國民の母たらんとするもの及完全なる國民たらんとする女子幼者が其心身の發達を阻害せらるゝは國家將來の爲め戰慄すべき大事ならずや、此禍根をのぞかんには是非法律の力によらざるべからず、工場主の良心及職工自身の自衛心に一任すべきものにあらず又一任し能はず、工場主は要するに自己利益を目的とする現象を有し出來べき限り職工を使役するものゝ如く然らざる有徳の工業主は極めて稀也、而して職工自身の自衛心及彼等父母良人の慈愛心にも深く信頼と難し、彼等は其妻子を愛する決して他階級に劣らざる雖、輓近の劇甚なる生活難の爲め苦痛を忍びて其妻子を工場に通勤せしめ、斯く原因は結果を生み結果は原因を作し遂に傳集性を逞ふするに至る。

一八〇二年に英國に制定せられたる工場法案を例證し其結果に於て産業の衰退貧者の増加等を取らす事決してなきを論じ本案は我國工業界の健全なる發達を計るものにして各條の規定は必

ずや此目的に有効なりと結び降壇。

急進黨中田秀夫氏登壇、例の頓狂聲を振り絞り本員は絶対に本案には不賛成也、彼等が如何に西洋の事物に心酔し居るかを見よと冷罵し我國は二千余年來の純美なる主従關係的風俗を有す、今にして斯くの如き法案を發布せんか其美風を破壊し加ふるに人權を無視する又甚だしきものあらんと論し。

十三歳未滿のものを使用する事を得ずとあれ共事實に於て不可能也、一定の職業は幼少よりの熟練に依つて初めて其實を擧げ得べく中年より職工たらんとするも到底望み難し、又大臣は不衛生より來る死亡に就て孰かれしか全國に於て最も死亡率の多きは石屋なり、何故に先づ石屋法案を出さざるか、畢竟するに軍事に於て優良の位置を得しは多數の犠牲を拂ひしに依る、よろしく工業上に於ても致て多數の犠牲者を出し其發達進歩を期すべし。

其所説又痛快時に保守黨議員荻野廣氏發言權を求め得て登壇縱横の辯を振ふて反對者の所論を駁し一轉自説に入り、

工場法に依り勞動者時間を制定すべきや否やは決して獨り職工の欲するや否やに依て決すべきにあらず、國民健康の保持上及優良職工の發達上の利害により決すべき問題也、と前置し夜間勞動に就き農商務工務局長の報告を參考し其害あるを詳説し、幼年者の使役は教育義務年限の實行を妨げ到底常識健全なる國民を養成し難く、これ只に一家族の損害なるのみならず國家の憂にあらずやと述べ、勞動時間の長きは必ずしも作業の分量を増加するものにあらず、過度の労働は却つて作業の効果を減殺す、千八百四十七年英國に現れたる十時間労働案の如き又其當を得たりと謂ふを得べし、而して工場法案そのものに依つて主従關係の美風破壊を憂ふるが如きは思はざるも又甚だしきものなりと喝破して降壇す。

次に急進黨林徳一氏登壇斯くの如き法案を出したるは其心事を了解するに苦むと口を開き、

これや實に日本工業主に侮辱の一鞭をあてたるもの也、苟し

くも人權を思ふものゝ得々乎として提出し能はざる處にして、此法案にして實施されんには十年後の日本工業界は必ずや破滅の極に達すべし。

と敦固き由來工業は技術的にして習慣に任ずるものなれば法律の如き繁文褥禮的のものを厭はざるを得ず寧ろ臨機應變の處置を望むと確論して降壇今や各黨の辯士盛んに發言權を求め「議長長々々」の聲囂し、時に中央黨副總理鈴木巖氏議長に塵かれて壇上に現はれ髻を拂つて開口、前辯士は未だ法の何ものたるやを解せず、法は決して人民を壓迫するものにあらずして我々共通の便宜を計るものに外ならざる也、本員は林君の爲めに悲まざるを得ず。

と抑揄し本員は中立黨を代表しこゝに大体に於て工場法案に賛成するもの也然れ共部分的には修正を望み度き箇處もあり例へば一條七條八條の如きは尙一層熟慮すべき点あらずやと述べ我國經濟界の趨勢よりクロポトキンの經濟論に論及し要するに折衷的演説を試み保守黨及自黨の拍手に迎へられて降壇。

時に緊急動議ありと叫ぶものあり、見やればこれ急進黨の少壯議員河合作次郎氏也。

只今中立黨の副總理も云ふ方が演説中に腐敗したる議員達はと云ふ詞を用ひられたが、これは議員を侮辱したものと認めます、議長より取消される様申されたし、然らずんば懲罰委員會の方へ……

茲に於て議長は鈴木代議士に失言の取消を望むや、鈴木氏は取消さすと答ふ、依つて懲罰委員會に附するや否やを採決せしに、大差を以て否決となり、河合代議士憤然足を踏みならすのみ。

議場鎮靜に歸するをまち急進黨の佐倉鐵太郎氏登壇、堂々其所論を吐き來つて工場法の目下日本工業界に不必要なる理由を説き、斯くの如きは星をのぞんで溝中に陥るの類にして、國家の大事を空想視するは危しとも危しと結び、政府の弱点を窮迫して餘蘊なし。時に急進黨の陣笠中納錠松氏討論終結の動議を

提出し、議長はこれを議場に問ふや賛成賛成の聲起り更らに該法案可否の採決を行ひ斯くして工場法案は可決せられ農相又莞爾たり。醫藥分業に關する建議案は提出者より撤回の旨申出でたりとの報告あり、次で中納議員の動議により陪審制度建議案は重大問題なればこれを後廻しになし直ちに議事は北陸大學設置建議案に入る。

保守黨井上功氏登壇悠々迫らざる快辯を以て先づ時代教育の根本的解義を試み、後。

我日本は現今の大學を以て満足し得べきや否やの問題也、大學の性質とする處は徹に細を穿つ的の研究にして、それが爲めには教授者と被教授者との親密關係を要す、能ふべくんば少數の學生か悠々として學理の蘊奥を極めん事を望む、然るに現今我日本に於ては八箇の高等學校より出づる學生を只四箇の大學に収容し法科を始め各科充分なる研究を積み得るや否やは疑はし。

と前提を置き大學設置の地位に關し、太平洋文明に比し日本海方面は極めて時代意識の推移粘

着的に過ぎ、一種の沈鬱性を有す、従つて其文明も萎縮的ならずんばならず、こゝに於て日本文明の完全を期せんには此兩方面の調和を計り、日本海方面に一大學を設立し教育の革進に依つて日本時代思潮の渾一を完ふするより他なしと論じ、金澤と日本海文明との消息を加味し降壇。

拍手轟々の裡に田中文相は續いて壇に現はれ該建議の精神とする處は賛成なれ共目下少なくとも四大學の設置を見たる以上事焦眉の急にもあらざるが故に、近き將來一層國庫豊富の期をうかがい、本大臣は極力其増設を計るべしと簡明に陳述して降る。

時に例の中納進行博士本案は十五名の委員附托にせられん事と動議し、議長は直ちに議場にはかり賛成を得て論決す。

時に各黨の領袖鳩首して何等か頻語するものゝ

如し、然り議事は一瀉千里の勢を以て今や本日
の主問題たる陪審制度建議案に移らんとするが
故也。

急進黨が急霞の如き拍手に送られて中納錠松氏
は壇に躍り上り。

天下の問題たる陪審制度建議案が急進黨員に依つて提出され
たるは本員の光榮とする處也。

と劈頭先づ怪氣焔を吐き。

刑法は人を殺すにあらずして人を生かすにあり、罪せんが爲
めに罪するにあらず、然るに新刑法制定以來本員の見を以て
すれば、其實あがらざるが如し、誠に痛嘆に堪へず。

罪かろしと雖其情狀寛すべからざるものあり、實情眞に同情
に償するものの過罪に附せらるるものあり、これ一つに其内
情を確知せざるの結果にして、シヤツヂメントの神聖は將に
何れに求めんとするか、黄昏るゝ夕べ横兵衛のまく種は横暴
なる烏の爲めに喙まれ去らんさす、此際此憐むべき横兵衛を
助け無智なる烏を驅逐するものは、陪審制度の確立にして、
又他に得べからざる也。

彼の露國に於てすら陪審制度の存在確立し、革命の起らざる
は一つにこれに由ると稱せらる、吾人は彼のポーソナード
博士の心情を深く研究し、陪審制度の設立をばかり、人權の

擁護と純正なる判決をなさざるべからず。

裁判官萬能にあらず、裁判官の獨斷は日本武士
道の破壊也と喝破し、諸外國に於ける犯罪人と
裁判官との關係を詳説して降壇。

時に保守黨の小坂義雄氏より陪審員は悠久なり
や又は有限なりやとの質問あり、中納氏悠久と
する能はずは有限にてもよろしと茫逃げをな
す。

續いて保守黨副總理野崎朋近氏、踴躍して壇に
立つ其意氣凜烈堂を壓するの概あり、明晰の辯
を振ふて絶對に本案に反對なる旨を述べ。

陪審制度發生の萌は遠く希臘の古代にあり、而してこれが今
日云ふ陪審制度其物として現はれしは、英國に於てヘンリー
二世の時即ち十二世紀の封建時代也、凡そ政治問題は經濟狀
態と離るべからざる關係を有す而して封建時代の社會の經濟
組織は隷屬制也、故に社會の尤も有力なる分子たる資産家は
經濟的慾望以外に政家的慾望を充たし得べき充分なる余暇を
有したりされば陪審制度の如きも此期に於ては能く私曲を抑
壓し公平を抱持し得たり、然るに今日は最早や封建時代に非

ず現代社會の經濟組織は實に勞銀制也。

現代社會の資産家は自ら進んで生産事業に當ら
ざるを得ず、従つて封建時代に於けるが如く政
治的方面に直接關係するを得ず、故に本制度の
如き昔日の如く良結果を得ざるは明かなりと論
じ。

今日の資産家がよし昔日の如く直接政治に參與せずとも、彼
等が辯護士新聞記者の如き不生産的労働者を代表者として、
立法部に出すが如く、陪審官にも此等の人々を出さば可なら
ずやとの疑起らんも、こは愚論也、議員の如く歳費てふ収入
あるものはよけれど、陪審官は刑事裁判ある毎に召集せられ、
加ふるに刑事裁判は時期全く不定也、故に此間彼等は其職業
を棄てざるべからず、且つや提出者はこれを無給とすと云へ
り、斯くして民権擁護の實何處にかある、第二に封建時代の
遺物とこそ云へ現に各國採用しつつあるに非ずやと反對者は
云はんもこれ又愚論なり、佛國に於て見るに本制度を設けし
は大革命後にあり、革命の代にありては人民は一步たりとも
權利をとらん事を欲し飢者の食を撰ばざるが如し、故に偶然
本制度を採りしのみ他國も然り。

諸君は明治の聖代を佛の革命時代と同一なりと
考ふるやと大喝、卓を叩き百尺竿頭一步をす、

めて曰く。

陪審官は單に罪の有無を決するのみ、刑の量定は全く裁判官
にあり、然らば陪審官あるも無きも等しきにあらずや。

獨逸の如き司法官間に於ては盛んに本制度の不完全を叫ば
れ、此れに代ふるに參審制度を以てせんとするの傾向あり、
これ要するに本制度は時代遅れにして何等論議の價値なし。

諸君叫ばば叫べ罵らば罵れ予は切に本案撤回を
望む、若し此を容れずば今數十分を出でずして
否決の事實として悲しき様を目撃せんと、其所
説壯快怪刀亂麻をたつが如く片々たる駄論當る
べからず。

今や論場は活氣を呈し來り各黨員の氣宇漸く熱
す。

急進黨木下幹氏登壇、冷靜なる態度を以て口を
開き本案の眞の精神を理解するに於ては決して
反對など出來たものにあらず敢て反對せんとす
る者は一つに奇を好むの士にして、國民の精神
を侮辱するもの也と嘲罵を浴びせかけ。

陪審官は罪の有無を決し、裁判官は法律をこれに活用し社會

に訴ふるに過ぎず、充分事實を考量し法の眞義を開發せんに陪審官の必要實に言を俟たざる也、試みに見よ千葉縣下には三錢切手より百圓の罰金を課せられ、又他には瓜一本にて盜賊の刑を課せられ、又犬一疋の爲めに十年の禁獄に處せられたるが如き、如何に今日の法官が其常識を没却し居るかを知るに足る。

と痛論し反對黨爲めに顔色なし。

突如中立黨に拍手起り飛將軍岡弘二氏壇に上る。

前君の説は居眠りにて居らんか尤も至極と聞ゆれど、荷しくも冷靜なる頭腦を以てすれば寧ろ噴飯に堪へず。

と輕快の辯に加ふるに例の冷笑をもらして急進黨に一瞥を與へ、此案の如きは社會の進歩を阻害するもの也、今や世は經濟的分業を必要と爲すに至り裁判官等も此理にもれず、専門の智識なくんば以て法の正解を見る能はず、陪審官の如き臨時的判官は無用の第一番也、而して陪審制度は立法を根本的に否定するものにして、又情實に驅られて公平なる裁判を爲し能はざるは

日月を見るより明か也、諸君は枯槁せる古代の遺物を提げて如何に怒號するとも、これ空中の樓閣のみ醉中の放言のみと痛罵し、更に一步をすゝめて國家經濟上に於ける陪審制度の影響に論及し、悠々降壇、水を打つたる如き議場又轟々。

飄然壇に上るを見れば急進黨の白井演氏也、壯快の辯直ちに敵の本壘に突入し國家觀念を忘却して反對せんとするは寧ろ憫むべしと罵り、近時日本の司法權は如何、裁判官の多くはこれ沒常識漢に過ぎず、吾人にして諸々斯かる輩を法の判者としていたゞかんか、人權は忽ちにして蹂躪せらるべしと論結し、怒髮冠をつくに似たり。

保守黨はこゝに新法學博士上田孝氏を送り一矢を酬いんとす氏は頑々の辯囂々の辭を以て。

暫らく辛抱してくれ給へ、辛抱出来ない諸君は議員の資格は

ゼロと認めます。

と反對派の彌次黨を威嚇し、一轉其所説に入る。

普通人には獨立の意見なく他に雷同するの傾向を有す、英人は自立的なれば此欠点より逃れ得たりとするも佛人は雷同的なれば此弊多し、而して普通人は司法獨立に必要素たる自己及社會に對する獨立無く、自己の感情利益に支配され易く、又被告證人鑑定人の陳述を適當に判斷するの法律的智識を欠き、多年裁判事件に關係するものよりも非常識也、尙陪審制度には數個の欠点を有し、裁判事務を裁判官と陪審官とに分つての害理由を示さずして陪審員を忌避するの害等擧げて數ふべからず。

復讐時代慘刑時代博愛時代を過ぎて今や世は科學時代に入り、陪審官如き一時的判斷者を以ては今代の要求に應ずる能はず、彼の獨逸刑事訴訟法改正委員會が陪審裁判所廢止決議を爲せるを見て其大勢を察知し得べきにあらずやと論じ、流石に其専門的法律學を參考し反對黨を窮迫せり。

文室司法大臣はやをら議長に麾かれて壇上に現

れ悠揚迫らざるの態度を持して。

各黨の諸君既に永々と討議を盡されましたから本大臣は多くを申しません該案に關しては本大臣も先年より研究致しまして又本日急進黨諸君の高論を承り大に得る處がありました。これには如何に八方美人の首相も耳を傾くる處がないと考へます、實に其精神とする處は本大臣も感服の外はありませんが却つて陪審制度は裁判の公平を欠く恐れがありますまいか、本大臣は法の意義を思ふては本案の否決を望まずには居られないのであります。

時に保守黨岡弘二氏採決の動議を提出し議長諾として議員の賛否起立を求む、折しも急進黨驕然として議長の言を聴取する能はず茫然たる中に議長は一聲一人の賛成者なしと認むるが故に本案は否決すと宣言するや急進黨の豪傑連中村敏、小河原忠次郎、林徳一の諸氏席を蹴立て、議長を呼び「議長は買収されしか」「議長をひき下ろせ」「議場の神聖は犯されたり」等各罵り憤慨又憤慨其演說草稿をさきて床上にたゞきつけ議場を去らんとせしが總理松島氏等かけつけ漸

く沈靜に歸せしめしが一時は囂擾言外なりき。此裡に土井總理大臣登壇肺腑を貫くが如き口調を以て施政の方針を述べ。

列國との親交漸く厚きを加へ日に日に國威の發展を迎ふるは上 陛下の御稜威に基く論なしと雖も又我國民の一致共同よく其努力を惜まざるに由る少なからざるべし。

今回の御下賜金に就ては大員等一同恐懼措く能はざる處也、其配分方法等に就ては又閣員熱慮に熱慮を重ね宏遠なる大御心に副はん事を期す。

外交方面に於ては米國に於ける排日熱も我國の意向何れにありやを了解すると共に漸く冷減に近く列國との訂盟條約も順路に存じ何等の不安ある事なし、目下滿州に發生せるペストも極力其根絶に務めつゝあるが故に病根全滅の期近きにあるべし。

施政の方針としては先づ内政の發達を計り國家經濟の助長を扶け國民教育の効果を収め以て健全なる内治の實を擧げんと欲す海軍擴張案を提出したるも然るが故也此案は最初六年計畫なりしが三竹内閣倒ると共に棄却せられたり今回は十年計畫の意向を以て提出したれば國家百年の計を考量せられ賛成あらん事を希望に堪へず。

と壇を下る、拍手恰も急霰の轟々たるが如し。

次で保守黨巢山了徹氏本問題二讀會省略の動議を出し採決をはかり可決す。議事は急轉して未成年者飲酒取締に關する法律案に入り議長はここに提出者全院委員長釣鶴藏氏を麾く、直ちに登壇先づ卓を打つて。

本案は既に黨派を超越し、時代の要求に迫られ抽象的範圍をばなれて具体的問題と成れり。

と絶叫しつらく世界列國を見るに最強の國家は最強なる國民体格を有す、永久の勝利は健全なる國民に俟たざるべからず、而して健全なる國民は其心身の頑強、よく萬象を配下する体の意氣に基くを要す、肉の健全なる發達はやがて靈の純美を招くと云ふ、吾人は先づ其心を抱擁せる体格の健全を計らざるべからず然るが故に第二國民たらんとする者は此消息を確知し、其心身の健全を養ふを一大責務と爲す、借酒の害は今更擧げずと雖、いかに酒の勢力が青年輩を

時中立黨の津山玄道氏緊急動議ありと呼ばはり。

先き程より見れば急進黨側の傍聽席より暴言を吐くものあり、議員なりや否やは知らざれども此は議場整理の爲めに退去を議長より命ぜられたし。

と警告す見やれば傍聽席近くに急進黨の彌次俗名西比利亞王今井剛氏等三四あり、何等か政府を攻撃して怒號するもの、如し、議長は其着席を注意し、西比利亞王暫し沈黙に入る。

こゝに於て中立黨の副總理動議を提出して曰くわが下院も參百萬圓を提供し、大御心に副ひ奉らんとす如何と、議長これを諾し、議場にはかれば勿論異議者なく可決す。

七尾港改築建議案。石川縣選出中立黨幹事津山玄道氏登壇、七尾港改築の日本文明に資する處最も大なるを述べ、金名鐵道の開通と共にこれを七尾港に延長せん事を望み、畫策事業の統計的豫算を朗讀して降壇。

腐敗に陥らしむるかを思ふては、國家の爲め自ら戰慄せざるを得ず、今や我國の將來は眼前にあり、一時の躊躇は一時の退歩也、斷然該案の可決を望むと痛論し降壇。忽ち起る拍手の響き見やれば今や保守黨を代表して小坂義雄氏は短軀膨大の身を運ひつゝ壇上に上れる也。

我輩は其精神には賛成なれ共、これを法律となすに至つては乍遺憾反對せざるを得ず、斯くの如き問題は宗教上道德上の問題にして家庭に一任すべきもの也。

懸河の辯氏が專攻せる風俗上史に論據を構へ斯くの如きは日本固有の美風を破壊するものにあらずして何ぞやと駁し、意氣揚々降壇。續て急進黨の飛將乾利一氏躍つて壇に現はれ。

該案が本日の議題に上さるゝ事一度新聞紙上に掲げらるゝや個人又は團體の名義を以て本案可決通過を望む旨書き送り越せる書狀既に山をなせり。

と開口一番諧謔を弄して議場を笑殺し、次で現

代青年の多くが一滴のアルコールの爲めに身を過る事實は國家將來の爲め痛嘆の至りにあらずやと脚を踏みならし、滔々社會上流者の墮落より中年者の責任を論じ最後に。

我々新進の國民は國家經濟上自衛上一杯の溢茶を嘔つて三々九度の茶碗を擧ぐる覺悟と習慣とな養はざるべからず。

と例の警句を吐き中立急進兩黨の喝采に迎へられて壇を降る。

政府委員兒玉九十氏登壇、例の睥睨的態度を持って、此問題や實に大和人士の消長に關係する大也然れ共これを法律として發布するは到底不可能の事に屬し、又政府の好まざる處たり、と一步其所説を敷衍して法律實施と警官増加との關係を述べ、否決を望みて降壇。

次で中立黨今村眞彦氏發言を求めて壇上に現はれ、本案は決して杜撰なるものに非らず又左迄苛酷なるものにあらずと開陳し政府は警察官を

何の爲めに置くやと切込み、道德上に於ける酒害の大なるを論じ降壇。

今村氏と引違へて急進黨の蠻組領袖中村敏氏登壇。

私は百姓議員ぢや、私の意見は都下各新聞紙上に發表し置きたる通り、青年に酒は有害なるのぢや。

と咄々の辯に似て然らざる快辯を振り大河の九天より落つるが如く雄渾なる思想を吐露して反對黨を論駁し降壇。

次に河合君登壇、鑛山國有の建議案に付き説明し九名の委員附托となり直に當日の大問題海軍擴張案討論に入る。

之れ内閣の死命に關する大問題也。議場寂として凄氣漲る。政府は海相代理をして説かしめ各黨亦其領袖を出して戦はしむ。見よ政府掩護の大任を負ふて保守黨總理宗玄順吉氏は之を容認し、急進黨は松島總理を送りて之に當らしめ中

立黨は武部進氏を以つて修正案を提出せしむ。此處に其内容を説くを憚る。

午後六時半議長は起つて閉會の辭を述べ尙今後共北辰講演部の發達の爲めには赤心尽さるゝあらむ事を望むと北辰會萬歳を三唱して散會す。

○慰勞會記

散會後金谷館に開く。昨日は敵も今日は皆味方、卓を囲んで談笑の聲洋洋として湧く。畑山委員の開會の辭あり。其れより晚餐初まり何れも胸襟を開いて談す。詩吟、浪花節等の興あり。宗玄委員の閉會の辭ありて一同十二分の快を尽して別れぬ。

此の一夜白雪至る頻りなりや。

いろくの聲

○ちと調べて来たか。急進黨の大坂選出代議士開會前同輩の肩をたたくてはナイチと調べて来たかと不安の体。

○恐ろしいぞ。書記官長か懲罰委員の報告をするさ出たり出た

り皆豪の者中立黨の一議員思はずあゝ恐ろしいぞ。

○農商務大臣と云ふ奴は。急進黨の一辯士工場法案反對演説の際まゝ不穩の言を用ふ途に一句農商務大臣と云ふ奴はと、農相啞然たり。

○水ばかりのむな。右黨の一議員滔々左黨を攻撃し其辯懸河の如く其事理明鏡に似たり左黨沈黙彌次ノノの聲爲めに出でず、たまゝ辯士水を呑むに當り左黨の一議員満足の怒聲を發して水ばかり飲むな。

○寒い寒い。文相今日はジャツ一枚のみと見ゆ。ストープにはあたれずあゝ寒い寒い。

○取消すもんか。中立黨の副總理演説中失言し急進黨員に其取消しを申込みしが暫らく悲觀せる中立黨の彌次これに聲援しはれつげるべしはねつげるべしと景氣付けれ副總理稍々樂觀の色あり頓狂聲を絞り一聲取消すもんか。

○これから云ふてよいやら。左黨の一代議士滔々辯説中ふと行きつまる右黨大にこれを罵り考へるならば歸つて考へるぞ怒鳴ればまつた〜余り澤山云ふことかあつて何れから云ふてよいやら。

○そら出るぞ。演説余り長きに過ぐる時は議長は小紙片に簡單にさ記しそつと後ろより舞ひ込ませしむ、急進黨の短軀議員今や卓をたたく脚を踏んで懸河の如く辯す保守黨漸く倦怠の色を示し降壇を促して曰くそら出るぞ。

○岡何だい。中立黨の飛將岡君緊急動議を提出し左黨の蠻員を

退去せしめんよはかる左黨の一セムクラスマート常の口調が
出て聞何だい。

○カイ腹がへつたよ。大藏大臣大食を以て名あり當日議事の進
行遅れ夕食時を過ぐる正に一時間たまりかた見え傍らの外
相にさくやいてカイ腹がへつたよ。

○飲酒にちん溺し 急進黨の一議員未成年者禁酒法案の賛成演
説を試み滔々前後を知らずこが大事と聲振りあげて諸君目令
の青年は飲酒にちん(耽)溺し……………。

○十五年間日本國內を歴視し。急進黨の福井選出議員工場法案
に反對し我輩は過去十五年間日本國內を歴視し……………と云へば
保守黨の一隅より物覺が悪いと見ゆるな。

○何でもないな。全院委員長閉會後乃公も始めて演壇に立つて
見たがやつて見れば何でもないな。

○緊急動議あり。晚餐會席上議員等空腹をこらへて御馳走を待
つ事久し保守黨の豪食議員呼ばくつて曰く議長緊急動議あり願
くは一瞬も早く御馳走をもたらす様周旋せられ度しと。

○困つたげな。議長四國辯を撤回し今日に懲罰々々で何ちや困
つたげな。

○ちと僭越ちやて。急進黨の進行博士盛んに動議を提出し討論
終結を望むなご日頃の熟練流石にうまくやりければ保守黨の田
舎代議士一体動議つて何ちやと僭越ちやて。

○漢文は旨いぞ。某員陪審制度の必要を説く細、言往々朗讀調
に入つて漢語を羅列する頗り也。保守の△ロホクン一聲叫んで



投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せごも姓名は必ず編輯委員まで御報道
あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされご或は政治を論し或は徳義に背くものは
一切掲載せず

明治四十四年四月十九日印刷
明治四十四年四月二十二日發行

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

發行所

吉村政行

生沼倍男

明治印刷株式會社

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

同縣同市高岡町九十番地

